
ツイン・マジック

ジュンペイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツイン・マジック

【Nコード】

N4264Q

【作者名】

ジュンペイ

【あらすじ】

お城からこっそりと抜け出して、街へ度々遊びに行っているマールリア姫。そんなある日、自分の親に対して反乱活動を行っている不思議な二人組みと出会う。

一話完結系の短編集です。物語の展開上、死に関するお話が含まれています。苦手なお方はご注意ください

21.

——ある所に、地球とよく似た名も無き惑星が在った。

自然に囲まれた緑豊かなその土地で、様々な「異星人」が生まれ、繁栄していった。

その「異星人」の姿形は、地球の人間となんら変わらない。大きく異なる部分といえば、彼らは生まれながらに「魔法の力」を全員持っているという所だ。それゆえ、自らの強さを主張する為の、無価値な争い事を度々繰り返している。

なお、この世界は魔法の存在により、科学の発達がとても遅れていた。

これは、魔法文明が発達している不思議な世界のお話——。

ムーン王国に静かな朝がやってきた。

太陽が徐々に昇って、眠っていた大きな街が目覚めます。明るい光が屋根に反射して、街全体がキラキラと宝石のように輝いていた。

ある広い部屋に、ある少女が、すやすやと小さな寝息を立てながら、ベッドの中で眠っていた。

暖かい陽の光がカーテンから射し込み、窓の外ではいつものように鳥達がチュンチュンとさえずって、朝の訪れをお知らせしている。

「——マールリア様、もう朝ですよ」

聞きなれた女性の声が、マールリアの耳に入ってきた。侍女のオリビアが、マールリアの部屋の扉をトントンと小さく叩いて、目覚ましの合図をしてくれている。

その音で薄っすらと目を開き、マールリアは布団を握ってぼんやりと天井を見つめた。……頭がスッキリとせず、まだまだ温かい布団で眠っていた気分だった。しかし、そういう訳にもいかない。なぜならば、マールリアはだらだらと寝ていてはいけない身分なのだからだ。

「朝食の準備ができております」

そう伝えると、オリビアは静かに去って行った。

マールリアは重たい瞼を擦りながら、まだ気だるい上半身を起こして、天蓋つきベッドから足を降ろした。そして、ワンピース形の黒いローブに着替え、つばの無い紺色の高帽子を被って部屋から出て行った。

部屋から出ると、灰色のレンガで敷き詰められた長い通路が続い

ている。マールリアは長い髪をなびかせながらこの通路を歩んで行った。そうしたら、マールリアの姿を目にした兵士や、メイド達が揃って声をかけてくる。

「マールリア様！ ご機嫌麗しゅうございます」

「お早う御座います、マールリア姫！」

マールリアは優しく微笑んで、兵士達に挨拶を返した。

「皆さん、おはようございます。今日もいい天気ですね」

それから、すれ違うメイドや、兵士一人一人に挨拶を交わしていった。

——これがマールリアの、毎日繰り返されるいつもの光景である。

『マールリア』は、このレンガ造りの大きなお城に、まったりと暮らしているお姫様だ。

サラサラで淡い銀色の長い髪に、大きくて澄み切った青い瞳、雪の様な白い肌を持っている。顔立ちは綺麗というよりは可愛い系で、体格はすらりと細身、身長は人並みである。胸の膨らみはそれなりにあり、それでいてウエストが細く引き締まっている。まるで、お人形の様な容姿をした十六歳の少女だ。

マールリアの母親『フローライン王女』は、このムーン王国を支配している。彼女は、女で主導権を握っている為に、世間から『鉄の女』と呼ばれていた。その上、彼女は高い魔力を持っていることで有名で、世界各国から恐れられている。

ところが反対に、娘のマールリアの評判は上々だった。『清楚で、おしとやかで、可愛いマールリア姫』と。城内はもちろんのこと、他国までその噂は届いていた。

そんな評判のいいマールリア姫。……実は彼女には『裏の顔』があるのだ。

マールリアは朝食等を済ませて、自分の部屋へと戻って来た。

扉を開けると、広い部屋の中央にポニーテールをした女性の姿がある。女性は、マールリアが戻って来たのに気がつく、頬を緩ませて歩み寄ってきた。

「マールリア姫！ お待ちしておりました」

この明るい声でマールリアに話しかけてきた女性は、侍女の『オリビア』だ。マールリアの身の回りのお世話をしてくれている。顔立ちは至って平凡で、どこにでも居るような容姿をした十七歳の少女だ。

「今日は、週に一度の『あの日』でしたよね？」

悪戯っぽい瞳で訊いてきたオリビアに、マールリアは祈るように両手を組んで答えた。

「ええ、今日は『あの日』なの。いつも通りお願いしていい？ オリビア」

「任せてください！」

自分の胸をポンツと軽く叩き、オリビアは自信たっぷりの返事をした。その後、ひとつに束ねた髪をサラリと降ろして、服を脱ぎ始めた。

マールリアも今着ている姫の服を脱ぎ、ワンピース形の白いローブに着替えた。次に、お尻まである長い銀髪をゴムでゆったりと結ぶ。

着替えが終わり、後ろを振り向くとオリビアが自分とそっくりな姫姿になっていた。言わゆる『影武者』というやつだ。

見事に姫へと変装したオリビア。彼女は強気な顔で微笑んで、マールリアに向かってぐつと親指を立てた。

「準備ができましたっ！ マールリア様、お気を付けてお出掛け下さい」

「いつもありがとう。留守番よろしくね！」

オリビアに挨拶した後、マールリアは大きな窓を両手で開けて、ひょいと片足をかけた。

この部屋は二階だが、外に大きな木が生えている為に、容易く降りることができる。

マールリアは窓から身体を乗り出し、すぐ隣にある太い木の枝の上に飛び移った。そして大きな幹部分まで歩き、両手足を使ってスルスルと木から降りて行った。その難なく動く姿は、全てが慣れている様子である。

城の庭に足を付けて一息つくと、今度は高い城壁に両手をかけて登り始めた。

そうして兵士に見つかることも無く、城壁を越えてマールリアは街へ走っていった……。

——そう、マールリアの『裏の顔』とは、城からこっそりと抜け出すことであった。

お姫様が一般市民のふりをして、一体何をしているのか？ それは『恋人に会っている』や、『悪者を退治している』のような、大それたことではない。

彼女がお忍びでやっていることは、とても可愛らしいものだった。それは、単なる『お友達とお買い物』である。

はたから聞くと、『なんだ……、お買い物ぐらい……』と思うかもしれない。だが、城から滅多と出ることが出来ないマールリアにとっては、真新しく、ドキドキが止まらない幸せな時間なのだ。週に一度、窮屈な城から飛び出して、友達と街で遊ぶことが彼女の唯一の楽しみだった。

いつものように城を抜け出し、いつものように友達と待ち合わせをしているマールリア姫。ところがこの日、彼女の生活が一転してしまう、『不思議な人達』と遭遇することになるのだ。

*

ムーン王国の城下街――。ムーンの土地の中心部にある大きな街だ。人口が多く、店や施設が沢山建ち並ぶ大都会である。

外は天気良くて、程よい暖かさだった。四季がないこの世界では、毎日が過ごしやすい気候となっている。

マールリアは城下街内にある、公園の中へ足を踏み入れた。この公園は決して広くは無いが、周辺が緑の木々に囲まれていて、城の中には無い美味しい空気が味わえる。さらに、ここを抜けると、活気に満ちている大通りへの近道にもなるのだ。だからマールリアは、ここの公園が大好きだった。

時折吹く爽やかな風に、木々の葉がさわさわと静かな音を立てていた。その囁くような音を聞きながら、マールリアは目を細めて、雲ひとつ無い大きな空を眺める。明るい外の世界は、目に映るもの全てが色鮮やかに見えた。

（やっぱり外は気持ちがいい……）

美味しい空気を一口吸い、風で揺れる前髪を片手で押さえて、マールリアは公園内を進んでいった。

公園の中央には、胸から上部分しかないフロライン王女の小さな銅像が置いてある。そこに、ぽつんと一人の女の子が立っていた。「マールヤ、おっそーい！」

女の子は近づいてくるマールリアに向かって、不満げな声を上げた。両手を腰にあてて、少しむくれている様子だ。

マールリアは女の子の前で足を止めて、なだめる様な笑顔で話しかける。

「ごめんねルイザ、ちょっと遅刻しちゃった！」

「まっ、お姫サマだからしょうがないネ。今日はどこへ遊びに行っ
つか？」

いつもの柔らかい表情に戻って、ルイザはマールリアの肩を軽く叩いた。

『ルイザ』はマールリアが城を抜け出した時に、偶然知り合った同年の友達だ。くりつとした青い瞳に、肩まである銀髪は毛先が外側にピンピンとハネている。紺色のドレススカートををはき、腰の後ろに大きな赤いリボンをつけている。見るからに『元気な可愛い女の子』だ。体格は中肉中背だが、胸は……、出ているのか出ていないのか、分からないぐらい小さめである。

『マールヤ』というのは、マールリアが街中で姫とばれない様に、ルイザが付けてくれたあだ名だ。

ルイザはポンツと自らの手を拳で叩き、元気な声をあげた。

「そうだ。ロップ通りに新しい雑貨屋さんができたの。そこ行こ！そこ行こ！」

「私は街のことあんまり分からないから、どこでもいいよ。ルイザにお任せ」

「じゃあ、そこで決定ねっ！ しゅっぱーっ！」

ルイザは太陽のように明るい表情をして、両拳を高く上げた。そしてマールリアの手を握り、ぐいぐいと前へ引っ張って行った。

こうして二人は、女の子パワー全開で様々な店を回りまくったのであった。

ずっと歩きつ放しだった二人は足が棒になってしまい、喫茶店で休憩することにした。

「はー、疲れたけど良い買い物したねー！」

ルイザは大きな息を吐くと、喫茶店の座席にドスンと座り、両腕を上げて背伸びをした。

「本当！　ちょうど髪留めを探していたのよね」

言いながら、マールリアは先程、雑貨屋で買った赤いシュシュを袋から取り出した。早速両腕を後ろに回して、細いゴムの上から赤いシュシュを二重に結んだ。

「どうかな？」

そう尋ねると、マールリアは上半身を横にひねらせて、ルイザに結び目を見せた。

「うん似合うじゃない、マーヤ。良かったわね！」

ルイザは両手で頬杖をついて、にこにこ笑いながら答えた。
褒められたマールリアは、すっかり上機嫌になった。

「ねー。マーヤは、お母さんと相変わらず仲良くないの？」

ジューズのストローをくわえたまま、ルイザは聞き取りにくい声で訊いた。ルイザの言う『お母さん』とは『フローライン王女』のことである。

「うん、最近は特にひどいの。会っても用件しか話してくれない……」

マールリアはそう答えると眉間にしわを寄せて、グラスを持ったまま俯いた。

（仲悪いというか……、娘として愛されていないみたい……）

マールリアは母親が王女のために、長い間放置されて育っている。

身の回りのお世話は侍女やメイド達がしてくれているが、顔を合わせても用件しか口にしない母親のそっけない態度が、マールリアは寂しくてたまらなかった。

「昔は優しくったんだけどなあ……」

マールリアは右手で頬杖をついて、窓の外をぼんやりと眺めながら呟いた。大きな瞳を細めて、母親が温かくて優しくった頃をおもむろに思い出す。

「このムーン王国を支配する鉄の女だもんね。テキパキと仕事してそう」

ルイザは、ストローでぐるぐるとグラスの中をかき回した。

「『鉄の女』かあ……。世間ではそう呼ばれているのね。

お母様が何をしているか知らないし、知りたくも無いなあ……」

「うんうん。知らない方が幸せかもよ？ ささ、次の店に行こうー！」

ルイザは何かを誤魔化すように、わざとらしく明るい声を出した。そして、ストローを持ち、ずずつと音を立てて飲んだ。

そんなやりとりをしながら、残ったジュースを飲み干して、二人は喫茶店を後にした。

*

喫茶店から出た二人は行き先が決まらずに、途方に暮れながらブラブラと大通りを歩いていった。ずらりと並ぶ店と、行き来している人達を次々に横切っていく。

ふいにルイザが足を止めて訊いた。

「マールヤ占いって好き？」

「占い？」

その質問に、マールリアはきょとんとした。今まで占いなんてしてもらったことが無い。

ルイザが人差し指を立てて、誇らしげな顔で話し出した。

「よく当たるって評判の占い屋があるの。」

「マールリヤはお母さんのことで色々と悩んでいるみたいだから、占ってもらったらどう？」

「うん、じゃあ占ってもらおうかな」

もしかしたら、母親と仲良くなれる話が聞けるかもしれない。そう思ってマールリヤは、笑顔で首を振った。

ルイザの話によると、その占い屋は裏通りにあるらしい。二人は大通りから外れて、細い路地裏へ入っていった。

路地裏は背の高い建物に挟まれていて、昼間なのに薄暗い。人通りも殆どなくて、辺りはしんと静まり返っていた。活気に賑わっている大通りと比べると、ここの空間は別世界のようだ。

少し怖くなった二人は、腕を組んでピツタリと身を寄せながら歩いて行く。

「こ、こんな所に占い屋なんて本当にあるの？ ルイザ」

マールリヤは初めて通る、怪しい雰囲気な場所に不安を感じ、身を縮ませながら歩いていた。

「確かこの辺のはずんだけど……。私も人から聞いた話だから良く分からない」

とルイザはきよきよと首を回しながら、返答をする。

「もう、無責任ね」

マールリヤは、ルイザを呆れ顔で見つめた。でも、そのいい加減な所がルイザらしいなと、心の中で思った。

やがてそれらしい店を発見した。普通の一軒家のような建物の入り口の前に、木でできた小さな立て看板が置いてある。見ると、その立て看板には『占い屋・一回千スター』と書いてあった。

「あつたあつた！」

無事にお店を発見でき、ルイザは右手を胸に添えて安堵の息を吐

いた。

すぐさまルイザは木の扉の前へ立ち、口元に両手を立てて大声をかけた。

「ごめんくださーい！」

……しかし、返事は戻って来ない。

「看板が出ているし、営業中のはずよ。入っちゃおう！」

そう言っているとルイザは木の扉を乱暴に開けて、ズンズンと中へ入っていった。

こういう強引な所も実にルイザらしい、とマールリアは思いながら店の中へ足を進ませた。

そこは狭くも無く、広くも無い部屋だった。

店内は少し薄暗く、紺色のカーテンで取り囲まれていて、天井に月や星の模型が吊り下げられている。

部屋の奥にある横長の台の上には、綺麗な水晶玉と小さなオイルランプが置いてあった。風も無いのに、ランプの炎がゆらゆらと静かに揺れ動いている。とても神秘的な空間に感じた。

（何だか不思議な場所……）

マールリアは天井を見たり、壁を見たりと首を回し続けた。

暫くすると、占い師が奥の扉から出てきた。

「いらつしやいませ」

その『占い師』はマールリア達と同じ年ぐらいで、気の強そうな顔立ちの女性だった。髪は銀色のウェーブヘアで、お尻の辺りまで長さがある。ロングスカートを引きずり、足音を立てずにゆつくりと歩く姿は、この部屋と同じようにミステリアスに見える。

ルイザが人懐っこそうに微笑み、両手のひらでマールリアの背中

をポンと押した。

「この子を占ってやってくださいなっ！」

「よ、よろしくお願いしますっ！」

ガチガチの硬い表情で、マールリアは占い師にぎこちないお辞儀をした。

そんなマールリアの顔を見て占い師は優しく微笑み、右手のひらをスツと差し出して席の方へ向けた。

「有難う御座います。それでは占いますので、そちらの席へどうぞ」
マールリアは占い師の指示に従って、水晶玉が置いてある台の前に腰を降ろした。ルイザはマールリアのすぐ後に立って、のんびりと見学をしている。

占い師が台の奥に座った。

「では、始めます」

と一言告げ、目を閉じて水晶玉に両手のひらをあてる。

マールリアは真面目な顔つきで、足の上に両手を重ねて置いた。

（き、緊張する……！）

初めての占い体験に、マールリアは肩に力が入って体がカチコチとなっていた。

…… 占い師の沈黙が続く。

マールリアは手に汗をにぎりながら、目を閉じている占い師の顔をじっと見つめた。極度の緊張で、ほんの僅かな時間がとても長く感じる。

「あなたは……」

占い師が静かな声を出して、ゆっくりと目を開いた。

マールリアは占い師の次の言葉を待って、ゴクリと喉を鳴らした。胸の中が期待と不安で一杯だ。

「今日、運命的な出会いをしますね」

占い師がスパッと言った。

「――へっ?!」

マールリアとルイザは驚いて、同時に高い声をあげた。

「あなたの人生が、大きく変わる出会いです」

「私の人生が大きく変わる……?」

意味深な結果を告げられたマールリアは、占い師に問いかけるように呟いた。

すると突然、ルイザが眉を上げて、占い師の顔に指を差した。

「ちょ、ちょ、ちょ、もう昼過ぎなんですけど! この後すぐに出会ってこと!？」

「さあ? そう結果が出たので、私には何とも」

占い師は落ち着いた声を出し、つーんと顔を横に向ける。

「何それ、インチキなんじゃないの？」

本当は占いなんてできないから、適当なこと言ってごまかしているんでしょー!」

ルイザは暴言を吐くと、占い師に向かって両腕を伸ばし、台から身を乗り出した。

それを見たマールリアはぎょっとし、今にも暴れ出しそうなルイザの肩を両手で押さえた。

「ちよつとルイザ、だめよ!」

もがいている二人を無表情な顔で見ながら、占い師は立ち上がった。

「さあさあ、お客様。今日はそろそろ閉店ですよ。もうすぐ公開処刑の時間じゃないですか!」

占い師の発言を聞いて、マールリアとルイザはピタリと動きが止まる。

「公開処刑っ!？」

思わずマールリアは声のトーンを上げてしまった。

「あら、珍しいお客様ですね。ご存じないのですか? 今日は処刑の日ですよ」

「何……それ……」

目を揺れ動かしながら、マールリアは恐る恐る占い師に問いかけた。ひょっとして……と、予想もしたくないようなことが、マールリアの頭の中によぎってくる。

「マールヤは……、知らないんだよね……」

気まずそうに後ろを向き、ルイザがマールリアから目をそらした。その素振りから、ルイザが何かを隠していることがすぐに分かった。そんな動揺気味のマールリアを気にした様子もなく、占い師は両腕をお腹に回してにっこりと笑った。

「フローライン王女に逆らった、罪人達の公開処刑ですよ。いつもやっているじゃないですか」

「……！！」

それを聞いて、マールリアは目の前が真っ白になった。

「有難う御座いましたー！」

と占い師の声が響いて、扉が閉まった。

店から出た二人は、ずっしりとおもりが付いたような重たい足取りで、路地裏を歩き始める。

占い師の口から信じ難いことを聞いて、マールリアの心は深く沈んでいた。この世の終わりのような暗い表情で、地面を見ながら歩いて行く。

（お母様が、公開処刑を行っていたなんて……！）

まさにショックを隠しきれない状態だった。

深く落ち込むマールリアの横顔を見ながら、ルイザは静かに声を出した。

「やっぱりマーヤに話しておくべきだったね……」

「……」

マールリアは顔を上げて、無言でルイザの目をじっと見た。

「あのね、あなたのお母さんは……」

——ルイザから聞いた内容は酷いものだった。

魔法戦争で数々の国と街を崩壊、盾突く者は処刑、重い税金、街で王女の悪口を言う拷問等……。

「公開処刑も見せしめなのよ。私に逆らうと、こうなるぞってね」
そう言いながらルイザは舌を出し、手のひらを水平に向けて首を切るような仕草をした。

マールリアは更にショックを受けた。母親の行ってきた数々の酷いことを聞いて……。

「そんな……」

私は……、お母様がしていたこと、何にも知らなかった……。何に

も……」

マールリアは両手に拳を握って、小刻みに震わせながら、途切れ途切れの小さな声を漏らした。まだ信じられなくて、受け入れられなくて、胸が痛くて苦しい。

城の中で同じ日々を繰り返している箱入りお姫様のマールリアは、母親がどんな政治を行っていて、この国や世界がどのような状況になっているのか、全く知らなかったのだ。

「ずっと、だまってごめんね」

ルイザは申し訳なさそうな表情をし、マールリアに両手を合わせて謝った。

それに言葉を返さず、マールリアは堅く口を閉じて俯いた。決して今まで教えてくれなかった、ルイザに対して怒っている訳ではなかった。身内の悪い話を伝えることが、容易いことじゃないのは重々承知だ。

「ねえルイザ」

マールリアは足を止めて、ルイザに声をかけた。

呼び止められたルイザも立ち止まり、バツが悪そうな顔でマールリアを見る。

マールリアは真剣な表情をし、自分の胸に右手を添えてルイザに顔を近づけた。

「私を、その公開処刑の場所まで連れて行って！」

「えっ……！」

甲高い声を出して、ルイザは目を見開いた。

マールリアは顎を少し引いて、ルイザの目を強く見つめる。

マールリアは、どうしても母親がやっていることをこの目で確かめたかった。

「見たいの……？」

ルイザの問いかけにマールリアは表情を変えず、こくりと首を縦

に動かした。

「目の前で人が殺されるのよ？ あ、でももしかしたら……」

ルイザは言いかけた言葉を飲み込み、人差し指を顎に当てて、視線を上へ向けた。何かを考えているようだ。

その様子をマールリアは不思議に思い、首を傾げた。

「何？」

直ぐにルイザは表情を戻して、首を左右に振った。

「うっん、何でもない。分かった、連れて行ってあげるね」

*

二人は、城下街の中にある巨大な中央広場へやって来た。広場の中央には大きな高台が見える。ルイザの話だと、この場所は主にイベント等で使われているとのことだ。

既に大勢の人が集まっていた。この数では、はぐれてしまったら迷子間違いない。

マールリアは初めてこのような場所へ来て、胸の鼓動が高まっていた。緊張とむせ返るような人込みで、息が詰まりそうだった。

なるべく高台の近くまで寄ろうと、二人は離れないように手を繋いで、人にぶつかりながら無理やり間を抜けていった。

「マーヤ、こっちこっち！」

ルイザが大きな声を上げながら、マールリアの手をどんどん前へ引っ張って行く。

ルイザに引っ張られて、マールリアはもう一歩前に進もうとしたが、人間が密集しすぎて動けなかった。

マールリアは足を止めると、ぱっとルイザの手を離した。

「もうちょっと前に進みたいけど、これ以上無理だわ」

「うん。この辺だったら、大丈夫かな。ギリで高台の声が聞こえると思うよー」

とルイザは額に右手を当て、高台を眺めながら言った。

マールリアも背伸びをして、中央の高台へ視線を向けた。

高台の上には灰色のローブを着たムーン城の兵士が数十人と、両手を後ろに縛られた罪人が一人立っていた。隊長らしき兵士は、赤い模様の入った灰色のローブを着ている。

他には、木で出来た小さな台がひとつ置いてあった。一見、背もたれが無い小さな椅子のようだが、これは罪人の首を固定する『断頭台』という物だ。人の首が綺麗にはまるような、丸いくぼみがあるだけの簡単な作りである。

（やっぱり本当なのね……）

公開処刑だなんて嘘であってほしい……と願っていたが、マールリアはここに来て『真実』を目の当たりにした。もう全てを受け入れるしかない。自分の母親が『恐怖政治』を行っているという事実を。

それにしても、物凄い人の数だ。周りは見渡す限り、人の頭と背中の中の光景である。

マールリアは周囲を見渡しながら、ルイザに訊いた。

「ね……、この人達みんな、罪人が処刑されるのを見たくて来ているのかな？」

「さうね。ただの野次馬かもしれないし、娯楽としている人もいると思う」

「娯楽かあ……」

マールリアは、げんなりとした。あの占い師も娯楽で見に来てい
るのか？ と思った。

「でもひょっとしたら、別の何かを期待している人達もいるかもね
！」

ルイザが妙に嬉しそうな声を出した。

その言葉にマールリアはきょとんとして、ルイザの方を向いた。
「別の何か？」

すると彼女は人差し指を立て、微笑みながらウインクをしてこう言った。

「正義の味方ってやつ！」

急に市民達のざわめきが消えた。どうやら処刑が始まるらしい。市民達は全員顔を動かして、中央の高台に注目し始めた。

「これよりフーライン様に逆らった、反逆者の処刑を決行する！」
高台の上で、兵士の一人が高らかに叫んだ。次に、大きな斧を持った執行人が、ゆっくりと高台へ上がって来る。

その黒光りする巨大な斧を見て、マールリアの全身にぞわっと鳥肌が立った。あんな恐ろしい物で斬るのかと想像すると、自分の首の辺りがムズムズとして変な感覚に陥る。

罪人は無理やり兵士から押さえつけられて、断頭台に頭を固定された。そして、執行人が大きな斧を高く振り上げる。

——その場にいた全員が、ごくりと息を呑んだ。

それは、目をそむけたくなるような恐ろしい光景だった。……まるで悪夢でも見ているようだ。

息が上がり、マールリアの手のひらから、じんわりと汗がにじみ出てくる。

（ここで目をそらしちゃダメなんだ。これが母のやっている現実……！）

そう自分に言い聞かせ、力強く握った両拳を小刻みに震わせながら、ぐつと唇に力を入れてマールリアは高台を凝視する。

（……あれ？）

マールリアは怪訝な顔をした。何故か執行人が斧を振り上げたまま、いつまでも降ろそうとしない。

ざわざわ……。市民達が首を左右に回して、ざわめき始めた。

「お、おい、お前どうした。早く降ろせ！」

隊長らしき兵士が、執行人に指を差してせかせる。しかしその命令を聞いても、執行人はまだ斧を高く振り上げたままだ。

「た、隊長……！ 腕が動きません……！」

執行人が、ふにやふにやの情けない声を出した。

「な、何っ！？」

隊長が驚いて執行人に歩み寄った、その時だった――。

「こーんなにスゴイ魔法が使えるのは、この世で一人っ！！」

どこからともなく男の叫び声が聞こえてきた。それと同時に、市民達がワツと一斉に騒ぎ出す。

「来た！」

「来たぞ」

「待ってましたっ！」

「ツイン・マジックの天才魔導師、二号参上っ！！」

再び男の強気な声が響く。

「えっ？ 何っ？」

マールリアはその声に驚いて、首を動かしながら辺りをぐるぐると見回した。どこから聞こえたのか探す、周りは人だらけで声の主がどこにいるのか分からない。

そうしたら別の場所で、また叫び声が響いた。

「カッコつけている場合じゃないでしょっ！ 二号！」

こちらは女の声だ。

「えいっ！」

女が大声を上げた。その瞬間、声がした辺りからキラリと光って何かが飛んでいった。

その光った物は、勢い良く高台へ向かって飛んでいく。

「うわっ！ 何か投げたぞ！」

兵士達は慌てて、飛んできた物を避けるように左右に散った。

——ザクッ！ と、何かが切れたような鋭い音が鳴った。

すると突然、断頭台に頭を固定されていた罪人が、両手で台を掴んで立ち上がった。どうやら罪人を縛っていたロープが切れたらしい。

「ビンゴッ！ さすが一号！」

と嬉しそうな男の声。

すぐさま罪人は執行人に勢い良く体当たりをして、高台から飛び降りた。

「あっ！ コラッ待てー！」

兵士の一人が叫んで、片腕を伸ばした。

しかし罪人は、あっという間に大勢の人ごみの中へ紛れてしまった。こうなったら、もう探し出せない。

「クソッ、やってくれたなツイン・マジック！ 今日こそひっ捕らえてやるぞっ！」

隊長は激怒した様子で、台の上から大声を張り上げた。その後、兵士達は槍を片手に持って、高台から降りて行った。

一部始終を眺めていたマールリアは、魂が抜けたようにポカンとしていた。まるで、突然現れた『ツイン・マジック』という人達に、心が奪われた様に——。

「——マーヤ、マーヤ。大丈夫？」

とルイザの声。

はっとマールリアは我に返った。

マールリアは、とっさにルイザの肩を両手で掴んだ。

「ちよっとルイザ！ 何今の人達？ ツイン・マジックって？」

興奮してルイザを激しく揺すりながら、大きな声で問い詰めるマールリア。

「落ち着いてよ、マーヤ。あの人達のことを教えてあげるから」

ルイザは冷静な声を出して、マールリアの両腕を持って手を引き離した。どうやらツイン・マジックが現れたのは、ルイザの予想通りの展開だったようだ。

ルイザは人差し指を立てて、真面目な顔で説明をし始めた。

「ツイン・マジックはこの国の反乱グループで、ああやって罪人をよく助けているの。」

そんなに大きな活動はしていないけど、なかなか捕まらないし、正体も分からないしでフローライン王女も結構手を焼いているみたいよ」

ルイザの話聞いて、マールリアは呆然として呟いた。

「反乱グループ……！」

「そつ！ 要するにマーヤの敵ってワケ！」

そう言うところルイザは楽しそうに笑って、マールリアの肩をポンポンと軽く叩いた。

ツイン・マジックが現れて、どれくらい経っただろうか……。祭りが終わったかのごとく広場から市民の半分以上が立ち去って、既に走り回れるぐらいの隙間が出来ている。

先程からマールリアは、ツイン・マジックの二人が気になっていた。何故だか理由は分らないが、とにかく気になって仕方がなかった。マールリアの胸の奥が、ざわざわと騒がしくて落ち着かない（さっきの二人はどこに……）

マールリアはしきりに首を回して、広場を見渡した。けれども、二人の姿は見当たらない。

槍を持った兵士達も四方八方へ走って、ツイン・マジックの二人を探していた。

「マールヤ、もう別の場所に行こうよー」

ちっともその場から動こうとしないマールリアに、ルイザはしびれを切らして促した。

「いたぞー！ あそこだっ！！」

急に、兵士が大声を張り上げた。

マールリアはぎくりとして、声が聞こえた方へ顔を向けた。見ると、兵士の一人が腕を伸ばして遠くを指差している。

「全員追えー！！」

その一声で他の兵士達が、指し示す方向へ走り出した。

「ルイザッ！ 私達も行くわよ！」

マールリアはそう叫ぶと、大きく足を動かして兵士達の後を追って行った。

「えっ？ ちょっとマールヤッ！」

ルイザは飛び上がるような声を上げ、ふいに走り出したマールリアにつられて足を動かした。

「待てー！！」

兵士の一人が大声で叫んだ。

マールリアは目を凝らして、走っている兵士達の先を見つめた。すると、白いローブを着た二人組みが、人を器用に避けながら奥へ奥へと逃げて行っている。ローブの裾をヒラヒラと、はためかせながら。

白ローブの二人は中央広場から抜けて、そのまま街の中へ走って行った。

兵士達もその後を追う。更にその後ろから、マールリアとルイザが追って行った。

緊迫した追跡はしばらく続いた。兵士達の背中を見失わないように、マールリアとルイザは懸命に地面を蹴って走って行く。

「あれっ」

いきなりルイザが、マールリアの背後で高い声をあげた。

「はあ、はあ、どうしたのルイザッ？」

マールリアは息を切らしながら、顔を後ろに向けて問いかけた。ルイザは腕を伸ばして、今走っている道の先を指差した。

「この先は確か行き止まりよ……！」

*

兵士達が角に曲がって行くのを確認して、二人は足を止めた。

マールリアは、壁を盾にして覗き込む。ルイザはマールリアから少し離れて、様子を見ている。

その道は周りが高い塀に囲まれていて、奥は行き止まりとなっていた。塀が高すぎて登るのは不可能だ。

マールリアの視界に、兵士達の背中が入る。数は五人だ。その奥に白ローブの二人が見える。

マールリアは白ローブの二人の顔を見ようとしたが、鼻の辺りまでスッポリとフードを被っていて、うかがうことができなかった。

「バカな奴らめ！ 追い詰めたぞ！」

兵士の一人が槍を構えながら声をあげた。

白ローブの二人は、左右に首を回して逃げ道を探している。けれども、どこをどう探しても逃げ道は無い。

「まずいわね……」

と女が深刻な声を出した。

二人は両腕を広げて、一歩、一歩と後ろへ下がっていった。兵士達もそれに合わせて、ゆっくりと前へ進んでいく。

……じりじりと兵士達に迫られて、白ローブの二人はとうとう壁際まで追いやられた。

「何とかしてよ二号！」

女が隣に居る男の二の腕を掴んで、ゆさゆさと体を揺さぶりながら必死な声を出した。

しかし、そんな女の訴えも虚しく、男はぐったりとその場へうずくまった。

「さっき魔法使ったから魔力が……！」

それを見て、女は両拳で男の頭をポカポカと叩き始めた。

「もー、バカッ！ カッコつけるからでしょっ！」

「イテテテ、叩くなって！」

男が両手で頭を押さえながら、怒った声をあげた。その様子から、女の方がとても気が強そうに見える。

やがて、二人の目の前まで来た兵士達は、両腕を少し上げて槍先を二人に向けた。

「ついに年貢の納め時だな、ツイン・マジック！」

二人には、兵士達全員の槍先が向けられていた。

「こうなったら、一か八かで……」

女が両腕を前に伸ばして、手のひらを兵士達の方へ向けた。

「フラッシュ・ライトッー！！！」

女が叫んだと同時に、両手のひらからカッと眩しい光が飛び出てきた。

辺り一面が真っ白に光る――！

「うっ！」

激しい眩しさに耐えられず、兵士達は槍を持った手を離し、両腕を上げて顔を覆った。槍が、カラーンと金属の音を立てて落ちていく。

「まっ、眩しい！」

「何も見えんっ！」

「クソッ、目くらましか！」

兵士達は、次々に苦しそうな叫び声を上げた。凄まじい光に兵士達は身動きが取れず、目を押さえていた。

「今よ二号！ 逃げるわよっ！」

すぐに女は座っている男の腕を掴み、引っ張って立ち上がらせた。「了解っ！」

そして白ローブの二人は走り出して、するりと兵士達の間を抜けていった。

「こんな目くらましに騙されるな！ 追え！」

隊長が目を押さえながら、白ローブの二人に指を差して命じた。

「はっ！」

兵士達は声を揃えて出すと、かがんで槍を拾い始めた。

一方マールリアも、女の目くらましを見てしまつて身動きが取れなかった。目の前でチカチカと星のようなものが光って、全く周囲が見えない。と、誰かが走っている足音が次第に近づいて来る。

その時、突然女がマールリアにぶつかってきた。

「きゃっ！」「わっ！」

ドンツと鈍い音と共に、女とマールリアは同時に高い声をあげた。ぶつかった衝撃で、マールリアの顔に痛みが走る。

叫び声と共に、マールリアの両手のひらから大きな銀色の光の玉が飛んでいった。

「えっ?!」

それを見た兵士達は大きく目を見開いて、その場に固まった。大きな銀色の光が、兵士達に向かって飛んで来る。

「う、うわっ!」

兵士達はうろたえた。両腕を開いて、首を回しながら逃げ道を探している。しかし、この行き止まりの路地には逃げ道が無かった。バシッという大きな衝撃音が響いて、光の玉が兵士達に命中した。

「うわああー!!」

「ギャッー!!」

兵士達が大声で悲鳴を上げる。先程女が使った魔法とは違って、今度は兵士達が大きく吹っ飛んでいった。

勢い良く飛ばされた兵士達は、奥の壁に激突して倒れていった。

……そのまま兵士達は白目をむき、のびてしまった。

——辺りに静けさが戻る。

マールリアは伸ばしていた両腕を、ゆっくりと下ろした。

とりあえず何とかなったと安心すると、一気に緊張感が抜けていき、どっと脱力感が全身を襲う。

「えっ……、あなた……?」

白ローブの女が、マールリアの方を向いた。女の表情はうかがえなかったが、とても驚いた声だった。『どうして私達を助けたの?』とでも言いたそうな、そんな声。

「マーヤ、マーヤ……!!」

ルイザが泣き声でマールリアの名前を呼びながら、両腕を伸ばして駆け寄ってきた。

「ルイザ!」

マールリアは安心した顔で微笑んで、走ってくるルイザの方を向

いた。

「マアヤ、無事で良かった」

ルイザは両腕をマールリアの首に回して抱きついた。そして、マールリアの首筋に顔を埋めて、ぐずぐずと泣き始める。

マールリアも、ぎゅっとルイザを抱きしめて、お互いの無事を確かめ合った。

白ローブの男が歩いて来て、マールリア達の横に止まった。

「……」

マールリアは黙り込んで、男の方に顔を向ける。やはりフードを目深にかぶっていて、口元しか見えない。

「驚いたな、ここにも天才がいるなんて。あ、でも俺のほうが上だけど！」

男は腰に片手を当てて自信満々に言った。

マールリアはルイザを抱きしめたまま、顔の見えない男を冷静に見つめた。

（この人達が、ツイン・マジック……。反乱グループで、私の敵……）

何故かこの二人は全く嫌な感じがしない。自分の敵なのにだ。

いきなり女が三人の間に割って入り、片腕を振ってバンツと男の背中を叩いた。

「バカッ！ 撤退よ！」

「ハイ、ハイ」

「返事は一回！」

「あいよっ！」

妙なやりとりをしながら、白ローブの二人は消えるように去っていった。

マールリアとルイザも、この場所から離れることにした。

*

マールリアは、とぼとぼと大通りを歩いていった。
今日一日色々なことがありすぎて、頭の中が整理できずにゴチャ
ゴチャとしている。もはや周りの景色も目に入らない。

隣では、先程まで顔をくしゃくしゃにしていたルイザが一変し、
ルンルンと嬉しそうに跳ねながら歩いている。

「本当に驚いたー！ マーヤがあんなにすごい魔法を使えるなんて」
ルイザが感嘆の声を出し、目をキラキラと輝かせてマールリアの
顔を見ている。

「攻撃魔法ぐらい皆使えるでしょ？ 月星人^{つきせいじん}なんだし……」

マールリアは目を閉じて、両手を上げて肩をすくめた。

『月星人』とはマールリアや、ルイザ達の人種だ。

「魔法は殆どの人が使えるけど、一般人は人を吹っ飛ばせる程の威
力はないよ？」

せいぜいグラスを倒せるぐらいかなあ」

「そうなんだ……」

マールリアは下を向いて、ルイザに空返事をした。箱入りお姫様
のマールリアは、当然一般人の魔力の強さなどは知らない。

「やっぱりフローラインの娘なのね、すごい魔力だわ！」

ルイザが嬉しそうに、両手を胸の前で組んだ。その目は尊敬の眼
差しだった。

*

陽は落ちて夕方になっていた。マールリアはルイザと別れて、城
の庭へと戻ってきている。

マールリアは両手足を使って木に登り、太い枝の上を慎重に歩い
て行った。そして、自分の部屋の窓をコンコンと拳で叩く。

すると大きく窓が開いて、姫姿のオリビアが顔を出してきた。

「お帰りなさいませ、マールリア様！」

「ただいま、オリビア」

マールリアは右手を軽く上げて挨拶をし、疲れた笑顔をした。

……こうして、マールリアの目まぐるしい一日が終わったのである。

その日の夜、マールリアは布団の中で、右に左にと何度も寝返りをうった。

ツイン・マジックの登場で強烈なインパクトを受けたマールリアは、母親のことで深く落ち込んでいたのをすっかりと忘れていた。

（正義の味方ツイン・マジック、か……）

マールリアは『彼ら』のことを考えると、何故だか胸が高まって今夜は寝付けそうになかった。

【第一話・完】

マールリアの一日は、殆ど魔法の修行や勉強で終わってしまふ。

ツイン・マジックと出会って、数日が経った朝だった。

四方をレンガの壁に囲まれた広めの部屋の中に、マールリアと銀色の長いひげを生やしたおじいさんがいた。

部屋の中央には、木で出来た長テーブルと椅子、正面には小さな黒板がある。

その小さな黒板の前で、おじいさんは分厚い本を両手で持ち、ぶつぶつと読み上げていた。

今日の魔法の勉強は筆記だ。

マールリアは横長の机の上で頬杖をついて、椅子に腰掛けていた。視線を上に向けて、先日出会ったツイン・マジックの二人を、ボーンッと思い浮かべる。

彼らはどんな人達なんだろう？ 何故あんな活動をしているのだろうか？ 他にメンバーはいるのだろうか？

……こんなぐあいには、次々と疑問が生まれてくる。もうマールリアの頭の中の半分以上が、ツイン・マジックのことで一杯だ。

そんなマールリアの様子を見て、おじいさんが呆れた顔で口を開いた。

「姫、ちゃんと聞いておるかのう？」

「あ……。じい、ごめん」

その声で我にかえったマールリアは、頬から手を外して姿勢を正した。

じいの話は右の耳から左の耳へ突き抜けて、全然頭の中に入っていなかった。

「フオッフオッフオッフ、珍しく上の空みたいじゃの。外で何か良い

「ことでもあったかのう?」

とじいが優しく笑う。

「べべべ、別につ」

マールリアはどもった声で、下手なごまかし方をした。

外でツイン・マジックと出会い、危機を救う為に自分の城の兵士を倒したなんて、口が裂けても言えないマールリアであった。

「遊びに出るのは構わんが、魔法の勉強もしっかりやってくれないと困りますぞ」

じいは柔らかく叱ると、壁にかけてある黒板をポンと叩いた。

「はい」

マールリアは元気に返事をして、笑顔で片手を上げた。

『じい』は、マールリアの魔法の先生だ。

裾の長い灰色のローブを着て、頭には学者帽を被っている。銀色の長いひげを生やし、温和で優しいような顔立ちだ。

このじいはオリビアと同じくマールリアが心許した一人だ。マールリアが城を抜け出して、街へ遊びに行っていることを知っている。

「ねえ、じい。『ツイン・マジック』って知っている?」

マールリアは思い切って、じいに問いかけてみた。

そうすると、じいは分厚い本をパタンと閉じ、驚いたような目でマールリアの顔を見た。

「おお、姫の耳にも入りましたか……。彼らは二年前ぐらいに突然現れてのう」

マールリアは机の上で腕を組み、うんうんと嬉しそうに相槌をうつ。

「当時は十人程いて、かなり派手な活動をしたったんじゃ」

マールリアは、机に上半身を乗り出して目を輝かせた。

「へええゝ。今は?」

「兵士から聞いた話じゃと、今は二人しか見かけないらしいのう」

マールリアはがっかりとして体勢を戻し、

「そうなんだ……」

と沈んだ声を漏らした。

「捕まって処刑されるのも時間の問題じゃの」

それを聞くと、マールリアは無言で俯いた。

……マールリアの胸の中は、とても複雑な気分になっていた。敵なはずなのに、心の中で応援している自分がいる。

（もっと頑張れ、ツイン・マジック！）

かれこれ時間が経ち、魔法の勉強を終えたマールリアは、自分の部屋に向かって歩いていった。

そうしたら、向かい側の通路から大臣のシエルが歩いてきた。

「ああ、マールリア姫。丁度良かった」

シエル大臣はマールリアの前で足を止めて、顔をちらりと見た。

『シエル』は、マールリアより三つ年上の若大臣だ。頭は短髪で水色、顔立ちは悪くないが、尖ったキツイ目をしている。深緑の服に襟元が立った黒いマントを身につけている。

マールリアは、いつも王女と一緒に居るこの男が何となく苦手だった。

マールリアは背筋をシャキッと伸ばして、いつもの姫姿を作った。真面目な顔つきで、シエル大臣に訊く。

「シエル大臣。私に何か御用ですか？」

「フローライン王女が呼びです。玉座の間までお越しください」
シエル大臣の言葉を聞いたマールリアは、思わず険しい顔になってしまった。

「お母様が！？」

*

*

*

マールリアは嬉しい反面、不安な気持ちで一杯になっていた。ドキドキと胸を鳴らしながら玉座の間へ向かう。

なぜなら、ここ最近フロライン王女に呼び出されることなど、殆ど無かったからだ。

（お母様、私に一体何の用事だろう……）

玉座の間の前に着くと、両サイドから兵士達が木の扉を開いてくれた。

マールリアは胸に手をあてて大きく息を吸い、足を一步前に踏み出した。

周囲が灰色のレンガで敷き詰められた玉座の間は、床の中心部分に真つ赤な絨毯が敷いてあり、奥に玉座が一つ置かれているだけの殺風景な部屋だ。

玉座の後ろの壁には、月の紋様が描かれた紺色の国旗が飾られている。壁の両側にはオイルランプが幾つも灯され、ぼんやりとした明かりを放っていた。

その部屋の奥で、肘宛に両腕を乗せて悠長に座っているフロライン王女の姿が目に入る。

マールリアは真つ赤な絨毯の上を歩いて行って、部屋の中央で足を止めた。そして、姿勢良く立って両手を前に重ねた。

フロライン王女は、マールリアの姿を見て、

「マールリア、来ましたね」

と表情を変えずに声を出した。

『フロライン王女』は、マールリアと同じく銀色の髪がお尻の辺りまである。顔は整っていて美人だが、切れ長の目が冷淡な人間に見える。衣装は床まで裾を引く黒いドレススカート、頭にはつば無しの高帽子を被っている。

久々に会うフローライン王女を目の前にして、マールリアは自然と全身に力が入っていた。緊張で唾液が減少し、喉もカラカラだ。

マールリアは、その乾いた口で声を出した。

「お母様、私に何か御用ですか？」

「マールリア、明日はあなたの誕生日ですね」

マールリアは、その発言に驚いて目を丸くした。

ツイン・マジックのことばかりを考えていて、自分の誕生日をすっかり忘れていたのだ。

「各国の貴族達を招待して、あなたの誕生日パーティーを行います」

「えっ、誕生日パーティーですか……？」

マールリアは、顔を少し前に出して問いかけた。

「私は明日用事があって外出をしますが、あなたなら一人で上手くやれるでしょう」

「は、はい」

マールリアは、頭を縦に振って返事をした。

それから王女にお辞儀をして、マールリアは玉座の間から立ち去った。

マールリアは城の通路を歩きながら、物思いにふけていた。

（……どうして今更、誕生日パーティー？）

今までに、誕生日パーティーを開いたことがなかったマールリアはとても動揺していた。しかし、王女が自分の誕生日を覚えていてくれて、少し嬉しく胸が踊った。

そうして、その日は淡々と時間が過ぎて行き、何事も無く終わったのである。

*

*

*

——マールリアの誕生日の朝になった。今日もマールリアは魔法部屋で、じいの授業を受けている。

マールリアは夕方行われる自分のパーティーが気になって、窓の外を見たり、自分の髪を掴んで見つめたりと、そわそわとしていた。「今日も上の空みたいじゃの」

じいが腰に両手を当てて、呆れて笑う。

「お母様が私の為に、誕生日パーティーを開いてくれるのよ！」

マールリアは机に両手をついて身を乗り出し、興奮気味な声を出した。

嬉しそうなマールリアを見て、じいは頷いた。

「おお、そうじゃった！ 姫も今日で十七歳じゃの。」

そろそろ素敵な殿方に出会えても良い頃じゃのう」

それを聞くとマールリアは席から立って、恥ずかしそうにサツと顔を赤らめた。

「と、殿方って！ なっ、何を言い出すの、じい！」

動揺と照れが混じっているマールリアの様子に、じいは黙ってにっこりと笑う。

「殿方……」

立ったまま、マールリアは小さく呟いた。胸の奥底で何かが引っかかり、視線を右上に向ける。

ふとマールリアの脳裏を、フローライン王女の言葉がよぎった。

『各国の貴族達を招待して、あなたの誕生日パーティーを行います』

（あれ……？ もしかして……、もしかして……）

マールリアは何だか嫌な予感がして、眉間にしわを寄せた。

それから、あつと言う間に時を刻んで、時間は夕方となっていた。いよいよ誕生日パーティーの始まりだ。既に広いホール内には、各国の貴族達が勢揃いしている。

ホールの中心には大きな長テーブルが一つ設置しており、その上に純白のクロスがかけられて、色とりどりの豪華な料理達がずらりと並べられている。自由に料理が取れる立食形式だ。

だがパーティーとはいっても、出席している貴族達は二十人程で、

こじんまりとしたものだ。しかも、全員男性である。
それを見てマールリアは、がっくりと肩を落とした。……嫌な予
感的中だ。

これは、いわゆる『お見合いパーティー』である。

ホール内は、ざわざわと賑わっていた。

噂に聞いていた通りの可愛いマールリアの姿を見て、貴族達は目
の色を変えていた。皆、『自分の物にしたい』という衝動に駆られ
ているようだ。

もし結婚となると、可愛いお嫁さんと共に、権力、地位、財産も
ついてくる。そういった理由で、貴族達はマールリアに気に入られ
ようと、料理そっちのけで必死にアプローチをしていた。

早速貴族の一人がマールリアの横に素早く飛んで来て、お世辞交
じりの声で話しかけてきた。

「いやあ、マールリア姫は噂通りに美しい！ さすがフローライン
様のご令嬢だ」

「有難う御座います」

マールリアは会釈をしながら、感謝の言葉を伝えた。

他の貴族達もマールリアの近くに立って、今か今かと話すタイミ
ングをうかがっている。

続いて別の貴族が、赤いリボンのついた大きな箱をマールリアに
手渡した。

「十七歳の誕生日おめでとうございます、マールリア姫。私の気持
ちをぜひ受けとってください！」

「どうも有難うございます。頂きますね」

マールリアはプレゼントを両手で受け取って、無理やり堅い笑顔
を見せる。

（どうせ皆、権力や地位が欲しいだけでしょっ！）

ひたすら気を使う貴族達のわかりやすい態度に、マールリアは内

心ムカムカとしていた。

休む暇も無く、次の貴族がスピーディーにやってくる。

「マールリア姫。是非我が国へ遊びにいらしてください。お待ちしております！」

このマールリアを誘った貴族は、いかにも作られたようなキラキラとした笑顔を浮かべている。

「ええ、そのうち……」

マールリアは受け答えをするのもだるくなってきた、曖昧に応えた。

このように、目をぎらつかせた貴族達に囲まれて、マールリアは右に左にと大忙しだ。

今日集まった貴族達は、全員細身で容姿端麗だった。『美男子』

という言葉が、ぴつたりと当てはまるくらいだ。けれども皆、自国の自慢話だけで、マールリアにとって全然魅力を感じなかった。

それに加えて、マールリアには結婚願望が全くない。異性に興味が無いと言えば嘘になるが、結婚よりもまだまだ遊びたい気持ちの方がずっと上だった。

（もー、こんなのヤダー！ 早く終わってくれないかなー）

マールリアは心の中で泣き叫んだ。

ワインのボトルが数本空になった頃、いつの間にか貴族達は、顔見知り同士で集まって各々で話し込んでいた。

あれから貴族達は、マールリアに腰を低くして何度もアプローチを繰り返していたが、さっぱり相手にされなかったのだ。恋愛や結婚に興味無さそうな顔をする彼女に、最後はどう対応していいのか分からなくなってしまったようだ。半ば諦め気味の貴族もいる。

そのような感じで時間はどんどん経過していき、ようやくパーティーはお開きとなった。

苦痛な長い時間から解放されて、マールリアは安堵の息を吐く。

（やっと終わったー……）

後は挨拶をして、貴族達が去るのを見送るだけだった。もう少しで終わると思うと、マールリアの顔から自然に笑みがこぼれる。

マールリアは貴族達に、にこにこ愛想よく笑顔を振りまいた。

「皆様、今日は有難う御座いました」

「では、マールリア様、また別の機会に……」

こうして、貴族達はマールリアに会釈や握手をして、次々とホールから立ち去って行った。

マールリアが笑顔で貴族達に手を振っていると、今日まだ一言も口を聞いていない大柄な貴族が傍へやってきた。

大柄な貴族はマールリアの前まで来ると、自分の胸に右手を添えて頭を下げた。ニヤニヤと品の無い笑みを浮かべながら、挨拶をする。

「お初にお目にかかります、マールリア姫。私は隣のマーズ王国に住んでいるドラスと申す者です」

その貴族は、二十代後半ぐらいで赤毛の男だった。

顔立ちは十人並みなのだが……、口元がニヤついていて何だか嫌な感じだ。

「初めましてドラス様、今日はわざわざ足を運んで頂き、有難う御座います」

マールリアは両手をそろえて、頭を下げながら挨拶を返した。

ドラスは右手のひらを差し出して、入り口の方へ向けた。

「どうです？ これからゆっくりと二人で、ワインでも飲み直しませんか？」

「え、今からですか……」

マールリアの表情が曇った。

「フローライン王女も外出中ですし、マールリア姫のお部屋でいかがでしょう？」

そう言つと、ドラスは口の片方を上げて、マールリアの身体を頭からつま先まで舐めるように眺めた。

「いえ、遠慮致します」

マールリアは困った表情を浮かべ、手を左右に振りながら丁重に断った。

ドラスのいやらしそうな目付きに、マールリアは危険を感じていた。

（何だかヤダ……。この人の目……）

いきなりドラスは、ぐつとマールリアの細い腕を掴み、強引に前へ引つ張った。

「いいじゃないですか。行きましょう、行きましょう！」

「えっ！？ ちょっと！ やめてください！」

突然腕を掴まれたマールリアは戸惑った。物凄い力で、ずるりと床を引きずられて行く。

「離してくださいっ！」

マールリアは、顔を真っ青にして叫んだ。

助けを呼ばうと周囲を見回したが、何故か料理を片付けるメイドや、見張りの兵士達の姿は見当たらなかった。

「や、やめて……！」

マールリアは苦しそうな声で訴える。だが、その声もドラスには届かなかった。

必死に抵抗しても、痛いほどに引つ張られる片腕。

マールリアは掴まれた腕を片手で引つ張り返し、両足に力を入れてその場で踏ん張った。

怒りと悔しさで、ぎりつと奥歯を噛み締める。

（くっ！ こんな奴、魔法でブツ飛ばしてやりたい！！）

だが、頭の隅にフローライン王女の顔が浮かんできて、そんなことはできなかった。

——その時、どこからか男の声が響いた。

「ちよつとオッサン、ストップ！」

その一声でドラスの動きが、ピタリと止まった。

声が聞こえた方向に目をやると、入り口付近にマールリアと同じ年ぐらいの若い貴族が立っていた。堂々と腕を組んで、こちらを鋭く睨んでいる。

まだ帰っていない人がいてマールリアは、ほっとした。

若い貴族は早足で二人の元まで来ると、ドラスの腕をぐつと掴んで振り払った。

「うっ！」

いとも簡単に腕を振り払われたドラスは、目を大きくして若い貴族の顔を見た。

（た、助かった……！）

自由になったマールリアは、飛ぶようにドラスから距離を取った。そうして、少し離れた場所から二人の行方を見守る。

「何をする貴様！」

ドラスは両手に拳を握り、射るような視線で若い貴族を睨み付けた。

若い貴族は、ドラスの鼻に指を差し、厳しい口調でこう言い放った。

「兵士やメイドにチップでもあげたのか？」

酔わせて女の子を襲おうなんて、いい年してみつともないぜ！」

ドラスは凶星の所を付かれたのか、

「な、何だとっ！？ 無礼者め！ 私がそのようなことをするはずなからう！」

と言い訳がましく否定する。怒りでタコのように顔を真っ赤にし、両拳をぶるぶると振るわせている。

急に若い貴族は表情を和らげ、右手のひらを差し出してマールリアの方へ向けた。

「悪いけどさあ、姫とは俺の方が先約でね。なっ、姫！」

「えっ！」

唐突に話を振られたマールリアは、ドキッとして両肩を上げた。

若い貴族の顔を見ると、片目を閉じて合図をしている。その表情を見て、助け舟を出してくれていることが分かった。

マールリアは若い貴族の目を見て、無言でこくりと頭を動かした。ドラスは酷くうつろったえた顔をし、両手のひらを差し出してマールリアの目を見る。

「ほ、本当なんですか？ 姫！」

マールリアは若い貴族の隣に近寄ると、自分の腕をスツと絡めた。

「ええ、そうなんです。今夜はこれとお方と約束をしました。」

ドラス様、申し訳ありませんが、今回は辞退して頂けないでしょうか？」

「ぐっ……！」

マールリアから断られたドラスは声を詰まらせて、悔しそうに顔を歪めながら二人を睨んだ。そうして観念したのか、すねた子供のように大きく腕を振ってホールを出て行った。

「ふう……」

危うく難を逃れたマールリアは、緊張の糸が取れて、小さな息を吐いた。

「あつ、助けてくださって有難う御座いました！」

慌ててマールリアは若い貴族から腕を離し、向き合って頭を下げた。

すると若い貴族は腰に両手をあて、曇りの無い爽やかな笑顔をマールリアに向けた。

「危なかったな」

その貴族を改めて良く見ると、とても『貴族』には見えない格好をしていた。

もったりとしたズボン、ぐったりとした緑色のベストに、頭には不思議な形をした帽子を被っている。まるで砂漠の商人だ。

体格は中肉中背で、身長も人並みだ。顔立ちは、眉が高く上がっていて意志が強そうに見えるが……、他の美形な貴族達と比べると凄く平凡顔だった。カッコ良くもカッコ悪くも無い、ごく普通の少年だ。

マールリアは顔を上下に動かして、若い貴族の全身をまんべんなく眺めて問いかけた。

「あの、どちらの国のお方ですか……？」

「ああ。えーと、うん、まあ、某国って所かな」

と若い貴族は、とぼけた様な声で返答した。苦笑いをしながら、ポリポリと人差し指で頬を掻いている。

その態度にマールリアは首を傾げて、怪訝な顔で若い貴族を見つめる。

（何だか変な人……。でも銀髪だし月星人よね……。あれっ、それより今日こんな人いたっけ……？）

マールリアが沈黙して考えにふけていると、ホールに眼鏡をかけたメイドが入ってきた。

眼鏡のメイドは、せっせと食器を片付け始めた。

マールリアと若い貴族は、カチャカチャと音を立てているメイドを目で追う。

眼鏡のメイドは立ち尽くしている二人に気づいて、

「あら、マールリア姫。」

こんな所で立ち話なんかしないで、お部屋に行かれたらどうです?」と促した。

「え、ええ。そうですね」

とマールリア。

自分の部屋に男性を招くのは抵抗があるが、危機を救って貰ったから仕方ないかな、とマールリアは思った。

ふと、眼鏡のメイドが頭を上げた。

「あつ、そうそう、マールリア様!」

「はい?」

眼鏡のメイドが、ワインボトルを両手で持って歩いてきた。マールリアの前に立って、にこりと優しく笑う。

「これ、昨日手に入った珍しい赤ワインなんです。良かったらお二人でどうぞ」

そう言って眼鏡のメイドは、マールリアにワインのボトルを手渡した。

「有難う御座います、頂きますね」

マールリアは微笑んで、ワインボトルを両腕で抱きかかえた。

眼鏡のメイドは後ろを向いて、テーブルの方へ戻っていく。

「メイドのお姉さん!」

若い貴族が右腕を挙げて、眼鏡のメイドを呼び止めた。

「何ですかー?」

眼鏡のメイドは、めんどくさそうな返事をして振り返った。

若い貴族は自分の顔に指を差し、

「俺、アルコール駄目だからオレンジジュースね!」

と言って、ヘラヘラと笑い出した。

「チッ」

何故か舌打ちをする眼鏡のメイド。その後、眼鏡のメイドはテーブルに置いてあるジューズの瓶を片手に取った。

「……？」

マールリアは、二人の妙なやりとりを見て首をひねった。

一度あった様な、ない様な……、不思議な感覚に襲われる。

（何だろうこの二人。この感じ……）

……歩いているメイドのウェーブ髪が、背中でふわふわと揺れていた。

*

*

*

マールリアの部屋はとても広い。その上、高級家具、アンティーク雑貨、大きな天蓋つきベッド等がある。

部屋に着いた二人は、茶色の丸いテーブル・チェアに腰掛けて、ワインを頂くことにした。

それはそうと、部屋に着いた頃から、若い貴族の行動に落ち着きが無い。上半身を後ろにひねらせて、珍しい物でも見るようにキョロキョロと首を回し続けている。

「さすが、姫の部屋は広々としているし、高級品ばかりだなー」と感嘆の声もあげる。

（小さな田舎街の貴族なのかな？）

その素振りを見て、マールリアは再び疑問に思ったが、これ以上深く追求するのはやめておいた。それというのも、ワインを飲み終わったら、この若い貴族と即「さよなら」をするつもりだったからだ。

「そういえば、まだお名前を伺ってませんでしたね」

マールリアはそう尋ねて、オレンジジューズを貴族のワイングラスに注いだ。

「俺は、ラマⅡデジャヴ。よろしく！」

ラマは元気な良く通る声で名乗り、マールリアに握手を求めて手を差し出してきた。

「ラマ様ですね。私はマールリアⅡムーン。宜しくお願いします」

マールリアは伸ばしたその手を握って、握手を交わした。温かくて自分より大きな手を、ぎゅっと握る。

ラマは決して大柄ではないが、あのドラスの腕を軽々と振り払った所を見ると、かなり腕力があるようだ。

「さあ、姫もワインをどうぞ」

ラマがワインボトルを持ち上げて、マールリアのグラスへ向ける。「有難う御座います」

マールリアはグラスに並々と注がれる、赤い液体をじっと見つめていた。ふわっと辺りに甘い果実の香りが漂う。

「乾杯ー！」

二人は声を揃えてグラスを高く上げると、カチンツと鳴らし合った。ガラスとガラスが当たった、綺麗な澄んだ音が部屋の中に響く。

二人はワイングラスに口を付けて、中身を味わった。

（ん……、微妙な味……）

赤ワインを一口飲んで、マールリアはグラスをテーブルに置いた。今まで味わったことのない、不思議な味がするワインだ。

マールリアは、グラスの中でゆらゆらと動く赤ワインを見つめながら、何とも言えない表情を浮かべる。

（香りはいいいのに、味はとても美味しいとは言えないわね……。あのメイドさんには悪いけど……）

気を取り直して、マールリアはテーブルの上に両手を重ねて置き、ラマの顔をじっと見る。

どうせこの人も、権力や地位が欲しくてパーティーに参加したんだろうな、と考えていた。

「ラマ様は……」

「ん？」

ラムがジュースを飲みながら返事をした。

「やはり、逆玉の輿で私を狙いに？」

「ぶっ！」

ラムが、ジュースをグラスの中に吐き出しそうになった。

「ごほごほっ！ 何を言い出すんだ」

ラムは咳き込みながらグラスを口から離し、喉を片手で押さえた。

「だって、今日の貴族達は皆そうでしたよ。権力や財産目当ての方達ばかり！」

「俺はそんなの目当てで来た訳じゃないぞ」

「えっ！」

思いがけない言葉が返って来て、マールリアは目をパチクリさせた。

「君のこと、普通の女の子として気に入ったんだけどな」

ラムは微笑みながらそう言うと、片手で頬杖を突いてマールリアの目をじっと見つめた。

ドキンツとマールリアの胸が鳴った。同時に、顔が火照ってりんごのように真っ赤になる。

それはマールリアの、生まれて初めての『ときめき』だった。

助けてくれた時もそうだったが『女の子』と呼ばれると、姫としてではなく、一人の女の子として見てもらえているようで、マールリアにとって非常に嬉しいことだった。

（はわわわわ……、顔が熱いつ！）

マールリアは視線を下に向け、赤く熱を持った顔をパタパタと手であおいだ。

そんなマールリアを見ながら、ラムはテーブルの上で腕を組んで、友達のように軽く質問する。

「ところで、マールリア姫の趣味は何？」

「趣味ですか……。私は城の中ばかり居ますから、これと言って無いのですよね」

胸が高まってしまったマールリアは、彼を直視することができず、頭を下げたまま返答した。

先程から、ドキドキと胸の鼓動が止まらない。加えて、頭がもうろつとしてくる。

(……？ 何だか頭が変……。ドキドキすぎた？)

そう思いながら、マールリアは言葉を続けた。

「強いて言うなら、城の中の散歩や、窓から景色を眺めるぐらいですな」

「それと、城から脱走……。かな」

「えっ！」

ラマの唐突な発言に、ぎくりと驚いてマールリアは顔を上げた。すると、ラマが片手で頬杖について、ニヤリと笑みを浮かべている。「全部知っているんだぞ」と言わんばかりに。

「ど、どういことです!？」

マールリアは焦り、テーブルに両手をついて勢い良くチェアから立ち上がった。

——が、ぐらりと突然に強烈な睡魔が襲った。

「うっ……!」

マールリアは呻きながら顔に手を当てて、ふらふらと足をよろめかした。

(まさかつ、あのワイン……!)

今更気づいても手遅れだった。もう、眠くて眠くて仕方がない。

重たい瞼を懸命に開きながら、彼の顔を見る。

ラマは片手で頬杖をついたまま、無表情でマールリアの様子を眺めていた。

「な……にを……の……」

マールリアは喉の奥から、弱々しい声を絞り出した。

睡魔を必死に耐えようとしたが、全身の力が抜けていき、次第に視界がかすれてくる。

とうとうマールリアは、両膝を絨毯につけて前に倒れてしまった。

バタツと床に倒れた音が鳴り、そこからプツツリと記憶が途絶えてしまったのである……。

——どのぐらい眠っていたのだろう。

ぼうつとマールリアの意識が戻ってきた。ぼやけていた赤いレンガの天井が、少しずつ、少しずつ見えてくる。

マールリアは冷たく固い床で寝そべっていた。

「うつ……、ここは……どこ？」

小さな声で問いかけるも、その答えは戻ってこない。周囲には、全く人の気配が無かったのだ。

音ひとつ無い静寂が辺りに広がっている。まるで、この世に自分ひとりしか存在していないかのような錯覚に陥りそうだ。

マールリアは心を落ち着かせて、自分が服を着ているのか手で触って確かめた。……高帽子が無いだけで、他は無事だ。ほっと安心して胸をなでおろす。次に、まだ重たい頭を手で押さえながら、ゆっくりと上半身を起こした。

その瞬間、太い鉄格子が視界に入り、マールリアは大きく目を見開いた。

なんと、ここは牢屋の中だったのだ。

「ハア……、やられた……」

マールリアは溜息をついて、がくりと頭をうな垂れた。

少しでも、ときめいてしまった自分が腹立たしい。それから、騙された悔しさと悲しさが込み上げてくる。

（普通の女の子って言うてくれて、本当に嬉しかったのに……。

お芝居だったのね……。一人で舞い上がってバカみたい、私）

俯いて落ち込むマールリア。しかし、

（……いや、そんなことを考えているよりも逃げる方が先よ）

と自分を急き立てて、マールリアは部屋の中を見回した。

ここは窓が一つも無い、赤レンガで敷き詰められた狭い部屋だった。

鉄格子の外の壁にオイルランプが一つ点いているだけで、室内はほの暗い。

レンガにはあちこちひび割れがあり、周囲は蜘蛛の巣や埃まみれで、長い間人が踏み入った形跡が感じられなかった。

鉄格子の向かいには、木で出来た扉が見える。恐らく外へと繋がる扉だろう。

マールリアは立ち上がり、鉄格子を両手で握って揺すってみた。だが、どんなに揺らしても頑丈な鉄格子は、ガチャガチャと五月蝍い音を鳴らすだけだった。

逃げることは不可能だと悟ったマールリアは、ペタンとその場に座り込んだ。

「なんて最悪な誕生日……」

マールリアは、ぽつりと愚痴をこぼした。

足の上に両手を置き、視線を右上に向けながら、マールリアは先程出会ったラマの言葉を思い出す。

『それと、城から脱走……かな』

（あの人、私が城から抜け出していることを知っていたけど、何者なんだろう……）

それから、扉の外に人の気配を感じたのは、暫く時間が経ってからだった。

キィと木のきしむ音が鳴り、奥にある扉がゆっくりと開かれる。それと同時に、開いた扉の隙間から、まばゆい月光がスーッと差し込んだ。

マールリアは喉を鳴らし、目を皿のようにして入ってくる人物に注目した。

——そこから、見覚えのある白いローブの二人が姿を現したのだった。

「そのロープは！！ ツイン・マジック！！」

マールリアは今までに出したことの無いような興奮した声をあげて、勢い良くその場に立ち上がった。

すると、一人が自らのロープを片手でぐつと掴み、大きく腕を振って横に投げた。バサリと音を立ててロープが床に落ちる。

「さつきは騙して悪かったな！」

そう言っ出てきた顔は、先程会った『ラマ』だった。何事も無かったかのような平然とした顔で、牢屋の中のマールリアを見る。

その顔を見たマールリアは、まんまと騙されたのをふつつつと思出し、ムスツとした顔でラマを睨んだ。

「こんばんは、マールリア姫」

女の方が落ち着いた声を出して、鉄格子の前までやってきた。そしてロープに手を取って、バサツと脱いだ。

「えっ！！」

その姿を見たマールリアは、驚きに満ちた声をあげて、大きな目を更に大きくさせた。

ロープを脱いだ女は頭を回して、ふわりとウェーブ髪をなびかせた。

「——それとも、マーヤさんと呼んだ方がいいかしら？」

ニコツと笑った、この気の強そうな顔立ちは——、あの時の『占い師』だった。

「あ、あなた、ツイン・マジックだったの……！」

マールリアは占い師に指を差し、ポカンと口を開けたまま呆けた。あまりの驚きで、差した指がぶるぶると震える。

「そうなの。この前は助けてくれて有難うね」

「まったく驚いたぜ。この間俺達を助けてくれた天才女の子が、お姫様だったなんて」

そのラマの言葉に占い師が頷く。

「同じく。城の中で顔を見た時は驚いたわ！」

「あの魔力、さすがフローラインの娘なだけあるよな」

ラムが腕を組んで、うんうんと頭を上下に振りながら、感心した様な声を漏らした。

マールリアの存在を忘れて、話し込むツイン・マジックの二人。捕らわれの身だが、この二人を見てると全く緊張感が湧き上がって来なかった。

マールリアは前かがみになって、鉄格子を両手で掴んだ。

「あの……。ところで私はどうして捕まっているの？
もしかして、遠くに売り飛ばされるの？」

つい呆れた声が出てしまう。

そうすると、二人は思い出したかのように、マールリアの方を向いた。

「あ、そうそう。」

助けてもらっておいて申し訳ないんだけど、あなたを利用させてもらうわ」

占い師が、マールリアの目を見ながらそう告げた。

続けて、ラムが口を開く。

「フローラインに脅迫状を送ったんだ」

「脅迫状！？」

マールリアはひときわ大きな声を出した。

「ここに、フローライン一人で出向くように要求したの。あなたの無事と引き換えにね」

ドクンと心臓が鳴って、今頃マールリアの身体に緊張が走る。

それから何をするのか……、おおその見当はついた。が、マールリアは鉄格子ギリギリまで顔を寄せて、真剣な表情で二人に尋ねる。

「お母様をここに連れてきて……、一体どうするつもり……？」

「殺すに決まってるだろ。俺達の目的はそれしかねえよ」

ラムが腕を組んで、マールリアの目を睨みながら、あっさりと言った。

「っ……！」

それを聞いてマールリアは、言葉を詰まらせた。

「殺されるわよ……！ お母様に、かなう人なんていないんだから！」

マールリアはこわばった顔で両腕を激しく動かし、鉄格子を揺さぶった。ガチャガチャと無機質な鉄の音が鳴り響く。

占い師とラマは、マールリアの言葉に表情一つ変えなかった。

「大丈夫よ、ラマが動きを止める魔法を使えるから。その間に済ませるわ」

「そそ、俺って天才だから！」

そう言いながら、ラマは腰に両手を当てて、エヘンと自信あり気に顎を上げた。

マールリアは暗い表情で、へなへなと力が抜けたように床へ座り込んだ。

このままでは自分の母親が殺されてしまう。

もし母親が助かったとしても、ツイン・マジックの二人が殺されてしまう。

……どちらも絶対に嫌だった。

どうしていいか分からずに、マールリアは呆然としていた。

ラマがしゃがんで、マールリアの顔を見た。

「フローラインが戻るのはいつ頃だ？」

「明け方よ……」

マールリアは彼に目を合わせずに 小さな声で答えた。

「じゃあ、もうそろそろね」

と占い師が静かに言って、顔を上げた。

*

*

*

一方ムーン城――。

空がかすかに明るくなってきた頃に、ザッザッザッ……と、大勢の人が足並みを揃えて歩いている音が近づいてきた。

外出をしていたフローライン王女と、大勢の兵士達がムーン城に帰還したのだ。

ムーン城の城門はアーチ型で、門の左右には巨大な円筒形の塔がそびえたっている。

その城門をくぐり抜けた兵士達は、すみやかに自分の持ち場へと戻って行った。そして、フローライン王女と有能な兵士数人が、玉座の間へ向かう。

フローライン王女が、玉座の間に足を踏み入れた。

その中には、壁際に兵士が数人と、玉座付近にシエル大臣が待機している。

姿勢正しく立っていたシエル大臣が、頭を深々と下げて王女を迎えた。

「お帰りなさいませ、フローライン様」

「只今戻りました」

王女は悠々と歩きながら軽く片手を上げて、無事に帰還したことをシエル大臣に伝えた。

王女は玉座にスツと腰掛けて、両腕を肘宛に置いた。

「留守の間、何か変わったことはありませんでしたか？」

そうしたら、シエル大臣は歩いて王女の元に近寄り、片腕を伸ばす。

「これが届きました」

と一言報告して、長方形に折られた白い手紙を王女に手渡した。

「これは？」

王女は受け取った手紙を、右手でひらひらと振りながらシエル大臣に訊いた。

シエル大臣は片手のひらを差し出して、手紙の内容を簡単に伝え

た。

「ツイン・マジックの奴らからの脅迫状で、マールリア姫がさらわれたようです」

「そうですか」

王女は顔色一つ変えずに、落ち着いた声を出した。そして、言葉を続ける。

「嫁いで同盟国でも増やしてくればいいものの、本当に使えない娘ですね」

王女は目を細めて遠くを見ながら、冷たい言葉を言い放った。

シエル大臣もそれに同意して頷く。

「まったくです……」。

しかし、ツイン・マジックの奴らも小ざかしい……。どう致しますか？」

王女は手紙を開くことなく、右手のひらでグシャリと握り締めた。その握った手から銀色の眩しい光がパァッと輝くと、手紙が瞬く間に灰となる。

「相手の要求は何です？」

王女は無表情な面持ちで手を開き、灰をサラサラと床に落とした。

……牢屋部屋では、沈黙の時間が続く。

マールリアは俯いて座っていた。そうして事が起こるのをただ待つだけだ。

鉄格子外の二人は、壁にもたれかかるように立っている。

「ねえ……」

マールリアは顔を上げて、囁くような声を出した。

その声で二人がこちらに視線を向ける。

「あなた達の正体、私にばれちゃっているけどいいの？ 私はフロラインの娘なのよ」

するとラマが少し笑い、片手を上げて肩をすくめた。

「いいんだよ別に。失敗したら俺達は殺されるんだから」

「私達、遊び半分でこんなことをやっている訳じゃないの」

占い師が真面目な表情で、マールリアの目を強く見つめながら主張する。

二人から冷静な言葉が返って来て、マールリアは驚いた。

（この二人は、いつでも死ぬ覚悟ができているんだ……！）

「よしっ」

と声をあげて、ラマが歩き出した。

ラマはかがんで、隅に置いてある大きな布の袋の中をあさり出す。

マールリアは彼の行動が気になって、身体を横に倒して覗いた。

すると、袋の脇から短剣らしき物が、はみ出ているのが目に映る。

（あれで母親を刺すのかなあ……）

そう思っ、マールリアは顔をしかめた。

暗い目をして再び俯く。

もう、鉄格子の中で祈ることしかできなかった。『誰にも死んで欲しくない』と。

ラマは袋の中から小型の望遠鏡を取り出し、占い師の方を向いた。
「ちよつと外の様子を見てくる」

「気をつけてね」

と声をかけて、占い師はラマに軽く片手を上げた。

ラマは扉を大きく開けて外に出て行った。

マールリアは立ち上がって鉄格子に近づき、占い師に尋ねた。

「ここはどこなの？」

「街外れの空き家よ。昔は罪人達を閉じ込めていたみたいだけど。

外は人通りも全然無いし、広いスペースもあるから絶好の場所だわ」

占い師が答えた、その直後だった――。

「サラボナツ、大変だっ！」

ラマが大声を出し、焦った様子で勢い良く部屋に飛び込んできた。

『サラボナ』とは占い師のことだろう。

「どうしたの、ラマ？ もうフローライン来た？」

ラマの只ならぬ様子を見たサラボナは、組んでいた腕をほどいて
険しい顔をした。

マールリアも鉄格子に飛びついて、顔を近づけた。

「ムーン城の魔法兵士達が、こちらに向かって来ている！」

ラマが扉の方に人差し指を向けて、余裕の無い声をあげた。

サラボナが、ピクリと体を小さく動かしした。

「フローラインは？」

ラマが首を左右に振った。

「いない」

「――えっ！」

二人の会話を割って甲高い声を出したのは、マールリアだった。
その瞬間、胸に何かが突き刺さった様な衝撃が走る。

マールリアは鉄格子を両手で握ったまま、人形のように動きが固

まっってしまった。

続けてサラボナが、ラマに問う。

「兵士の数は？」

「二十程」

そうすると、サラボナはがっかりとした表情を浮かべ、腰に両手を当てて溜息をついた。

「そう、私達には無理な数ね。……今すぐ撤退よ」

サラボナがマールリアの方を向いて、片手を軽く上げた。

「という訳。悪かったわね、マールリア姫。もう人質なんて必要ないから逃げていいわ」

牢屋の中のマールリアは背中を丸めて、力が抜けたようにだらんと両腕を下ろていた。

サラボナが鍵を使って大きな南京錠を外すと、キィと軋む音が鳴って牢の扉が開いた。そして、右手のひらを差し出して、マールリアにどうぞと促す。

「兵士を連れてくるのは予想していたけど、まさかフローラインが来ないとはな。

まったく、お姫様には同情するよ」

ラマが、虚ろな目をしたマールリアを見ながら声をかける。

それを聞いてもマールリアは何も応答せず、魂が抜けたようにトボトボと歩いて行った。

二人は、落ち込んで歩いていくマールリアを哀れみの目で見ていた。

マールリアは深く傷つき、打ち沈んでいた。

母親が助けに来てくれると心から信じていたが、やって来たのはたった二十程の兵士達だけ。もし凶悪な連中に誘拐されていたならば、約束が違って殺されていたかもしれない。

（私は、お母様に見捨てられた……！）

悔しさと怒りがマールリアの頭の中をぐるぐると駆けめぐり、ヤ

ケを起こしたい衝動が噴き上がってきた。

マールリアは足を止めた。足元に、二人が羽織っていた白いローブが落ちている。

二人は急に止まったマールリアを怪訝に思っ、背中をじつと見つめた。

マールリアはその場にゆっくりとかがんで、足元に落ちている白いローブを拾った。それから、後ろに居る二人に見えるように、白いローブを右手で掲げた。

「……これ、借りるね」

「え……？」

サラボナが驚きの声を漏らした。

マールリアは白いローブをサツと身にまとい、フードを深く被った。そうして、早足で外へ出て行った。

二人はマールリアの妙な行動を不信に思っ、顔を見合わせた。

外に出たマールリアは、深呼吸をひとつして辺りを眺めた。もう空が明るくなっている。

肌にあたる優しい風が心地よく、皮肉なほど清々しい朝だ。

ここは周囲に民家が無い、だだっ広い空き地だった。その端にマールリアが捕まっていた牢屋小屋がぼつとあるだけだ。

マールリアは足を動かして、牢屋小屋から遠く離れた場所に立った。

目を細めると、ぼやとした朝もやの中を、大勢の人達が足早に近づいて来ている姿が見える。それは灰色のローブを着た、ムーン城の兵士達だ。

ラマはかがんで扉を少し開き、外の様子を伺った。

遠くで白いローブをまとったマールリアの背中が小さく見える。

真っ直ぐ立っていて、その場から動かない。

「お姫様、何をやるつもりだ……？」

ラムが呟いた。

サラボナも扉の前に立ち、ラムが見ている隙間より更に上の隙間から覗き込んだ。

「まさか私達のふりをして、囷になってくれているのかしら……」

「囷！？」

直ぐにラムは扉を半分開けて横から顔を出し、

「おーい、お姫様！ 早くローブ脱げよっ！ 自分の城の兵士にやられるぞー！」

と声を張り上げた。

だが、ラムの声を聞いても、マールリアは凜と突っ立ったままで一寸も動かなかった。

「何なんだよ、一体っ！」

無視をされたラムは眉を上げて、大げさに腕を組んだ。

サラボナが、怒り気味のラムをなだめる様に肩へ手を置く。

「仕方ないわね……、しばらく様子を見るわよ。あの子が危険になったら直ぐに飛び出すわ」

「了解。あの人数、敵うかどうか分からないけどな」

ラムはそう言って表情を戻した。

——遂にマールリアの前へ、二十程の魔法兵士達が辿り着いた。マールリアより離れた場所に、綺麗に整列をして待機をする。

一歩前に出ている隊長が、腕を伸ばしてマールリアに指を差した。

「お前がツイン・マジックのメンバーか？」

「そうよっ！」

「ハッ！ どんな奴かと思ったら、ただの小娘じゃないかっ！」

マールリアの高い声を聞いた隊長は、右手のひらを差し出してせせら笑った。

それにも構わず、マールリアは大きく胸を張ると、腰に片手を当てて、もう片手は兵士達に指を差した。そして、何の迷いもなくこう言い放った。

「フローラインの犬どもめっ!!」
早くここから立ち去らないと、この私がお前達をケチヨンケチヨンにするわよっ!!」

「なっ、何!? 犬だと……!?!」

隊長は犬と言われたのが気に触ったのか、額に血管を浮き上がらせて、拳をぶるぶると震わせた。

「来るなら早く来なさいよっ!!」

マールリアはそう挑発して、足を開きながら砂利をぐっと押した。我慢できなくなった隊長は、兵士達の方を向いて片腕を空高く上げた。

「お前らっ、魔法の準備だっ! この生意気な小娘をいたぶってやれ!!」

「はっ!!」

兵士達は声を揃え、全員両手のひらを前に出して、マールリアに向けた。そうすると、兵士達の手のひらの前に、銀色の光が集まってくる。

負けじとマールリアも肘を伸ばし、両手のひらを前に出して兵士達に向けた。

一部始終を見ていたラマは呆れた顔をして、思い切り扉を開いた。
「だーかーらー、あのお姫様は一体何をやってんだっ!!」

「ラマッ! ばやばやとしないで、さっさと行くわよっ!!」

サラボナはラマの背中を叩いて、先に走り出した。

「了解っ!!」

ラマも部屋から飛び出した。

——兵士達の手のひらの前に、銀色の光がじわじわと集まってくる。ところがマールリアの両手のひらの前にも、銀色に輝く光の玉が出来ていた。それは、人を何十人も簡単に飲み込んでしまいそうなほどの巨大な光だった。

「なっ、なんだあの魔力はっ！」

恐ろしい大きさの光を見た隊長は顔面蒼白になり、身震いをさせた。

「ムーン・ライツッ!!」

そう叫んだと共に、マールリアは一步前に出した足に重心をかけて、両手のひらから巨大な光の玉を放った。

兵士達は顔をこわばらせ、両手のひらを前に出したまま後ろに後ずさった。

マールリアの放った巨大な光が、兵士達に向かって真っ直ぐ飛んできく——!

次の瞬間、光がまともに直撃した大きな衝撃音が鳴り、兵士達はバラバラに吹っ飛ばされていった。

「ギャアアア——ッ!!」

広場一面に断末魔の叫び声が響いた。

それを聞いたサラボナとラマは、ビクンと身を動かして立ち止まった。

「——えっ……?」

サラボナは息をこらして見ると、兵士達が全員散り散りになって倒れている姿がある。

兵士達はロープがボロボロに引き裂かれていて、ビクビクと痙攣をしていた。

そんな異様な光景を見つめながら、サラボナは思った。

（こ、これ、一人でやったの……？　なんて魔力……）

サラボナは、ブルツと一瞬身を振るわせた。

「すげえ……」

この迫力に唾然として、ラマが小さな声を漏らす。

マールリアはサラボナ達の近くで、じっとたたずんでいた。

「あ、あの……」

サラボナは一言かけて、片手を伸ばしながら恐る恐るマールリアの背中に歩み寄った。

マールリアはバサツと頭のフードを外し、二人の方を向いた。

……その顔は無表情だった。

サラボナは唇に力を入れて、マールリアの目をじっと見つめた。

だが、マールリアは何も発言せずに、前を向いてゆっくりと歩いて行った。

二人は、朝もやの中に消えていくマールリアの背中を、ただただ呆然と眺めるだけだった――。

【第二話・完】

——あの誘拐事件から一日後。

「お母様なんて、大っ嫌いー!!」

広い部屋の中にマールリアの金切り声が響き、ほぼ同時に枕が壁にぶつかった。

マールリアは、今までにないぐらい苛立っていた。

それというのも、あの日の朝。城へ戻ってきたマールリアはフローライン王女と顔を会わせたが、『無事で何よりです』のたった一言しか声をかけてもらえなかったのだ。

無事に帰ってきた娘の姿を見ても全く表情を変えなかった、冷たく氷のような母親……。

マールリアは、自分が母親から愛されていないんじゃないかと薄々感じていたが、今回の事件で決定打となってしまった。

自分のことなんてどうでもいいんだと思うと、マールリアの胸に激しい怒りがこみ上げてくる。

「もうお母様なんて知らないっ！　もうこんな城どうなったっていいっ！」

マールリアは声を荒らげ、自分が被っていた高帽子を力任せに床へ叩きつけた。

むしゃくしゃとして、母親に反発したい気持ちが抑えられない。

この行き場の無い怒りを、どこにぶつければいいんだろう……。

そう考えていた時、ふとマールリアの頭の片隅に『あの人達』の姿がちらついた。

（——ああ……、そうだ。会いに行こう……、あの人達に）

マールリアはそう決心し、姫服を脱いでいつものラフな格好に着替えた。それから、窓の方へと足を運ぶ。

マールリアが窓を開けて片足をかけた途端、部屋の扉が大きく開いてオリビアが入ってきた。

「あつ、マールリア様。もうお出かけですか？　今すぐ着替えますね」

オリビアは半分外に出ているマールリアの姿を見て、慌ててボタンに手を取った。が、マールリアは振り返ってそれを止める。

「あつ！　オリビア、もういいの！」

「いいって何がです？」

オリビアはそう問いかけるとボタンを外す手を止めて、不思議そうに首をかしげた。

「もう影武者にならなくていいわ。私が居なくなっても誰も騒がないから！」

「えっ！」

オリビアは目を剥いて、驚きと困惑が混じった短い声をあげる。

驚いている彼女をお構いなしに、マールリアは頭を低くして上半身を窓から出し、もう片足も外に出して窓枠に座った。そしてオリビアの方を向いて、何かを決意した爽やかな笑顔を見せる。

「今まで変身してくれて有難うねー！」

そうお礼を言うと、マールリアはぴょんと軽やかに太い木の枝に降りた。

「は、はい！　いつてらっしゃいませ！」

オリビアは素早く　窓辺に寄り、複雑な表情で木から降りていくマールリアの姿を見つめた。

時間は午前中。マールリアはあの公園に向かって足を動かしていた。今日はルイザと遊びに行く日なのである。

（ツイン・マジックと初めて出会って、もう一週間経ったのね）

しみじみとマールリアは思う。　今までの人生で一番、感情を丸出しにした一週間だったかもしれない。

マールリアは公園の中へ足を踏み入れた。その瞬間、サーツと舞い上がる涼しい風が吹き、木々から降りそそぐ木漏れ日の淡い光が揺れ動いた。

ここはいつもと変わらず、心が落ち着いて優しい雰囲気になれる場所だ。

普段だったら足を止めて、その場の景色を楽しんで行くのだが、今日のマールリアは違った。早足でただ黙々と、放たれた矢のように風を切って突き進んでいく。その顔には、誰もが驚いて振り返ってしまいそうな程の必死な形相が浮かべられていた。

やがて、今は目にしたくないフローライン王女の銅像がどっしりと姿を現した。その隣で、ルイザが背伸びをして手を振っている。

「来た来たー！」

ルイザが近づいてくるマールリアに、白い歯を見せながら弾んだ声をかけた。

マールリアはルイザの前で立ち止まって、片手をあげた。

「お待たせ、ルイザ」

マールリアは笑みがひとつも無い顔で、ルイザに挨拶をする。

そんなマールリアの顔を、ルイザは首を傾げて心配そうな瞳で見つめた。

「ん？ どうしたの？ 機嫌悪い？」

マールリアはとっさに手を振り、少し無理をした笑顔を作って発言した。

「うつん、何でもないの。それより今日は、行きたい場所があるんだけどいいかな？」

「いいよ。珍しいね？ マーヤに行きたい場所があるなんて」

「うつん、ちよつとね……」

マールリアは伏し目がちに小さな声を囁いた。

「それじゃあ、早くそこに行こー！」

「うん。ルイザ、こっち」

マールリアはルイザに手招きをして促すと、前を向いて先に進んでいった。

今日も大通りは人通りが多く、生き生きと活気に満ちている。そろそろと道行く人とすれ違いながら、マールリアとルイザは石畳でできた歩行者用の端の道を歩いて行った。道の中央では、大きな荷物を運ぶ馬車達が多数行き来している。

一体どこに行くんだろうと、ルイザは疑問に思いながらマールリアの背中に視線を投げる。

そうすると、彼女は店と店の間をぐぐつと曲がり、薄暗い路地裏に進んで行った。

早足で進むマールリアに、置いて行かれまいとルイザは小走りであわてて行く。

「待つてよー、マールヤ！ あれ？ この通りは確か……」

ルイザは、きよろきよろと首を回して辺りを見ながら言った。

「——インチキ占い師の所に行くの？」

ルイザの声が耳に入っていないのか、マールリアは黙ってそのまま進んでいった。

そうして、占い屋の前まで辿り着いたマールリアは、扉の前でぴたりと足を止めた。だが、この間あった小さな立て看板が、今日はお出されていない。

ルイザはマールリアの隣に立って訊く。

「今日は閉まってるみたいね。どうするマールヤ？」

けれども、マールリアはルイザに返事を返さず、じっとその場を動かない。

明らかに様子がおかしいマールリア。ルイザは気になって上半身を少し前に倒し、立ち尽くしている彼女の顔を覗き込んだ。

すると、マールリアは両拳を握って、思い詰めたように緊張した顔をしている。

「マールヤ？」

それを見て、ルイザはきよとした。

マールリアは扉に一步近づき、腕を伸ばしてノックをし始めた。

コン、コン、コンツと、乾いた木の音が鳴る。

……しかし、その音も空しく響いただけだった。

「ほら、お休みだって……」

ルイザはマールリアの背中に、やんわりと声をかける。

そうすると、突然マールリアはぐつと拳に力を入れて、ドン、ドン、ドンツと大きな音を立てた。

「ちよつとマーヤ、店の人に怒られるわよ！」

ルイザはびっくりし、後ろからマールリアの腕を両手で掴んでたしなめた。が、彼女は引つ張られても真顔のままだった。

その時だった。いきなり荒々しく扉が開いて、誰かが顔を出してきた。

「訪問販売はお断りって言ってんだろ！」

その人は鋭い声を出し、眉を高く上げてキツと睨んだ。それは、マールリアのよく知った顔。……—そう『ラマ』だった。

ラマはマールリアの顔を見て、一瞬大きく目を見開き、

「ありや、お姫様！」

と気が抜けそうなマヌケ声をあげた。

緊張感の欠片もないラマを見て、マールリアは少しムツとした顔を作る。

（何よ。もっとシリアスな声を出してくれてもいいんじゃない？）と内心思いつつも、直ぐにラマの目を見ながら用件を口にする。

「……大事な話があるの。入れてもらえる？」

ラマはニヤリと笑って即答した。

「ああ、いいよ。お姫様にはお世話になったし。お茶でも飲んで行けよ」

「何？ 何？ マーヤの友達？」

何が何だか分からないルイザが、二人の顔を交互に見てオロオロとしていた。

そうしてマールリアとルイザは、占い部屋の奥の部屋に案内された。

占い部屋と違って、奥の部屋はとにかく広かった。どれくらい広いかというと、人が走り回って運動が出来るほどだった。「無駄に駄々広い」という印象だ。

窓は一つも無く、床や壁は木で出来ている。壁には所々に明るい光を放っているオイルランプと、何が描かれているかよく分からない絵画が飾られ、角には小さな棚が置いてあった。その上には綺麗な白いお花が生けられた花瓶がある

中央には木でできた長方形のテーブルがあり、椅子が十脚も並べられている。食堂というよりは、会議室だ。

ルイザが口を半開きにさせ、両腕を開いて周囲を見渡した。

「うわぁ〜！ 占い屋の奥に、こんな広い部屋があるなんて」

「適当に、その辺座っていいよ」

ラマが中央にあるテーブルへ指を差して促した。

「じゃあ、お言葉に甘えさせて貰います」

そう言っマールリアはテーブル付近まで歩いて、入り口から一番近い椅子に腰掛けた。

「じゃあ、私はここー」

ルイザはマールリアの向かい側に腰掛け、行儀悪く足を投げ出してブラブラとさせた。

それから、ラマは歩いて奥の部屋へ消えていった。

暫くして、奥の部屋からサラボナが入ってきた。ラマも、サラボナの後ろに着いて来ている。

サラボナは丸いトレーにティーカップを二つ乗せて、ゆっくりと歩んで来た。

「いらっしやい、マールリアさん。また会えるなんて思ってもいなかったわ」

マールリアの姿を見て、ニツコリと微笑みながら挨拶をした。どこかホツとするような笑顔だ。

「あ、どうも」

マールリアもサラボナに向かって、軽く頭を下げながら挨拶を返す。

サラボナが、ティーカップをマールリア達の前へ置いた。中身は、甘く香ばしい香りのするお茶だ。

「わっかんないな。いつの間に友達作ったのよ。マァヤ」

ルイザは口をへの字にし、腕を組んで頭を何度も左右に動かしていた。

先程から何も知らない彼女だけが置いてけぼりだ。それを悪いと思っていたが、マールリアは胸が一杯一杯で、ルイザに事情を説明する余裕が無かった。

サラボナとラマは、座っている二人の前に並んで立った。

「で、どうしたんだ？ この前のことで慰謝料払えとか、そんな話？」

ラマは腕を組み、上から目線でマールリアを見ながらニヤニヤと笑っている。

（もう、思い出したくないのに……）

マールリアは、あの時のときめいた自分を思い出して少し恥ずかしくなったが、それを悟られないように知らん顔を作った。

サラボナの方はトレーを両腕で胸に抱えて、らしくない不安げな表情を浮かべている。

「……もしかして私達のこと、何か探りに来たのかしら？」

マールリアは本題に入る前に気を落ち着かせるため、ティーカップの取っ手を持ってお茶を一口飲んだ。気が張っているせいか、味なんて全く感じない。

それから座ったまま体を二人の方に向けて、意を決した強い瞳でサラボナを見た。

「今日は二人にお願いがあつて来たの」

「お願い？」

サラボナは首を傾けて問いかける。

マールリアは両拳を胸の前に出し、大きく息を吸って部屋中に響くような大声を張り上げた。

「私を三号にさせてくださいっ！！」

「ええっ！？」

サラボナとラマは、同時に驚きの声をあげた。マールリアの口から予想外な言葉が出て、二人はあっけらかんとしている。

「……あのねえ。前にも言ったけど、遊びじゃないのよ」

サラボナは頭痛を我慢するように額に手を当てて、顔を下に向けた。彼女の耳には、マールリアの発言が軽はずみに聞こえたようだ。また、額に当てていた手を離し、真面目な表情でマールリアの胸に人差し指を向ける。

「——それに私達は、あなたのお母さんを狙っているの。分かる？」

マールリアは立ち上がると、サラボナに息があたりそうなほど顔を寄せて、感情的な声を出した。

「私だって冗談で言っている訳じゃないわ！ 真剣よ！」

「いいんじゃないか？ サラボナ。」

今の二人じゃ火力がないし、お姫様が加勢してくれれば、俺達も百

人力だぜ」

ラマは喜んで賛成をする。

「そりゃそうだけど……。でも……」

サラボナは言葉を濁らせ、トレーを脇に挟んで腕を組み、難しい表情を浮かべた。

「あの……」

ふいに、様子をうかがうような控えめな声が三人の耳に入ってくる。

一人取り残されていたルイザが腰を上げて、立っている三人の中心に、のそつと入ってきた。そして、皆の顔を見回しながら、先生に質問をするように片手を挙げて会話に加わってきた。

「話が見えないんですけど……」

しばらく黙って話を聞いていたルイザだが、これ以上こらえることが出来なくなったようだ。

……マールリア達は、ルイザに今までの経緯を全部説明した。

「——ということがあったの」

「うわーっ、本物のツイン・マジックなんだ！」

マールリアが話し終わった途端、ルイザは浮かれた声をあげた。そして身乗り出し、好奇心一杯の瞳で二人の顔を眺め回した。

「いやー、まいったね。俺たち有名人！」

ラマは、ルイザから熱い眼差しを送られて、有頂天になっている様子だ。嬉しそうな笑みを浮かべて、照れ照れと後頭部を片手で撫でている。

「バカ。目立つためにやっているんじゃないのよ」

サラボナは、ラマを横目で睨みながら軽く叱った。

「よーしっ！」

急にルイザが、拳を握った片腕を上げて気合を入れた。何か言い出しそうなルイザに、三人は一斉に視線を向ける。

「マールヤが三号になるなら、私は四号になるわよ！」

ルイザはそう宣言して、楽しそうにニコニコと笑った。

「はあ……」

サラボナは溜息を吐き、目に手を当てて顎を上げた。……もつと話がややこしくなる。

向かい側に立っているマールリアの目を見ると、顎を少し下げた力強くサラボナの目を見つめている。

その射抜かれそうな目を見て、サラボナは溜息まじりの声を漏らした。

「仕方が無いわね……。命をかける覚悟があるなら止めないわ……」
ついに最後までしぶっていたサラボナも、断念してしまった。マールリアの真剣な目を見ていると、何を言っても無駄なような気がしたのだ。

その瞬間、マールリアはお日様のように明るく顔を輝かせ、両手を組んで少し飛び跳ねた。

「本当に！？　ありがとう！　サラボナ！」

「わーい！　私もツイン・マジックの一員だー！」

ルイザも子供のようにはしゃぎながら、両腕を広げてその場でぐるぐると回転した。

（思い切って、足を一步踏み入れてみて良かった……！）

マールリアは、どんよりと曇っていた心が綺麗に晴れて、清々しい気分になった。

「入ってもらったからには、これからたっぷりと働いてもらうわよ。覚悟してね！」

サラボナが人差し指を二人に向けて、小悪魔のように微笑みながら軽く脅す。

次にラマが二人の前に立ち、右手を少し上げてぐつと拳を握った。
「入隊おめでとう！　俺がツイン・マジックのことを簡単に説明す

るぜ！」

マールリアとルイザは、ラマに注目してパチパチと拍手をした。

「ツイン・マジックは一号が一番偉い！ 次に二号だ！」

つまり、番号が若いほど偉いんだ。上の命令は絶対だからな？」

ラマは説明し終わると、人差し指と親指を顎に添えて、フフンと得意気な顔をした。

その時、バコツと鈍い音が鳴った。サラボナがげんこつで、ラマの頭を帽子の上から殴ったのだ。

「イテテテテ！」

ラマは痛そうに顔をしかめて、両手で頭を押さえた。

「バカッ！ うちにはそんなルール無いでしょ！ まったくお調子者なんだからっ！」

サラボナは両手を腰にあてて、ラマに向かってガミガミと怒鳴った。まるで母親のようだ。

「あ、あはは……」

その光景を見たマールリアとルイザは、引きつった顔で苦笑いをした。既に、この二人の性格が把握できたような気がする。

気を取り直して、サラボナが右手を広い部屋に向けた。

「ここは作戦会議に使っている部屋なの。自由に出入りしていいわ」

「やったー！ 秘密基地みたいでワクワクするね！」

「へえ、意外と本格的……！」

と言いながら、マールリアは改めて広々とした部屋を見渡した。

「私、変装道具作っちゃおうかなー。目隠しに目の穴くり抜いてー」

なにやらルイザが人差し指を顎に当てて、にんまりと笑っている。彼女は完全にお遊び感覚だ。

「ってか、お姫様だったら、夜中王女の部屋に忍び込むこともできるし、毒だつて盛ることができるじゃないか！」

簡単に王女を殺せるじゃないか！」

ラマが腕を組んで、目を輝かせた。

「そういえばそうね」

サラボナは肘に片手を添えて、もう片手で頬杖をついた。

「ちよつと待って」

マールリアは右手を少し上げて、二人の話に割り込んだ。

「ツインマジックに入っておいて申し訳ないんだけど……。そこま
で気持ちはいつてないの」

「というと？」

二人は眉間を寄せてマールリアに問う。

「お母様は嫌いだけど……。殺すことなんてできない」

マールリアは視線を下に向けて、重々しい声で二人に心中を伝え
た。

それを聞いたラマは少々残念そうな表情をし、ふうと溜め息をつ
いた。

「……なるほどね。自分の親に少し反抗したいだけか」

「それでも別に構わないけど、私達は殺るわよ。貴女のお母さんを」
そう告げたサラボナは、怖いくらい真剣な顔をして、マールリア
を見つめた。

その彼女の厳しい眼差しに、マールリアは身体が硬直した。

（それは……。この二人の目的だから。止める権利なんて私にはな
い）

サラボナが重ねて念を押す。

「——それでもいいのね？」

マールリアは、素直にこくりと頭を動かした。

それから四人は、お互いの顔が見えるように立って自己紹介を始
めた。

「私は一応ツイン・マジックのリーダーをやっています。一号のサ
ラボナ＝ミアルマよ。よろしく」

サラボナが胸に片手を添えて、キリツとした眩しい顔で発言した。
彼女はシャキッと引き締まっていて、頼りがいのあるお姉さんの

ようだ。

（やっぱりリーダーだけあって、彼女はしっかり者みたいね）
とマールリアは思った。

「俺は二号のラマ＝デジャヴ。天才魔導師だ。ヨロシク！」

ラマが、片手でピースをしながら意気揚々と自己紹介をした。
彼は偉そうに先輩面をしていたが、はきはきと気持ち良くしゃべる姿がどこか憎めない性格だった。

（悪い人じゃないけど自分で天才だなんて……。私、何故こんな人にときめいたの……？）

マールリアは自問した。当然、答えは分からない。

次はマールリアの番だ。マールリアは微笑みながら声を発した。

「じゃあ私は三号ね、マールリア＝ムーンです。宜しく願いします」

そう言い終わった後、両手を揃えて丁寧にお辞儀をした。

「よろしく」

思わず三人も、マールリアにつられて深々とお辞儀をする。

マールリアは自分の顔に指を差して、更に言葉が続けた。

「皆がご存知の通り、私は姫なんですけど、姫扱いをしないでほしいの」

「分かっているわよ」

サラボナが優しい瞳で頷く。

「マ－ヤって呼べばいいのか？」

とラマが訊く。

「うん！ 普通の女の子として扱って」

マールリアは嬉しそうに首を縦に振りながら答えた。少し懂れていた『普通の女の子』になれるような気がして、喜びがあふれるマールリアだった。

「次は私ね？ 私は四号のルイザ！ 皆さんよろしく願いします！」

ルイザが片腕を高く上げて、皆に明るい笑顔を振りまいた。

相変わらず彼女は明るくてほがらかだ。一緒にいると、元気を分けてもらえるような気持ちになる。

「皆よろしくね。できれば早速明日から来てほしいんだけど……」

そのサラボナの言葉にラマが突っ込む。

「でもマーヤは忙しいだろうし、毎日顔を出すのは無理じゃないか？」

「ううん、来れる日はなるべく来るわ」

「やったー！！これからマーヤと会う日が増えるのねっ！！」

ルイザは耳に響くような高い声をあげ、マールリアに両腕を伸ばして飛びついてきた。

「ちよっ、ちよっとルイザ」

ぎゅっとルイザに抱きつかれたマールリアは、少し困惑した表情をする。このように、ルイザがマールリアにベタベタとするのはいつものことだった。

そうして、この日はお互いに握手をして解散になったのである。

*

その日の夜。またしても、マールリアは眠れそうになかった。

あの仮面を被っているような冷酷な母親を困らせてやるんだと思うと、いても立っても居られないくらい心がウキウキとしてくる。

思わずマールリアは、ベッドの中でくすくすと忍び笑いを漏らした。

（これから一体どんな活動をするのかな）

胸の中に期待をふくらませ、マールリアは布団の中でぎゅっと両拳を握った。

……無事に参加できたツイン・マジック。母に対するちよっとした反発心からの行動だったが、この時からマールリアの運命が徐々に変わっていくのであった。

【第三話・完】

いつもと何も変わらない朝だった。

光にあふれた眩しい太陽が昇って、そろそろ大きな街が活動し始める頃だ。

マールリアの部屋の窓から明るい陽が降り注ぎ、茜色のカーテンが綺麗なピンク色に映る。

今日も良い天気だ。

「マールリア様、もう朝ですよ」

オリビアの控えめな声がマールリアの耳に入ってきた。いつもの様に、マールリアの部屋の扉を叩いて呼び起こしてくれる。

その頃、マールリアは天蓋付きベッドの上で、目を真つ赤に腫らせて瞼をウトウトとさせていた。というのも、昨夜ツイン・マジックへの気持ちが高ぶりすぎて、あまり眠れなかったからである。

（……眠たいけど、早く準備をして行かないや）

ぼさぼさ頭のマールリアは、布団を両手で握ってゆっくりと上半身を起こした。そしてベッドから降り、きちんと身なりを整えて部屋から出て行った。

*

*

*

マールリアが部屋に戻るなり、胸の前に荷物を抱えたオリビアが入ってきた。彼女の両手には、カラフルな箱がいくつも積み重ねられている。

「マールリア様、今日もプレゼントが届いております」

オリビアはそう伝えて、丸テーブルの上にプレゼントの箱を置いた。

「ありがとう……」

その積み重なっている箱を見てマールリアは、またか、という呆

れ果てた表情をする。

このように、マールリアは貴族達からプレゼント攻撃を受けているのだ。

そして貰う物も大抵決まっている。磨きぬかれた美しい宝石、斬新なデザインの指輪、抱えきれないぐらいの大きな花束など、そう簡単に手に入らない代物ばかりだ。

しかし、だ。どんなに高級な物を貰っても、マールリアは少しも嬉しくはなかった。それよりも、プレゼントで自分の心を釣ろうとしている、贈り主の下心見え見えな態度にうんざりとしていた。

手を前に重ねて立っているオリビアが口を開く。

「マールリア様、直ぐに開封いたしますか？」

「ううん、いいわ。帰ってきたら自分で開けるから」

今着ている服を脱ぎながら、マールリアは返事をする。

「えっ！　もしかして、今日も外へお出かけですか？」

「ええ、これから毎日出かけるわよ。こんな城にいても全然楽しくないんだもの！」

愚痴っぽく言い放ち、マールリアはいつもの白いローブに頭を通した。

それを聞いて、オリビアは目に困惑の色を浮かべる。

マールリアは構わず支度を続けた。両腕を後に回して長い銀髪をゴムで結い、その上から赤いシュシュを二重に結ぶ。

そうして、いつものお出かけスタイルになったマールリアは片手を上げ、オリビアに向かって笑顔をこぼした。

「じゃあ、私行くからオリビアは下がっていいわよ。ご苦労さま」

「は、はい。失礼致します」

しょんぼりと元氣のない様子で、オリビアは部屋から出て行った。

両手で大きく窓を開くと、爽やかな風が部屋を通り抜けた。マールリアは窓から顔を出し、瞳を閉じてその風を肌を感じる。

「あーっ、最高！」

あまりの気持ちよさに、マールリアは思わず声を漏らした。自分の知らない世界が待っている。ツイン・マジックとして初めての活動に、マールリアはわくわくと胸が踊るような気持ちになっていた。

さあ行こうと、マールリアは窓枠を両手で掴み、片足をかけて上半身を外に出した。続けて、もう片足も外に出して窓枠に座る。

マールリアは足を伸ばして、直ぐ隣にある太い木の枝に飛び移った。

「よつと！」

両腕を開いて、バランスを取る。

「おーい！」

ふと、聞き覚えのある声がマールリアの耳に届いた。

視線を落とすと、マールリアが立っている木の枝の下に、ラムが顔を上げて両手を大きく振っている。

その姿を見てマールリアは、あつと驚いた顔をした。

「えっ、ちよつと。どうしてラムがここにいるの？ 兵士に見つかったら危ないわよ！」

マールリアは胸をハラハラさせて、庭周りに誰かいないか首を回して確認した。……幸い誰も居ないようだ。

そんなマールリアの心配をよそに、ラムは余裕しゃくしゃくな表情で、伸ばした右手を手招きさせる。

「ここの兵士なんてちよろいさ！ 早速仕事だぜ。早く降りて来いよ！」

相変わらずの自信家ぶりだ。

まったく……、とマールリアは無鉄砲なラムに呆れ返った。もし兵士に発見されたら、自分は何とか誤魔化すことができるが、彼の場合はただじゃ済まないだろう。

「一体どこから来るのよ、その自信は。何かあったら私は知らないからね……！」

小言をいいながら、マールリアは止めていた足をまた横へ動かし始めた。

「なあ」

と、ここで急にラムが真面目な声を出す。

何よと思つて、マールリアは再びラムの顔を見た。

すると、変に真剣な顔つきでラムは上を見ていた。それからスツと片腕を伸ばし、マールリアの足元に人差し指を向ける。

「スカートの中、丸見えなんだけど」

「えっ!？」

マールリアはぎょつとし、慌てて両手を伸ばしてスカートを押さえた。と、その拍子に、ふらつとバランスを崩してしまい、上半身を前後へよろよさせた。

「あつ……、あつ……、あつ……!」

両腕をバタバタとさせて、ふらつくマールリア。

「お、おい!」

地上から、ラムの慌てめいた声が聞こえる。

マールリアは何とかバランスを戻そうとあがいていたが、それも叶わず後ろへ倒れてしまった。

「きゃあああっー!!」

黄色い悲鳴をあげながら、マールリアは背中から下へ落ちて行つた。

思わずぎゅつと目を強く閉じた時、……急に身体がふわつとして空を飛んでるように感じた。

（……あれ? 痛くない）

ゆっくりと目を開けると、マールリアの体は横になって宙を浮いていた。目の前にラムの顔がある。

ドキリと胸を鳴らして、マールリアは大きく目を見開いた。

地面に落ちたと思つていたが、どうやらラムが捕まえてくれたらしい。マールリアの膝下と脇下を手で持って、抱きかかえていた。

（わ、わ、わっ! 近いっ!）

ラマの顔があまりにも近くて、マールリアの頬が朱に染まった。動揺して視線がふらふらと宙を泳ぐ。

「これが本当の、お姫様だっこってやつだな！」

とラマは、満悦の笑顔をした。

マールリアは初めてのお姫様だっこに、嬉しいような恥ずかしいような気分になっていた。

だが、そんな気分もほんの束の間、マールリアの脳裏にふっと先程の記憶がよみがえった。

（さっき……スカートの中……、見られた……）

マールリアの胸の中に小さな怒りが生じて、みるみるうちに蓄積されていく。

キツと目を吊り上げ、マールリアは思いっきりラマの頬に平手打ちをした。

パンツと派手な音が庭に響く。

「いつてー！ 何すんだ、助けてやったのに！！」

ラマは顔をしかめ、叩かれた勢いで手を離してマールリアを足から下ろした。

すぐさまラマから離れ、マールリアは向かい合わせに立って指を差す。

「さっき、私のスカートの中覗いたでしょ！ このスケベッ！！」

「うるせー！ 男は皆スケベなんだよっ！」

「っ……！」

そのラマの開き直ったセリフを聞いて、マールリアはますます激怒した。今度は怒りで、顔を真っ赤にさせる。

「バカッー！！ 死んじゃえー！！」

マールリアは両拳を胸の前に構えて、とても姫とは思えぬ乱暴な言葉を吐き捨てた。

それから二人は城壁を乗り越えて、大通りを歩いていた。

ぐつと下唇を噛み締めたまま、マールリアは一人で足早に進んで

いる。

ラマの方は腕を組んで、うわ言のようにぶつぶつと何かを呟きながら、マールリアの後を着いて来ていた。

「ったく……。こんなだったら、あの時、薬で眠らせている間に襲っておけば良かった……」

とんでもない言葉が耳に入り、マールリアは勢い良く振り向いて鋭くラマを睨んだ。

「はあっ！？　なんか言ったっ！？」

恐ろしい形相を浮かべたマールリアを見て、ラマは苦笑いをしながら両手のひらをひらひらとさせた。

「冗談だってば！　いくら何でも、そんなことするはずないだろう？」

（……何なのよー！　この男は……！）

マールリアは先程まで楽しみにしていた気持ちがすっかりと消え去り、怒りと恥ずかしさでテンションがどん底まで落ち込んだ。

*

*

*

二人が会議室に入ると、入り口付近にサラボナとルイザが立って待っていた。

「やつほーい！　マーヤとラマちゃんだっ！」

ルイザが手を振りながら、いつもの眩しい笑顔で二人を出迎えた。

「ルイザ、サラボナ、おはよう！」

「よっ！　ルイザ」

マールリアとラマは右手を軽く上げて、先にいた二人に挨拶をした。

「あら、ラマ。どうしたのそれ？」

サラボナが不思議そうに、ラマの頬に指を差して問いかけた。その頬には、マールリアが叩いた真つ赤な手形の痕が残っている。

「何でもない」

そう一言いうと、ラマはムスツと不貞腐れた表情をして、手のひらで頬を撫でた。

「マールリアはというと口を尖らせて、腕を組んだままそっぽを向いている。」

「初日からケンカなんてしないでよね……」

サラボナは両手を腰にあてて、首を横に振りながら呆れ声を出した。どうやら、二人の様子を見て察したようだ。

「いよいよツイン・マジックの仕事内容が伝えられる。ラマと、マールリアと、ルイザは横に並んでサラボナの前に立った。

サラボナが腕を組み、三人の顔を見て話し始めた。

「さて、今日の仕事だけど……」

姿勢をぴしつと正して、真面目な顔つきになる三人。

「ウィリーさんから依頼が来ているの。ラマ、マーヤ、ルイザの三人で向かってもらえる？」

「了解ー！」

片腕を高く上げてラマが元気に返事をする。声を出したのは彼だけだった。

「依頼？」

二人はきょとんとして、サラボナの目を見た。ツイン・マジックの仕事は、誰かから依頼を受けるものなのか？ と二人は思った。

「まあ、ラマに着いて行けば分かると思うわ。宜しくね、ラマ」

少し困った笑みを浮かべて、サラボナは言った。心なしか彼女の態度がよそよそしい。

ラマは二人の顔を見て、ニヤツと何かを企む様に笑った。

「よし、行かー！」

そう促すと、ラマは扉に向かって歩き出した。

マールリアとルイザは、さっぱり分からないままラマの後ろを着いていった。

三人は基地から出て、うす暗い裏通りを進んでいく。ラムが先頭を歩き、その後ろからマールリアとルイザが横並びになって着いて行った。

歩きながらマールリアが、ラムの背中に顔を近づけて声をかけた。「ねえ、ラム。依頼ってなあに？ ツイン・マジックの仕事って依頼も受けているの？」

「まあまあ！ それは着いてからのお楽しみだ」

ラムは、やたらもったいをつける。

「いいじゃない。教えてよ」

「ひーみーっー！」

「あーもう。その言い方頭にくるわ！」

やや怒った顔をするマールリア。

そんな二人の会話を聞きながら、ルイザは瞳をぱちぱちと瞬きさせた。このようにマールリアが活発に話す姿は、かつて見たことが無い。

ふとルイザは思った。

（んー？ 何だかマーヤが生き生きしている。もしかして……）

「ねーね。マーヤは好きな人やフィアンセっているの？」

ルイザのひよんな質問に、マールリアは瞳に驚きの色を見せた。

「えっ？！ 何よいきなり……。今の所はいないけど……」

「なるほど、なるほどー」

ルイザは相槌をした後、こう思った。

（きっとマーヤって、男の子と付き合ったことが無いんだろうな。

こんなに可愛いのに勿体無い……）

マールリアがさっきの話を続ける。

「……だけど結構いい年齢だし、そろそろお母様から結婚を命令されそう……」。

相手は異国の王子様なのか貴族なのか……」

「そつかあ……」

「この前も、お見合いパーティーまがいなことをさせられたし……」
悲しげに眉を寄せるマールリアを見て、ルイザはしゅんとした。
何とも切ない気持ちになる。

（好きでもない人と結婚だなんて、なんて可哀相なの？ マーヤは
フローラインの操り人形じゃないのよ）

何とか彼女を助けることができないかと、ルイザは腕を組んで必
死に頭を働かせた。

そうしているとラムが振り返って、二人の会話に入ってきた。

「マーヤが強制結婚させられる前に、俺達がフローラインを殺せば
いいじゃないか！」

「おお、ラムちゃん。それイイ!!」

人差し指をラムに向けて、ルイザは顔を輝かせた。

けれども、マールリアは目を泳がせて、困った様な面持ちをして
いる。

（もしかして、ありがた迷惑なの？！）

ちっともマールリアの心が読めなくて、ご機嫌斜めになるルイザ。

そんなこんな話しているうちに、三人は目的地に辿り着いたので
ある。

ぶちつと草が引き抜かれる音が鳴った。

（一体何をやっているの……、私は……）

マールリアは草を右手で握って、根っこから引き抜いた。

緑色の芝生が生い茂っている広い広い庭に、マールリア達はいた。この庭の持ち主のウィリーという人は、物凄いい金持ちのようだ。赤茶色した大きな館に、外にはひょうたん型のプール、敷地内にちよつとした林もある。

大きな館はとても洒落ていて、モダンな作りだ。マールリアの住んでいる古めかしいお城とは大違いだ。

そうしてみると、ウィリーはとても趣味のよい人だということがうかがえる。

そんな場所でマールリアは何をしているのかというと、しゃがんで芝生の所々に生えている大きな雑草を引き抜いていた。

「——で、私達はどうして草取りをしているの……？」

マールリアは眉間を寄せ、口を尖らせながら立っているラマの顔を見上げた。何故か彼だけ立って、草取りをしている二人を上から眺めている。

「お得意様の依頼だ。頑張れよ二人とも！」

ラマが微笑みながら応援をする。

「ねー、ラマちゃん。どういうことなの？ こんな雑用するなんて聞いているわよー！」

不機嫌な顔つきで、ルイザはその場にペタンと座って足を投げ出した。

「悪いけど、俺達の仕事はツイン・マジックだけじゃないんだ」

「何それー」

不満そうな声を出すルイザ。

「表では何でも屋、裏ではツイン・マジックさ」

「何でも屋？」

タイミングを合わせたように、マールリアとルイザの声が重なった。

「そう。生活費と軍資金確保でね。これから二人には、何でも屋の仕事もやってもらっよ」

「えええ……」

二人はうんざりとした表情を浮かべて、がっくりと頭をうな垂れた。

「店の看板に『何でも屋』って表示していたけど、気づかなかったか？」

「占い屋しか見てないわよ……」

とマールリアは顔を起こして言った。

「あ、そう。とりあえず頑張れ！」

そのラマの素っ気ない言い方に、マールリアはふくれる。

「どうしてそう他人事なの？ ラマも手伝ってよ。こんなに広かったら今日中に終わらないわ」

「今日は俺、監視役なんだ。二人が逃げ出さないようにね。言っておくけど、サラボナの命令だから誤解するなよ」

ラマは手のひらを向け、威張った顔で言い訳をするように説明する。

「うっ……」

何も言い返せず、マールリアは悔しい表情をする。

「さー、がんばれ、がんばれ！」

ラマは腕を組んで、愉快そうにマールリアを眺めた。あたかも姫が草取りをしているという、めったにない光景を楽しんでいるかのよう。

その態度がしゃくにさわって、マールリアは抜き終わった草の塊をぎゅっと両手で握り締めた。

「このおっ……！」

マールリアは腕を力いっぱい振って、握った草をラマに投げつけた。草と泥が入り混じった塊が、ラマの顔面に直撃する。

「どわっ！！ 何すんだよっ！！」

とっさにラマは一步後ろに飛び退き、しかめっ面をした。

「草を投げつけるなんて絶対に姫じゃないなっ！」

顔に付いた泥を両手で払いながら、ラマはマールリアを睨んだ。

マールリアも引き下からずに怒り声を出す。

「何よっ！ 少しぐらい手伝ってくれてもいいでしょっ！！」

その時だった。二人の言い合いを止めるかのように、ルイザが両腕を水平に広げて後ろに倒れた。

バタツという音を聞いてマールリアとラマは、何事かとルイザの方へ目を移す。

仰向けに寝転がったルイザは、地面を叩くように両手足を上下にバタバタと動かし始めた。

「もー、こんなのヤダヤダッ！！ 私は正義の味方になりたいのっ！！」

その姿は、まるで駄々をこねる子供だ。

ルイザの行動を見て、マールリアは頬を引きつらせた。

（ああ、いつものルイザだ……）

「うわあ……」

危ない物でも見るかのように、ラマが上半身を反らせながら後へ下がった。ルイザの性格を知らない人から見れば、それはそれは驚きの光景だろう。

「ルイザッ。女の子なんだから、そんな所で寝転がっちゃダメよ！！」

マールリアは口元に両手を立てて、ルイザに向かって叫んだ。

すると、その声でぴたりとルイザの動きが停止した。彼女は大字で寝転がったまま動かない。

「ルイザ？」

とマールリアが名前を呼んでも答えない。マールリアは急に心配に

なり、腰を上げてルイザの所まで歩いた。

「ねえ、大丈夫なの？」

声をかけながら、マールリアは両手を膝に当てて前かがみになった。そして、上からルイザの顔を見下ろすと……。

「すー、すー……」

なんとルイザは目を閉じ、口を大きく開けて安らかに眠っていた。今度は泣き疲れた子供のようだった。

それを見たラムが引き気味な顔で、両手を上げて肩をすくめた。

「おいおい、ここで寝るか？　マーヤ、あのお嬢さんを何とかしてくれよ」

マールリアはその場にかがみ込み、両手でルイザの体をゆさゆさと揺すりながら呼び起こす。

「もー、ルイザッ！　私一人じゃ終わらないから。起きてよう！」

「ヤダ……、少しの間寝る……」

ルイザは開いた口から、ぼそりと声を漏らした。

「だめだー」

頭を下げてマールリアは落胆した。ルイザが一度決めたら最後までそうすることを、マールリアは良く知っている。

もう彼女のことは諦めて、一人で仕事に取り掛かった。

今日のノルマは、プール横の広い敷地全部の雑草取りだ。

マールリアは一人で、雑草をブチブチと抜いていく。ずっと同じ姿勢で、だんだん腰が痛くなってきた。

（いたーい、最悪……。私は姫なのに……）

心の中で文句を言いながら、マールリアは片腕を後ろに回して、拳でトントんと腰を叩いた。

しかし腰だけではなく、背中、足、肩、関節、すべてがだるくて痛い。初めての草取りで、マールリアの身体全体が悲鳴を上げていた。

さらに長い時間身体を動かしている為、額からだらだらと滝のよ

うに汗が流れてくる。

マールリアは手の甲で流れる汗を拭った。これもマールリアにとって、初めての経験だった。今までこんなに汗を流したことがない。両手を前に差し出してみると泥だらけで、おまけに爪の中まで入っている。これじゃあ細い指も、綺麗な爪も台無しだ。

（はぁ……。私、本当に何やってんだか……）

マールリアは頭を下げて、深い溜息をついた。

「ちょっと休憩ー！ あー、いたたたっ！」

マールリアは顔をしかめ、片手で腰を押さえながら立ち上がった。ようやく同じ姿勢から解放されて、腰の痛みが少し和らぐ。

パンパンと自らの手を叩いて泥を払っていると、すぐ近くに立っていたラマが笑みを浮かべてこう言った。

「初めての仕事、いい経験になっただろ？」

汗を流しながら働くななんて、お姫様には無縁の世界だからな」

そのとおりすぎて、マールリアは返す言葉もなく、黙り込んだ。

（……お仕事をしてお金を貰うことって、こんなに大変なんだ……）

世間のことが、一つ勉強になったマールリアであった。

「んっっ！」

マールリアは両手を腰に当てて、上半身を後ろに反らせながら思う存分体を伸ばした。

「しかしこうやって見ると、本当に普通の女の子なんだけどなあ、マールリアは」

とラマは真顔で、マールリアの嬉しい言葉をさらっと言った。

「えっ、そ、そうかな？」

マールリアは妙にうわずった声を出し、かすかに微笑んだ。

「うん。言葉使いや仕草なんかさ。とても姫には見えないな」

「それって、褒めているの？ けなしているの？ まあ、いいわ……

……。

私ね、今本を読んでいるの」

「本？」

「うん。女の子が異世界に飛ばされて、仲間とともに冒険をするお話。」

その主人公の女の子が元気で可愛くてね。言葉使いを真似しているの！」

「あー、なるほど！ それで『バカー、死んじゃえー！』なわけか」
「ラムは、からかうように悪戯っぽく微笑んだ。」

「ちよっ！」

マールリアは今朝の出来事を思い出し、あまりの恥ずかしさに慌てた顔をする。

そんなマールリアの面食らっている顔を見て、ラムは吹き出し、楽しそうにお腹を抱えて笑った。

ラムにつられたのか、マールリアもおかしくなってきた、くすくすと笑った。

（ああ……、何だか楽しい……！ 不思議な気分……）

マールリアは、自分に気を使ってこない男の人とお喋りができて、心底楽しくなっていた。

休憩タイムを終わりにして、ここからまた過酷な草取りの始まりだ。

マールリアは再び草を抜き始める。

「ね、ラマやサラボナは、どうしてツイン・マジックをやっているの？ 始めたきっかけってなあに？」

マールリアは、抜いた草を両手でまとめながら尋ねた。これは自分がツイン・マジックに加入する前から、気になっていたことだ。

「ああ、俺もサラボナも仇討ちかな」

「仇討ち……」

マールリアはわずかに眉をひそめた。頭を上げてラマを見ると、いつになく真剣な表情をしている。

「フローラインは、危険因子を排除しているんだ」

「危険因子？」

「自分に危険が及ばないように、力のある有名魔導師達を影で消していつてゐるんだ」

「えっ……」

マールリアは顔を硬直させた。

ラマは腕を組んだまま、円を描くようにゆっくりと歩き出す。

「俺の家系も『時を操る』という珍しい魔法が使えてね。王女から目を付けられて、父親が殺された」

「そ、そんなっ……！」

マールリアは、大きな青い瞳を揺れ動かす。

足を止めて、ラマはマールリアの目を見つめた。

「サラボナの方は、大切な友達がムーン城の兵士に殺されたんだ」

「っ……！」

マールリアは悲痛な表情で、ラマの目を見つめ返した。愕然として声も出ない。

（お母様はどれだけの人を苦しめているの……）

マールリアは母親が行っていることを全て受け止めているつもりだった。けれども、こうやって新たな話を聞くと心が折れそうになる。

そして自分の母親が、ラマや、サラボナや、大勢の人達に辛い思いをさせていると考えると、胸が申し訳ない気持ちで一杯になってくる。

「ごめんね……」

マールリアは俯いて、消え入りそうな声で謝った。……それ以外の言葉が見つからない。

「どうしてマールリアが謝るんだよ。関係ないだろ」

「……」

口をつぐんで、マールリアはゆっくりと草を抜き始めた。

会話はそこで途切れて、辺りが重苦しい空気に包まれる。

ラマは俯いているマールリアの顔を少し見て、ふらっとどこかへ歩いていった。

（こんな酷いことばかりして、お母様は一体何をしようとしているの……？）

すっかりとマールリアは沈み込んで、全身から暗いオーラを放っていた。まるで、マールリアの周りだけが曇っているかのような暗さである。

次の草に手をやった時、突然ピンク色のお花が目の前に飛び込んできた。

マールリアは驚いて顔を上げた。

見ると、ラマが前かがみになり、片腕を伸ばして一輪の花を差し出している。

「ほら、誕生日プレゼント！」

と言って、ラマはマールリアの顔にお花を近づけた。

「えっ」

マールリアは少しドキリとした。

「マ—ヤ、この前誕生日だっただろ？ だからこれ」

そう言うところまでは、マールリアの手首を軽く持って、その手にお花の茎を握らせた。

「あ、ありがとう」

マールリアは顎を少し引いて、上目使いでラマの顔を見つめた。心臓がトクントクンと小さく波打ち始める。

お花が渡せて満足したのか、ラマは上機嫌に微笑んでいた。

マールリアは、その素朴なプレゼントに暖かさが伝わってきて、とても嬉しく感じた。優しい日差しを浴びているように、心がほわほわとする。

「ね。……このお花どうしたの？」

「ん？ あそこに一杯生えていたから取ってきた」

ぐつと腕を伸ばして、ラマはあさつての方向を指差した。

マールリアは、ラマが示した方に視線を向けた。すると……、赤茶色のレンガで四角く囲まれた小さなスペースに、綺麗なお花が沢山生えていた。

「——って、あれは花壇じゃないのー！！」

マールリアは激怒して勢い良く立ち上がった。

「なんだ、花壇だったのか」

両手を腰にあてて、花壇の方を見ながら、ラマは呆氣にとられた顔をしていた。

（だ、だめだ……、この人のペースに着いていけない）

どつと疲れて、マールリアは額に手を添えた。せつかくのいいムードも、全てぶち壊しである。

「あれ？」

ふいにラマが何かを発見したような声をあげる。彼は額に手をかざして、遠くを見ていた。

「ん？ どうかしたの？」

マールリアもそちらに視線を移すと、灰色のローブを着た男が五人、館の方へ向かって進んでいる姿が見えた。

「あの灰色のローブ、ムーン城の魔法兵士じゃないか？」

「本当……」

少し嫌な予感がして、マールリアは眉を動かした。

「様子見に行くか」

「うん」

そうして館付近までやって来た二人は、少し離れた所に生えている大きな木の陰に隠れて、様子をうかがうことにした。

見ると広い芝生の上で、四十ぐらいのおばさんと兵士達が、向かい合って立っていた。

四十ぐらいのおばさんは、おそらく依頼主のウィリーだろう。髪はお団子結びをしていて、上品そうな藤色の服を着ている。

「またあんたたちかいっ！ 何度来られても答えは同じだよ！」

ウィリーは怒っている様子で、激しく大声をあげた。

喧嘩でもしているのだろうか、ウィリーがいまいしげに兵士達を睨んでいる。非常に険悪なムードだ。

「ウィリーさん、いい加減この土地を譲っては頂けませんかねえ」

「さっさと出て行った方が身の為だぜ？ フローライン様は気が短いお方だから」

何やら兵士達がうすら笑いを浮かべて、ウィリーを遠まわしに脅している。この兵士達はウィリーに、ここの土地から立ち退けと強要しているようだ。

しかし、ウィリーは負けん気な顔で、犬や猫を追い払うように片腕を振った。

「ここは旦那が残してくれた大切な場所なんだから、絶対に譲らないよっ！」

さっさと出ていきなっ！」

なかなか度胸のすわったおばさんである。

一方、木の後ろでそれを見ていた二人。

ラムが腹立たしそうに眉を上げて、兵士達を睨んでいる。

「ったく、柄の悪い連中だなっ！」

「うちの兵士って普段こんなことをしているの……？ 情けない……」

疲れた顔を作り、背中を丸めるマールリア。

「とりあえず行ってくる！」

いきなりラムは走り出して、ウイリー達の所に向かって行ってしまった。

「え！ ちょっと、ちょっと。私はどうすればいいの……！」

マールリアは一人ぼつんと、その場に取り残された。

「ウイリーさんっ！」

「おお、何でも屋さん……！」

ウイリーはラムが走ってきている姿を見て、ほっとした様な表情をした。

ラムは、ウイリーの元に駆けつけた。

怒りで顔を赤くしたウイリーが、顎を上げて兵士達へ向ける。

「こいつら、しつこいんだよっ！」

「おい！ お前らっ！ この土地を奪ってどうするつもりだっ！」
いきなり割り込んできたラムに問いただされて、兵士達がきよんとする。

「ん？ 誰だ、お前」

その質問待ってましたと言わんばかりに、ラムは両手を腰に当てて堂々と胸を張った。

「俺は通りすがりの何でも屋だよ！！」

「何でも屋？ 部外者は我々の邪魔をするなあ」

舐めたような口調で言いながら、兵士の一人が頭を傾ける。

ラムは、ウイリーに顔を寄せて耳打ちをした。

「ウィリーさん。報酬を上乗せしてくれるなら、こいつらを追っ払ってやってもいいですよ」

「それじゃあ、お願いしようかね」
とウィリーは頷いた。

ラマは片手を腰にあて、もう片手は兵士達に指を差して勝気に微笑んだ。

「よし、商談成立！ お前ら覚悟しろよ！」

「何だガキ。一般人のくせに、たった一人で我々ムーン城の魔法兵士に盾突く気か？」

兵士の一人が手のひらを差し出して、ラマを馬鹿にした様にニタニタとしている。

それを無視し、ラマは両腕を前に伸ばして、両手のひらを兵士達に向けた。

「先手必勝っ！！ スローモーションっ！！」

叫び声と共に、ラマの両手のひらから銀色の太い光線が伸びる。ヒュンツと素早く光線が飛んで行き、兵士の足部分に当たった。

「うわっ、貴様何をしたっ！」

兵士は驚いて、一歩後ろに下がろうとした。――が、右足がゆっくりと動く。どうやら足がスローモーションになっているようだ。

ラマは嬉しそうに親指を立てて、兵士達へ向けた。

「よしっ！ 一丁上がりー！」

魔法を受けた兵士が顔をこわばらせて、右足を上げたまま後ろを振り向いた。

「こ、こいつ変な魔法を……！」

「よしっ、全員魔法の準備だっ！」

残りの兵士達が、両手のひらを前に出してラマへ向けた。その手のひらの前に銀色の光の玉ができて、次第に大きさを増してくる。突然ラマは芝生の上を風のように走り出した。兵士達の周りを、大きく円を描くように走っていく。

走っていくラマに合わせて兵士達は、手のひらを動かしていった。

「逃がさんぞっ！ 撃てー！」

兵士の一人が声を張り上げると、全員手のひらから丸い光の玉を放った。

その兵士達が作った光の玉は人間の頭ほどの大きさで、マールリアの魔力と全然比べ物にはならなかった。しかし、当たると痛いのは確かだろう。

ラマは猛ダッシュをして、飛んでくる光の玉を次々と避けていく。その外れた魔法は芝生に当たって、丸いハゲが次から次へとできていった。

突如、光の玉がラマの足元に飛んできた。

ラマは体を前に投げ出して大きく飛び、軽やかに空中で一回転して着地した。バサッと、帽子が芝生の上に落ちる。

すかさず両手のひらを前に出して、ラマは兵士の足元に銀色の光線を当てた。

「ぐっ！」

魔法を受けた兵士は、下を向いて足を両手で押さえた。

「二丁上がりっ！」

楽しそうに笑いながらラマは走っていく。

今度は、頭の高さに光の玉が飛んできた。直ぐにラマはしゃがんで、両手のひらを兵士に向けた。手のひらから銀色の光線が伸びて、兵士の足元に当たる。

「うわっ！」

魔法を受けた兵士は両腕を開いて、足元をふらつかせた。兵士はそのままバランスを崩して、すっころんだ。

ラマは立ち止まり、挑発するようにニヤリと笑った。

「三丁上がりっ！」

「死ねっ！ クソガキッ！」

突然兵士の一人が駆け走って、ラマにナイフを突きつけてきた。

「よっ！」

ラマは身体を後ろに反らせ、芝生に両手をつけてグルッとバク転

をした。兵士のナイフはバク転中のラムの足に蹴られて、回転しながら遠くへ飛んでいった。

ラムは着地をすると素早く両手のひらを出して、目の前にいる兵士の足元に銀色の光線を放った。

「なっ！」

兵士は一瞬ビクンと身を動かして、魔法を受けた両足を見た。

「四丁、そして残りもう一丁っ！」

続けてラムは両手を動かして、残りの兵士の片腕に銀色の光線を飛ばした。

「わっ！ 腕が……！」

残りの兵士も顔を引きつらせて、魔法を受けた片腕に力を入れている。

「五丁上がりっ！ しゅーりょー！」

「うつつ……、何だこれは……！」

魔法を受けた兵士達は顔を歪めて、無理やり身体を動かそうと必死にもがいている。

それを見たラムは両手を腰にあて、顎を上げて鼻高々の様子。

「へっへっー、見たか天才の力を！」

と、すっかり勝利者気分だ。

マールリアは木から顔を横に出して、ラマの姿を見ていた。
（へー、ラマって身軽なのね。さすがツイン・マジックのメンバー
だわ）

実の所、マールリアは手伝いに行こうか迷っていたが、ラマの言う『天才の力』とやらを見てみたかったので、お手並み拝見とばかりにここで眺めていたのだ。

感心して見ていると、遠くにいるラマが急にこちらを向いた。

「んっ！？」

目を丸くするマールリア。

ラマはピンと腕を伸ばして、マールリアの方に指を差した。

「ここからは俺の部下が戦う！ それ行け、マーヤ！」

「んなっ！」

マールリアは前のめりになって、ガツンと木の幹に頭をぶつけた。
「ちよっとー、天才なんでしょー！！ どうして締めは私なのよっ

ー！！！」

マールリアは両腕を上げて、大声で怒鳴った。

「俺は天才だけど、補助魔法しか使えねーっつの！」

「しょうがないわねー！」

お花を木の根っ子付近に置いて、マールリアはラマの元へ駆け走った。走りながら両手のひらを前に出して、魔力を込める。

マールリアの手のひらの前に、じわじわと銀色の光が集まってきた。

「よっしゃ、行けー！」

ラマが笑顔で、拳を高く上げてぐるぐると回した。

マールリアはラマの隣で足を止めて、両手のひらに作った大きな光の玉を解放させた。

「ムーン・ライトッ！！！」

その大きな銀色の光の玉は、もがいている兵士達に向かって飛んでいった。

当然マールリアの魔法を避けることができず、もろに兵士達へ命中した。

「ぐわっ!!」

「ギャー!!」

魔法が当たった衝撃音と、兵士達の叫び声が入り混じって辺りに響く。

兵士達は光の玉に押されて大きく宙を飛んで行き、地面に投げ出された。その瞬間、強く身体を叩きつけられて、そのまま兵士達は気絶していった。

起き上がってくる者がいないのを確認したマールリアは、両腕をゆっくりと下ろした。

ラマが笑って、調子よく親指を立てた。

「さっすが、マヤー!!」

「何が部下よ! いきなり振らないでよね。心の準備が出来てないんだから!!」

マールリアは腕を組んで、頬を膨らませた。

「驚いた! お嬢さん強いんだねえ!!」

離れて見ていたウィリーが、目を光らせてマールリアを褒め称える。

「いえいえ」

マールリアは後頭部を手のひらで撫でながら、ウィリーに向かって照れ笑いをした。

ラマが落とした帽子を拾って被った後、ウィリーの顔を見て質問をした。

「フローラインは、どうしてこの土地を狙っているんです?」

「ああ。王女はここに軍事施設を作るつもりらしくてね。しつこかったんだよ、あいつら。」

本当に助かったよ」

「へえ……」

二人は眉を寄せて複雑な表情を浮かべた。

（お母様、どれだけ皆に酷いことをしているのよ……）

気を取り直してマールリアは、ボロボロになって倒れている兵士達に指を差した。

「この兵士達どうします？」

うーんとウイリーが考えている所、ラマが案を出した。

「荷車で外にほっぽり出すか」

「そうだね。そうしよう」

そう同意してウイリーは、館の裏の方へ歩いて行った。

しばらくして、ウイリーが両手で大きな茶色の荷車を引いてきた。そして二人の前で足を止めて、にっこりと笑いながら荷車の取っ手を地面に下ろした。

「じゃあ、よろしく頼んだよ」

ウイリーからお願いされたラマは、両腕と足を開いて大げさに後ずさった。

「えー、俺達がすんの？」

「これも報酬に入れるからさあ」

「じゃあ、ラマ頑張ってね！」

マールリアはとっておきの笑顔を作って、他人事のように言った。まるで、草取りを手伝ってくれなかった当て付けのように。

「何で俺だけだよ！」

「こういうのは男の人の仕事でしょう？ 私は草取りの続きがあるの！」

くるりとマールリアはラマに背を向けて、歩きながら片腕を上げた。

「はあー、仕方ないな……」

ラムは眉を下げ、倒れている兵士の腕を掴んで、荷車の方へズルと引きずっていった。

そうしてマールリアは、草取りをしていた場所に帰って来た。空を仰ぎ見ると、だいぶ陽が傾いている。

「馬鹿な兵士達のせいで時間のロスになったわ……。今日中に終わるかなあ……」

マールリアは、ぼつりと独り言を呟いた。

ルイザの方に視線を向けると、やっぱり大の字で寝ていた。

いつまでこの子は寝るんだと思い、マールリアはしゃがんでルイザの体を両手でゆすった。

「ルイザッ、いい加減に起きてよ！ このままじゃ終わらないわ！」

「すーすー……」

だがルイザに反応は無い。彼女は遠慮なく口を開けて寝ていた。きっとルイザは最後まで起きないだろうと悟ったマールリアは、諦めて草取りを再開した。

「あと少し……」

陽が沈んで薄暗くなってきた空を見ながら、マールリアは焦って草を掴む。黙々と、ただひたすらに草を引っっこ抜いていった。

その時、ブチッブチッと自分以外の誰かが、草を引き抜いている音が聞こえた。

（ん……？ ルイザ？）

マールリアは不思議に思って、しゃがんだまま首を後ろに向けた。

「……あ」

マールリアは目を見開いた。

少し離れた場所で、かがんでいるラムの背中が見える。彼は草を抜いて手伝ってくれていた。

その姿を見て、マールリアは目を細めて微笑んだ。

（何だかんだ言って、手伝ってくれているんだ。

今朝はとんでもない人だと思っていたけど、結構いい人じゃない）

今日のノルマが終わった頃、辺りは真っ暗になっていた。

大きな門の前でウィリーと三人は、向かい合わせに立って挨拶をした。

「お疲れ様、本当に助かったよ。ありがとね」

報酬を貰った三人はウィリーに一礼をして別れた。

そうして、三人は横一列に並んで家路へ向かう。

「ふわあ……」

口元に手を当てて、ルイザが大きなあくびをした。

「結局ルイザは、最後まで寝ていたわね」

「まあ、なんとか今日中に終わったな」

マールリアとラマは苦笑いをしながら、ルイザを見る。

「ごめん、次頑張る！」

ルイザはキリツとして、忠誠を誓うように片手を上げた。

「あいよ」

急にかしこまったルイザを見て、ラマは笑いながら返事をした。

ふとルイザは、マールリアが右手に持っているお花を見た。

「マーヤ、そのお花はどうしたのー？」

「ん。ちょっとね」

マールリアは無表情で、ラマの目をちらりと見た。

ラマもマールリアの目を見る。一瞬二人は目が合ったが、直ぐにそらした。

またルイザは、瞳をぱちぱちさせながら二人を見ていた。

古い屋の扉を開けると、サラボナが部屋を中心に立っていた。彼女はここで、一日店番をしていたようだ。

三人の姿に気づいて、サラボナが笑顔で駆け寄ってくる。

「お帰りなさい、お仕事お疲れ様！」

「ただいまあゝ……」

マールリアは疲れた声を出し、両腕を伸ばして上半身を前に倒した。

サラボナは顔を上下に動かして、三人の体を見た。三人は頭から足まで泥まみれだ。

「全身泥だらけじゃない。会議室の奥にお風呂があるから、使つていいわよ」

「うん！ 遠慮なく使わせてもらおうとー！」

ルイザはスカートを両手で握つて、大胆にバサバサと揺すつた。彼女も地面に寝ていたせいで、全身泥だらけになっている。

「ああ、私はいいわ。もうお城に帰るね」

マールリアはお風呂を遠慮した。その理由は、早く帰つてこのお花を花瓶に入れてあげたかったからだ。

「そう？ じゃあ、お疲れ様。今日は有難うね」

「マーヤ、気をつけて帰つてねー！」

「またな！」

出て行くマールリアに、三人は笑顔で手を振つた。

「またねっ！」

マールリアも笑顔で手を振り返して、店から出て行つた。

*

*

*

マールリアはお花の茎を口にくわえて、木に登つて行つた。太い枝の上に乗るとお花を手を持ち、慎重に歩いて自分の部屋の窓を開けた。

窓を開けた途端、窓辺にオリビアが駆け走つて来た。

「お帰りなさいませ、マールリア様！」

「なんだオリビア、待つてなくて良かったのに……」

窓枠の上部分を片手で持つて、マールリアは右足をかけた。そし

てもう片足を部屋に入れて、頭を低くして部屋の中に入る。

オリビアは不安げな表情で、マールリアの顔を見つめた。

「マールリア様が、このまま戻って来ないのではないかと心配で…」

…」

「大丈夫よ、私は家出なんてしないから」

安心したのかオリビアの表情が和らいだ。

「体が泥だらけだから、お風呂に入ってくるね。あ、オリビア。これ花瓶に入れてくれる？」

マールリアは腕を伸ばしてお花をオリビアに手渡した。

「あら。どうしたのですか、この綺麗なお花。外の彼氏からのプレゼントですか？」

目を大きくして、オリビアはわざとらしく問いかけた。

「べっ、別に彼氏とかじゃないわよっ！ ただの友達から貰ったのっ！」

マールリアは頬をほんのりと桃色に染め、慌てた声で否定する。

その素振りを見て、ふふっとオリビアは嬉しそうに笑った。

「そんなに大きな声を出さなくても」

お風呂から上がったマールリアは、パンパンに張った足を動かしながら歩いた。

一日が終わって安心したせいか、今頃、身体中がひしひしと痛み出す。明日はきっと全身筋肉痛だろう。

（サラボナやラマは、ああやって生活をしているのね……。それに比べて私は……）

マールリアは、働かずにくくぬくと城の中で生活をしている自分が、少し恥ずかしくなっていた。

「あいたたた……」

高い声で呻きながら、マールリアはゆっくりとチェアに腰掛けた。ふとテーブルの上に目をやると、ラマから貰ったお花が小さな花瓶に入れられて置いてある。

マールリアはテーブルの上に腕を組み、その上に顎を乗せて一輪の花をぼーっと見つめた。

花壇からとった物だと思いつつも、貴族から貰った物とは、比べ物にならないほど嬉しかったプレゼントだ。

「何だろうね、この気持ちは……」

まるでお花と喋っているかのように問いかけるマールリア。

今まで感じたことのないような不思議な感情が、マールリアの胸に湧き上がってきていた。

【第四話・完】

不吉な黒い雲が広い空を包んでいる夕暮れ時であった。

辺りは、ねっとり肌にとわり付くような湿気を含んだ空気で、今すぐに雨が降り注いできてもおかしくない気候だ。

このような天気にも関わらず、城下街の中央広場には大勢の人達が集まっていた。今日は反逆者の公開処刑の日なのである。

前回と同様に、高台の上には灰色のローブを着たムーン城の兵士が数十人と、縛られた罪人が一人いた。

処刑は既に進行している最中で、兵士が罪人を連れてゆつくりと歩いて行く。

やがて、罪人は断頭台の丸いくぼみに首を押し込まれて固定された。次に大きな斧を持った執行人が断頭台の横へ立つ。

ひとときの静寂の中、処刑の始まりの合図かのごとく生ぬるい風が一度吹いた。

そしてその風が収まると、隊長が片腕を上げて号令を出した。

「やれっ！」

威圧感のある声と共に、執行人は罪人の首を目掛けて大きく斧を振り上げた。

さあ、果たして今日も現れるのだろうか、と市民達は緊張しながらこの状況をじつと見守る。

と、その時だった。

「その処刑、ちょーと待ったああー!!」

耳に付くような甲高い声が、中央広場にこだました。叫んだ者の正体は四号のルイザである。

やはり市民達の期待通りに、ツイン・マジックは現れたのだった。ルイザの声に驚いた執行人は腕を降ろして、高台の床の上に斧の刃を置いた。

「来た！」

「ツイン・マジックだ！」

「今日も来たぞ！」

待ち構えていた市民達から、次々と嬉しそうな声が湧き上がる。

「クソッ、やっぱり来たかっ！」

すぐに兵士達は高台の端に立って、集まった観客を上から見渡した。だが、こんなに多くの人が密集している状態で、一人の人間を見つけ出すことは不可能だろう。

その声を発したルイザは白いローブを身につけてフードを深く被り、大勢の人にまぎれて高台付近に居た。

再びルイザが勇ましい声を張り上げる。

「ちよつと王女に逆らっただけで処刑だなんて、このツイン・マジックの四号が許さないわよ！！」

その発言に市民達が反応して、ワツと大歓声があがった。

「おっ、四号だど！ メンバーが増えているぞ！」

「頑張れー、四号！」

市民達は腕を上下に動かして、ワイワイと盛り上がっていた。もはや宗教的な盛り上がり方である。

この状況を見かねた隊長が、片腕を振って執行人に急がせた。

「早くやれっ！」

「は、はいっ」

再び執行人が両腕を動かして、斧を空高く振り上げる。

その瞬間、人ごみの中からヒュンと銀色の光線が飛んできて、執行人の両腕に当たった。

「うっ！」

執行人の上げた腕が、石のように硬く止まる。

隊長が歯を食いしばって、止まっている執行人を睨んだ。

「くそっ、またか！」

今度は、男の声が響いた。

「もう少し、お勉強した方がいいんじゃないか？ お決まりのパターンで何度やられているんだ？」

叫んだのは二号のラマだ。

「二号が来たぞっ！」

「頑張れ二号ー！！」

再び市民達から応援の声があがった。

「うぬぬぬー！ ツイン・マジックの奴ら、いつもいつも邪魔ばかりしておってー！」

隊長は悔しそうな唸り声を上げ、中断した処刑を続行しようと執行人から斧を取りあげた。そして、罪人の首に目がけて両腕を高く振り上げる。

「そうはさせないわよっ！」

すぐさま、ルイザは片腕を上げて魔力を集め始めた。そうすると手のひらの前に丸い銀色の光がぼわつと現れる。一般人のルイザが作る光の玉はとても小さくて、手のひらで握れるほどの大きさだ。

「くらえええー！！ 四号アターックッ！！」

大きく腕を振って、ルイザは小さな光の玉を高台へ投げつけた。

飛んでいった小さな光の玉は、斧を振り上げている隊長の顔面に見事命中した。

「ぐっわあっ！」

思わず隊長は両手を離して、大きな斧をドスンと床に落とした。

「たっ、隊長！！」

慌てて他の兵士達が隊長に駆け寄る。

魔法を食らった隊長は、しゃがみ込んで痛そうに両手で顔を覆っていた。

その場面を見てますます図に乗ったルイザは、両拳を高々と上げて人ごみの中で勝利の雄たけびをあげた。

「正義は勝つー！！」

ワアアアアー！！

ルイザに合わせて大歓声をあげる市民達。

丁度その頃、マールリア達は白いローブを羽織って、ルイザから離れた場所に集まっていた。

三人は、独走しているルイザをヒヤヒヤしながらここで見ていたのだ。というのも、ルイザは広場に着いた途端、勝手に一人で前に進んでしまったのである。実に困ったさんだ。

「もう。四号、調子に乗りすぎ……。無茶ばかりして」

不安声を出すマールリアに続き、サラボナも心配しているような口ぶりで言った。

「あの子は結構前に居るみたいね。見つからなきゃいいけど……」
「もう疲れた。後は宜しく……」

何故かラムが、地面にへたり込んでいる。

そういえば初めて会った時も座り込んでいたなと、マールリアは思い出した。きっとあの動きを止める魔法は、優れている分リスクを伴うのだろう。

その様子を見たサラボナが、ラムに人差し指を向けて叱りつける。
「いい加減にそのカッコつける癖をやめなさい！ スローモーションでいいでしょうがっ！」

「ヒーローはカッコいい所を見せなきゃいけないんだよ！」

「何馬鹿なこと言ってるの！ もう少し大人になりなさいっ！」

こんな所で大声を出しながら、しょうもない言い合いをする二人、どことなくケンカになりそうな空気だったので、マールリアは口を挟んだ。

「ね、次どうするのか指示を出してよ。この前みたいに何かを投げて、罪人を助けるの？」

あ、そうだったと二人は冷静さを取り戻した。

そして、ラムがよいしょと立ち上がって拳を突き上げた。

「よっしゃ、ここは三号の^{マヤ}でかい一撃を喰らわせて、派手に新人アピールをしてやろうぜ」

「そうね、少し驚かせてやりましょう」

いつも厳しいサラボナも、すんなりと賛成する。

「^{マヤ}三号、ここから魔法を撃てるか？」

「やってみる！」

マールリアは、二人の口部分しか見えない顔を見て頷いた。

（よしっ！ 初めてのツイン・マジックの仕事、頑張らなきゃっ
！！）

背伸びをして、マールリアは思いっきり右腕を上げた。手に魔力を込めると、手のひらの前に眩い銀色の光が集まって徐々に大きさを増していく。

「うわっ！ 何だ！？」

それを見た周りの市民達が、目をぎょっとさせた。既にマールリアの頭上に大きな光の玉ができている。

魔法に巻き込まれると危険なので、サラボナとラマは両手で市民達の体を押していった。

「皆、危ないからここから少し離れてっ！」

「はいはい、どいてどいてー！」

市民達を少し遠ざけたサラボナとラマは、マールリアが作っている光の玉を見上げた。

すると、いつの間にかマールリアが作った光の玉は、高台を丸ごと吹っ飛ばしてしまいそうなほどの大きさになっている。

「なあ、^{マヤ}三号……。派手には言ったけど、それはちょっとでかすぎないか……？」

口を引きつらせたラマが、大な光の玉に指を差した。

しかしマールリアはラマの言葉を無視して、叫び声と同時に大きな光の玉を投げつけた。

「月の光よっ！！ 当たれー！！」

ビュンツと音を立てながら、光の玉は風のように素早く高台へ飛んで行く。

それを発見した兵士の一人が、青ざめた顔で指を伸ばした。

「お、おい……、あれ」

他の兵士達も、指を差し示す方へ向く。

「う、うわあ……！」

兵士達はパニックに陥り、その場でバタバタと慌て始めた。階段から降りて、みつともなく逃げ始めている者もいる。

しかしそれも間に合わず、大きな光の玉が高台に激突してカッと眩しく光った。

「どわーっ……！」

物凄い衝撃音が中央広場一面に轟き、兵士達は光の玉に押されて罪人もろともその場から吹っ飛んでしまった。

兵士達と罪人は、バラバラと人ごみの中へ無造作に落ちていく。

おう、と市民達はどよめいた。

「さっ、三号……！」

「や、やり過ぎだっ！」

その光景を目にした二人は、慌てふためいた声をあげながら後退していく。

（張り切りすぎちゃった……！）

マールリアは苦笑いをしながら、後頭部を片手で撫でた。

こうして仕事が終わった四人は会議室に戻ってきた。

四人は白いローブを脱いで、テーブルの上にまとめて置く。

「あー、面白かった！ やっと念願の正義のヒーローになれたわっ！」

楽しそうにルイザが、お腹を両手で抱えて笑った。

「ちよっとやり過ぎたけど、快感っー！」

マールリアもルイザと同じく、楽しい気分になっていた。晴れやかな表情をし、両腕を上げてのびのびと背伸びをする。

（これは気持ちいいわっ！ クセになっちゃうかも！）

今頃母親はどんな気持ちでいるのだろうと想像すると、マールリアは心の中で笑いが止まらなかった。

「何度も言うけど、遊びじゃないんだからね！ ふざけていると命を落とすわよ！」

怒りながらいつもの台詞を言うサラボナ。

「ねえねえ、こんなチマチマした活動じゃなくて、何かどーんと大きなことをしようよ！」

フローラインが怒り狂うぐらいにさあ！」

とルイザが両腕を広げて、上下に動かしながら話した。

「そうは言ってもねえ……。情報が掴めなくて、なかなか動けないのよ。人数も人数だし」

そう言つとサラボナは白いローブを抱きかかえて、奥の部屋へ歩いて行った。

「ルイザは、ムーン城の壁にでも落書きしとけばいいさ」

ラムが腕を組んで、ルイザを見ながらけらけらと笑った。

「むむむっ！」

からかわれたルイザは、大きく頬を膨らませる。

その後、四人は椅子に腰掛けてお茶を飲みながら一服をした。
「そういえば私の誕生日の日って、どうやって情報掴んだの？」

マールリアは、ふと思いついたことを口にした。

サラボナが口元からティーカップを離して、テーブルに置いた。

「ああ、あれは裏情報屋で買ったのよ。結構高かったわ……」

「フローラインが外出する日は、兵士の数が一気に減るから忍び込むには絶好のチャンスなんだよな」

「へええ……」

マールリアは納得した声を漏らす。自分の城のことなのに、相変わらず何にも知らないマールリアであった。

ルイザが両手で頬杖をつき、足をブラブラとさせた。

「だったらさー、毎回裏情報屋で買ったらいいんじゃない？」

「毎回そういう訳にはいかないでしょ？ お金が尽きてしまっわ」

「んー、そっか……」

面白くなさそうに、ルイザは口を尖らせる。

「大きな情報ねえ……」

ぼつりと呟き、マールリアは両手でティーカップを持ち上げて、遠くの壁を見つめた。

そう言われてみれば、罪人を助けるだけでは今ひとつ物足りない気分だった。ひよっとするとツイン・マジックのような小さなグループは、母親から相手にされていないのかもしれない。

そう考えると、マールリアは更に大きなことをやってやりたいという感情に掻きたてられてきた。

しかし、問題はどのようにしてその情報を掴むかだ。

そんなことを頭の中で巡らせていると、いつの間にか皆がマールリアの顔を食い入るように見つめていた。

「えっ？」

その異様な状況にマールリアは驚き、首をまわして皆の顔を見た。すると、ころっと三人は嬉しそうな表情に変わり、口々にこう言った。

「ここにいたわね、情報源が」

「目の前にいたのに、すっかり忘れてた」

「何てったって、マールリア姫だもんねー！」

マールリアは瞳をぱちぱちとさせて、自分の鼻に指を差した。

「もっ、もしかして、私にスパイをしると!?」

サラボナとラマが、真面目な顔をしてそれに頷いた。

「ちよつとしたことでいいから、フローラインがしようとしていることを探ってくれる？」

「そうだな。それが分かれば、こちらが先回りして阻止できるかもしれないし」

マールリアは困り切ってしまった。皆から期待の眼差しを送られて、断るにも断れない空気だ。

「で、でも見つかったら私、城から追い出されちゃう……」

「大丈夫よ、マーマー！ もし追い出されたらここに住ませてもらえばいいんだからさあ！」

ルイザが両腕を高く上げて、人事のようにやすやすと言った。

「もー、ルイザは簡単に言うんだからー！」

マールリアは両拳をテーブルの上に置いて、ルイザを恨めしそうに睨んだ。

（あーあ、何だか困ったことになっちゃったな。皆から変に期待されているし。どうしよう……）

マールリアは腕を組んで、うーんと考えにふけた。

お茶を飲み終わるとサラボナが立ち上がって、マールリアの顔を見ながら椅子を奥に押した。

「さて。私、晩御飯の準備をするから、悪いけどマーマーヤ店番してくれる？」

急に頼まれたマールリアは、驚いてサラボナの顔を見上げた。

「えっ？ 私、占いなんて出来ないわよ」

「占いは断っていいから、何でも屋の依頼だけ受け付けて」

歩るきながら指示をするサラボナ。

「何でも受けていいの？」

「出来る範囲でね」

「分かったわ」

首を縦に振って返事をする、マールリアは立ち上がった。

次にサラボナは、ラマに小さな紙切れを手渡した。

「ラマは八百屋とパン屋に行つて、これを買つてきてね。メモしているから」

「ハイハイ」

ラマは受け取った紙切れを見ながら立ち上がり、めんどくさそうな顔をして歩いて行つた。

その様子をマールリアは横目で見ながら、口元に手を添えて笑いをこらえた。

（使い走りをされているラマを見ると、何だかおかしい……！

あんなに偉そうにしているのに、サラボナには逆らえないのね）

「あ、ラマちゃん。私も買い物行くー！」

一人で残されるのが嫌だったのかルイザも腰を上げて、ラマの後ろを小走りで着いていった。

そのまま二人は会議室から出て行つた。

「マーヤ。私は奥のキッチンにいるから、何かあったら来てね」

サラボナはマールリアの顔をちらりと見て、会議室の奥の扉に入つていった。

マールリアも占い部屋へ向かった。

占い部屋に入って、マールリアは水晶玉が置いてある台の前の椅子に座った。

（ここで、何でも屋の仕事を受付けていたなんて知らなかったな）

ラマから聞いた話によると、いつもサラボナが店番をし、占い屋と何でも屋の依頼を受け付けているそうだ。

そして、何でも屋の依頼が入るとラマが全てこなしていたらしい。少し不思議な関係の二人である。

マールリアは紺色のカーテンで取り囲まれている店内を見回した。ぼんやりしながら、サラボナに占いをしてもらったことを思い出す。

（人生が大きく変わる出会いか……。結構当たっているかも。現にこうやって、こんなことをしている訳だし）

ゆっくりと上半身を前へ倒し、澄んだ水晶玉に顔を寄せて見つめた。マールリアの大きな青い瞳が水晶玉へ映る。

それからしばらく時間が経過したが、お客はいっこうに来そうも無い。

マールリアは片手で頬杖を突いてぼーっとしていた。ただ座っているだけなのに、既に疲れて眠くなっていた。

（草取りも大変だけど、ここで一日店番も結構きびしいわね。サラボナってすごいな……）

目を半目にさせ、マールリアは大あくびをした。

「ふわぁ……」

もはや自分が姫だということを忘れきっている。こんなだらしない姿をオリーブに見られたら、ひどくしかられる所だろう。

(……少し居眠りをして大丈夫よね)

と目を閉じた矢先、ガタンツと突然物音がした。

マールリアはビクツと体を動かして、慌てて背筋を伸ばした。扉が開いて、お客が店に入ってきたのだ。

直ぐに扉前に立っているお客の方に顔を向けて、マールリアは歓迎の挨拶をした。

「いらっしやいませー」

見ると、そのお客は奇妙な出で立ちをしていた。

袖や裾がボロボロに破けた紺色のローブを着用していて、フードを目深に被っている。正直、『気味が悪い』の一言であった。

その客はつかつかと歩いてきて、マールリアが居る台の前に座った。身長や体格からして女性だろう。

「外の看板に何でも屋って表示してあったけど、本当に何でもやってくださるの？」

「あつ、えっと、出来ることだったら何でもやります」

マールリアは少しためらったが、急いでスマイルを作って返答した。

ふいに女が片手を上げてフードを掴んだ。バサツと、頭からフードがはずれる。

「えっ！」

マールリアは大きく目を見開いて、つい高い声を漏らしてしまった。

なぜならフードから出てきたその女は、月星人とかけ離れた姿だったからだ。

マールリア達、月星人は全員『銀色の髪』に『青い瞳』だ。

しかし、その女の姿は……。ピンク色の髪、赤い瞳、細長く尖った耳、口からは二本の牙が覗いている。

まさにおとぎ話の世界に登場する『悪魔』そのものだった。

マールリアは、この世界に水星人、金星人、火星人等の様々な人種が存在することを一応知っている。けれども、この悪魔のような人種を目にするのは初めてだった。

（うわあ……。こんな人種もいるのね。悪魔みたいで少し怖そう……）

マールリアは口をポカンと開けて、女の顔をまじまじと見続けた。改めて良く見ると、女はマールリアと同じぐらいの少女だ。

淡いピンク色の髪は肩ぐらいの長さで、無造作にザクザクとカットしてある。

大きな赤い瞳の上には、薄紫色のアイシャドウを塗っており、それがまた艶やかで一層小悪魔のように感じられた。

呆けているマールリアを見て、女は腕と足を組み、クスツと小さく笑った。

「まるで珍しい物でも見るような目ね。見ての通り、私は裏月星人うらつきせいじんよ」

「裏月星人！」

それを聞いてマールリアはぴんと思い出した。遠い昔じいから習ったことがある。

裏月星人達は、月星人とどこかの星人のハーフらしい。

容姿は悪魔のようで、独特な民族衣装。性格は血の気の多い者が多く、短気で凶暴。そのせいで、星人達から『月の悪魔』と呼ばれている、と。

マールリアはこの裏月星人の依頼を受けていいのか自分一人では判断がつかず、サラボナの元へ行こうと思った。

「少々お待ちください！」

女を残して、マールリアは会議室に入ってしまった。

素早く広い会議室を走り抜けて、奥の扉に入る。

会議室から出た先には長い廊下があり、扉が二つと階段があった。とりあえずマールリアは、手前の扉に手をかけた。そこにはキツ

チンがあつて、サラボナが立っていた。

「わっ、びっくりした！ どうしたのマーヤ？」

急に扉を開けたマールリアに驚いて、サラボナは目を丸くした。

「サラボナ、裏月星人のお客さんが来ているんだけど……」

「えっ！」

サラボナは、更に目を大きくさせた。

サラボナとマールリアは、占い部屋に入つて来た。

「お待たせ致しました、店主のサラボナです。今日は、どのような御依頼で？」

裏月星人の女はムスツとした顔をし、腕と足を組んで待っていた。苛ただしげに足を貧乏ゆすりさせている。

「遅かったわね。早く話を聞いてくれる？」

「ええ、お聞きしましょう」

サラボナは台の前の椅子に腰掛けた。

そんなに時間は経っていないはずだけど……と思いつつも、マールリアは黙つて扉の前に立った。これが裏月星人特有の、気の短さなのだろう。

「依頼内容は――」

女が次の言葉を発そうとした時、大きく店の扉が開いた。

「ただいまー！」

ルイザの元気な声が聞こえる。ラマとルイザが、手荷物を沢山持つて帰つてきた。

「あーっ、お客さん来てる！」

「本当だ」

二人のせいで、店の中が一気に騒がしくなる。

「コラッ、営業中は裏口から入りなさいよっ！」

サラボナが二人の姿を見て一喝した。

しかし、二人はサラボナの言葉を無視して、平然と店の中を歩んでいた。

「あれっ？」

と言い、ラムが上半身を前に倒して女の顔を覗き込んだ。

「裏月星人だ！」

「あー、本当だー！ 城下街に来るなんて珍しいね」

すっとんきょうな声をあげて、ルイザも女の顔を見つめる。

突如現れた二人からじろじろと顔を眺められて、裏月星人の女は口をひん曲げて牙をむき出しにした。

「何なのよ……、この店は！」

どうやら、ご立腹の様子だ。

どうにか落ち着いた空気になって、サラボナと裏月星人の女は椅子に、他三人は壁沿いに立った。

ようやく女が、依頼内容を話し始める。

「ある所に私の知り合いが捕まっているの。もう十年以上もね。それを解放してくれたら、報酬で一千万スターを差し上げるわ」

「嘘っ！！ 一千万スター！？」

唐突にサラボナが台に両手を突いて、勢い良く立ち上がった。いつも落ち着いている彼女が、珍しく我を忘れて興奮している。

マールリアはそのサラボナの興奮具合を不思議に思い、隣にいるラムに尋ねた。

「ね、ラム。その金額ってそんなにすごいのか？」

「一千万スターあったら数年遊んで暮らせるぜ」

「……ふん」

聞いてもいまひとつ良く分からなかったので、マールリアは気の無い返事をした。

（数年ってどれぐらいなんだろう……）

箱入りお姫様のマールリアには、お金の価値があまり分からないのだ。

いつもの表情を取り戻し、サラボナはすっと座って女と話を続

けた。

「で、その知り合いのお方は、どこに捕まっているんです？」

「ムーン城の牢獄よ。フローラインが居るお城ね」

女がそう告げた瞬間、女以外の三人が一斉に首を動かしてマールリアの顔を見つめた。

「えっ……！」

皆の強い視線が、マールリアに突き刺さる。

マールリアは皆の言いたいことが大体わかって、頬を引きつらせた。

「ちよっ……と、私にそんな危険なことをやらせるつもり……？」

そう言った途端、サラボナがスツと立ち上がって歩み寄ってきた。そして、マールリアの肩をがっしりと両手で掴んで、興奮気味の顔を近づけてくる。

「マーマ、一千万スターよ！ 一千万スター！ これはやるっきゃないでしょっ……！」

見ると彼女の目が星型、『スター』になっていた。

「うっ……。わ、分かったわよ。何とかやってみせるわ……！」

その目を見るとどうあがいても無駄のような気がして、マールリアは渋々と返事をした。

（あゝ、スパイだって無理な話なのに、どうしてこんな展開になるの。見つかったら私……）

「これまでに、ムーン城の名前を出すと断られてきたんだけど、あなた達はどんなの？」

この依頼、引き受けてくださるの？」

女が腕を組み、大きな赤い瞳で壁際にいる四人を見つめた。

「出来るかどうかは分からないけど、挑戦してみるわ。うちには、ムーン城に詳しい娘がいるからね！」

強気な顔つきで、サラボナは依頼を承諾した。

「それは頼もしいわね。それじゃあ、私も連れて行ってもらうわよ」

「ええ、それは構わないわ」

「私はグラス・アルメート。よろしくね、何でも屋さん」
尖った牙を見せながら、グラスは妖艶に微笑んだ。

グラスが立ち去った後、四人は会議室に戻って椅子に腰掛けた。
いつもの顔ぶれになって、安心したマールリアは思っていたことをぼつりとこぼす。

「裏月星人って初めて見たわ。本当に悪魔みたいな姿をしているのね」

「あつと、マーヤ。裏月星人の前で『月の悪魔』は禁句よ。彼らはそれを言われるのを嫌っているの」

厳しい面持ちでサラボナが忠告する。

ルイザがそれに付け加えて言った。

「『月の悪魔』って裏月星人の差別用語なのよねー」

「へえ……」

「大体さあ。言われるのが嫌だったら、あんな格好しなきゃいいのになあ」

ラマは片手で頬杖をついて、身体を斜めにさせた。

彼が言うことは、もつともである。今日来たグラスの服装は民族衣装とはいえ、悪魔と呼ばれても仕方が無いような格好をしていた。

無知なマールリアの為に、サラボナが裏月星人のことを詳しく教えてくれた。

裏月星人達の住んでいる土地は、一応ムーン王国に属しているらしい。

彼らは辺境にひっそりと住んでいて、滅多とこの辺りには足を踏み入れないそうだ。そして人口も月星人より随分少ないらしい。

「——それから裏月星人達は、昔から月星人を忌み嫌っているの。だから、あんまり関わらない方がいいんだけどね……」

「そうなんだ。同じ月星人なのに変なの」

顎の下に拳を置き、すっきりしない表情を浮かべるマールリア。

「さて、裏月星人の話はここまでにして、当日どう行動取るか作戦を練るわよ」

みんなの顔を見回して、サラボナが仕切り始めた。

「了解」

サラボナとマールリアを中心に、話し合いがスタートした。

それから数日後。フローライン王女が外出している日の夜に、作戦を実行することにした。王女が大勢の兵士達を連れて行くからだ。既に皆が寝静まっている時間帯だ。この日は満月でとても空が明るく、お互いの表情がうつすらと見える。

五人は高い城壁を越えて、城の庭部分に集まった。

そこには、いつもマールリアが登っている大きな木がある。

マールリアは眉間を寄せて、自分の部屋の窓を見上げた。皆と来ているがゆえに、このお城が別の建物のように見えて、おかしい心地がする。

（自分の城へコソコソと忍び込むなんて、何だか変な気分……）

「こんな簡単にムーン城へ進入できるなんて……！」

驚いている様子でグラスが城を見上げた。

「この兵士達マヌケなんだよ。公開処刑だってワンパターンだし。こんなんだったら容易くフローラインに会えちゃうかもな！」

ラムが肩をすくめながら、浅はかなことを言う。

「そんなに上手くは行かないわよ」

横からマールリアは口出しをした。城内は高魔力の兵士達が見張っていることを、マールリアは知っている。

作戦で決めていた通り、マールリア、サラボナ、グラスは城の中へ。ラム、ルイザは外で待機をすることになった。

サラボナとグラスは、黒色のワンピースに上から白いエプロンをつけたムーン城のメイド姿になっていた。このメイド服は予め、マールリアが準備をしていたのだ。

グラスの方は尖った耳が見えないように、フリルが付いたヘアーバンドをして隠している。二人とも良く似合っていて、可愛い

姿だ。

マールリアは、サラボナの顔を見て尋ねた。

「眠り薬の入ったワインは持ってきている？」

「ええ、もちろん」

サラボナは頷いて、右手に持っている網カゴを上げた。上にはハンカチがかけられていて、中身が見えない。

ルイザが顎を上げて、大きな木を見上げた。

「マールヤはいつもここから来ているのね。こんな所毎日登り下りするなんて大変ね」

「すっげーおてんば娘だよな！」

悪戯っぽく笑っているラマを、マールリアは横目で睨んだ。

「ほつといてよ。それより今から木に登るから、ラマは離れてよね！」

「ハイハイ」

ラマは不満げな目付きをして、大きな木から離れていった。

（暗いから見えないとは思うけど、また覗かれたら、たまらないわ……！）

マールリアは両手を腰に当てて、ラマがきちんと離れるのを見張っていた。

「さて、頑張りましょう」

サラボナが全員の顔を見回す。

いよいよ行動開始だ。マールリアと、サラボナと、グラスは両手足を使って木に登って行った。それから太い木の枝の上に乗る、バランスを取りながら窓まで歩いて行く。

居残り組みのラマとルイザが、腕を振りながら抑え気味の声を出した。

「絶対に気づかれるなよ」

「気をつけてねー」

マールリアは、二人の方を見た。

「うん、気をつける」

「行ってくるね」

サラボナが、二人に向かって手を振った。

三人は窓枠をまたがって、マールリアの部屋に入った。明かりはつけたままだ。

きよろきよろと首を回して、サラボナが広々とした部屋の中を見渡す。

「やっぱり広いわね。ここがマーヤの部屋なんだ」

「うん、着替えるからちよっと待ってね」

マールリアはタンスを開けて、普段着ている姫の服を取り出した。その行動を見て、グラスが首をひねる。

「……着替える？」

黒い服と紺色の帽子を被って、いつもの姫の姿に着替えたマールリアは、二人の顔を見てニツコリとした。

「お待たせ。さあ、行きましょう！」

マールリアの姿を見て、グラスは眉を寄せながら目を細めた。

「その格好は何よ」

その答えが出る前に、サラボナが両手でグラスの背中をポンと押した。

「今は説明している暇ないから、行くわよ！ マーヤ、早く牢獄へ案内して」

「うん」

マールリアとサラボナは、部屋から出て行った。

グラスは納得いかない様な表情をして、二人の後を着いていった。

マールリアが先頭を進み、メイドに変装した二人がその後を続く。
(何事も無く、無事に終わりますように……)

マールリアは祈るような気持ちで、城の通路を進んで行った。

しばらく長い通路を歩いていると、遠くに灰色のロープを着た魔法兵士がうつついていた。

それを目にして、たちまちマールリアの身体に緊張が走る。ここは何としても、マールリアが上手く芝居をしなければならぬ。

兵士が、歩いてくるマールリアの姿に気づいて会釈をしてきた。

「あつ、マールリア様。こんな時間にどう致しました？」

足を止め、マールリアは兵士に向かって優しく微笑んだ。

「見回りご苦労様です。実はなかなか寝付けなくて城内をお散歩しております。」

一人で歩くのも寂しかったので、無理を言ってメイド達に着いて来てもらったのです」

かなり苦しい内容だったが、兵士はマールリアの言うことを信じてくれたようで微笑み返してきた。

「おお、そうでしたか。今夜は月が綺麗ですからね。ごゆっくり楽しんでください」

そう言うと、兵士は通路の角を曲がって行った。

「ふ」

気が緩んだマールリアは、胸に手を添えて大きな息を吐いた。

（うちの兵士なのに緊張したわ。心臓に悪い……）

後ろにいるサラボナが、マールリアの背中に顔を近づけた。

「メイドがこんな時間に、こんな所を歩いてたら怪しまれるからね。マーヤがいてくれて助かったわ……」

その時グラスは黙って、マールリアの顔をじっと見据えていた。

再度、三人は足を動かして、地下にある牢獄に向かった。

そしてその後も、マールリア達は数人の兵士と出くわしたが、どれも上手く誤魔化して何とか切り抜けたのである。

やがて、前方に凸凹のレンガで出来た地下への階段が見えた。ここから先はマールリアに縁の無い場所で、初めて入ることになる。

マールリアは、立ち止まってサラボナ達の方を振り向いた。

「この先に牢獄があるの」

二人はマールリアの目を見て、首を振った。

「行きましょう！」

三人は音を立てないように、階段を降りて行った。

地下は薄暗く、ひんやりと冷たい空気が広がっていた。壁の所々にランプがついていて、何も無い通路がずつと先に続いている。

三人はゴツゴツとしている床を、足を引っ掛けないようにしっかりと踏みしめていった。

しばらく歩いていると、突き当たりに木で出来た扉が見えた。目的の場所に着いた三人は、扉の前で足を止める。

マールリアは右手のひらを差し出して、扉の方に向けた。

「ここは作戦通り、サラボナに任せたわ」

「うん、行って来るわ!」

臆する様子もなく、サラボナは扉を開けて中へ入って行った。きつと彼女は、こういうのに慣れっこなんだろう。

中へ入ると入り口付近に、見張りの兵士が背中を向けて椅子に腰掛けていた。

扉を開けても気づかなかった所を見ると、眠っているのかもしれない。

サラボナは静かに歩いて、そーっと兵士の背中に近づいた。

「あのっ……」

「わっ!」

ふいに声をかけられた兵士は飛び上がるように驚いて、勢い良く振り返った。

その兵士はサラボナ達と同じ年ぐらいの若者で、兵とは思えないぐらい優しい顔つきをしていた。

サラボナは軽く会釈をし、若い兵士の顔を見てニツコリと微笑んだ。

「お仕事、お疲れ様です」

「ああ、驚いた……。メイドさんがこんな所にどうしたのです?」

「実は……。城の中で、貴方様の姿をいつも見ておりました……。今日は思い切って声をおかけしようと、人目を忍んで会いに参りました」

サラボナは裏声を出し、若い兵士の目をじっと見た。

「えっ、僕のことを?!」

サラボナから上目遣いで見つめられた若い兵士は、嬉しそうに表情を和らげた。恋人が居ないのか顔を赤く染めて、後頭部を撫でながら喜んでいる。

「もし宜しければ、楽しくお喋りでもしながらワインを飲みませんか？」

こっそり持ってきたんです」

そう言ってサラボナは、網カゴから小さなワインボトルとグラスを二個取り出した。

「……折角ですが今は勤務中の身なので、また改めて別の日にしませんか？」

「いいえ、私はここで全然構いませんよ」

有無を言わずに、サラボナはグラスに赤ワインを注いで若い兵士へ手渡した。

「どうぞ」

「え、あっ、有難うございます」

強引なサラボナに若い兵士は少し戸惑ったが、ワイングラスを持つて一口飲んだ。

サラボナは顔を傾け、胸の辺りで両手を合わせてニコニコと微笑んだ。

「もつと飲んでください」

「ええ……」

若い兵士は顎を上げて、くいつとグラスに入っているワインを全部飲み干した。

突然、若い兵士は半目になって、前へ崩れるように倒れてしまっ

た。

「……ごめんね」

一言謝り、サラボナは困った笑顔を浮かべて、眠った兵士を上から見下ろした。

「もう入っても大丈夫よ」

外の二人にそう伝えて、サラボナが扉を開けた。
マールリアとグラスが、牢屋部屋に入ってくる。

「さすがサラボナ！ 演技が上手なのね！」

床に倒れている兵士を目にして、マールリアは素直な感想を言った。

けれどもサラボナは特に表情を変えず、寝ている兵士に指を差した。

「それより鍵の束を持ってきて」

「あつ、はい」

マールリアはしゃがんで、兵士が腰に下げている鍵束を取った。

辺りはじつとりとした空気が漂っていて、嫌な臭いが鼻についた。
マールリアの知らないカビの臭いである。

三人は早足で薄暗い通路を進んでいった。

牢獄なだけあって、長い長い通路にずっと鉄格子が向かい合わせにあるだけだ。

（こんなに罪人っているんだ……。本当は全員解放させてあげたいんだけど……。ごめんね……）

マールリアは悲しい表情をし、牢屋の中にいる罪人達から顔を背けて進んでいった。

まだまだ大勢の人間が犠牲になっていると思うと、非常にやるせない気分だ。

グラスが鉄格子に飛びついて、あれでもない、これでもない、ひとつひとつ牢屋の中を確認していく。

あつ、と急に大きめの声をあげて、グラスの動きが止まった。どうやら発見したらしい。

その鉄格子の奥には、薄汚れた白い服を着ている女が両膝を立てて座っていた。

「誰……？」

中の女は今にも消えそうな小さな声を出して、少し顔を上げた。グラスが、両手で鉄格子に掴まってガチャガチャと揺すった。

「私よ！ グラス！ グラス！ アルメート！ 子供の頃一緒に遊んだじゃない！」

「グ……ラス」

グラス達が話している間に、マールリアは鍵束を使って牢屋を開けた。

牢屋の扉がキィと細い音を鳴らして開く。

その途端、グラスが急いで駆け寄って女の前にかがみ込んだ。マールリア達も後に続く。

座っている女を見ると、死人のように顔色が悪かった。そして弱々しい赤い瞳をしている。やはりグラスと同じ裏月星人だ。

マールリアは女を強く見つめた。

（この人が十年以上も……）

そう思うと胸に何か詰まったような、重苦しい気持ちになる。

グラスは、女の肩を両手で掴んで揺すった。

「助けにきたのよ！」

「助……けに……？」

女の生気のない瞳が、一瞬大きく見開かれる。

二人の横にサラボナがしゃがんで、自分の膝の上に腕を組んだ。「積もる話もあるかもしれないけど、脱出が先よ」

「これに着替えて逃げるわよ！ グラス、着せてあげて」

マールリアは、持って来ていたメイドの服をグラスに手渡した。「ええ」

メイド服を着せた女は、グラスが背負って行くことになった。

あとは来た道に戻るだけだ。マールリア達は牢獄から出て、長い地下通路を進んで行き、階段を駆け上がっていった。運が良いことに、来る途中で会った兵士達の姿が見えない。

マールリア達は部屋に向かって順調に進んでいった。

この調子だと簡単に戻れるんじゃないかと思いきや、やっぱりそんなに甘くはなかった。長い通路の先に、始め出会った見張りの兵士がまだウロウロとしている。

それを目にした三人は立ち止まり、角に隠れて顔を見合わせた。ひそひそ声でサラボナが訊く。

「マーヤ、ここを通らないと部屋に戻れないの……？」

「うん……」

「困ったわね……」

サラボナが眉間のしわを深く寄せる。

急にメイドが一人増えていたら、さすがに怪しまれるだろう。これでは戻るに戻れない。

視線を横に向けてマールリアが悩んでいると、サラボナがこんなことを言い出した。

「私はここに残るから、マーヤ達は先に行って」

「えっ！ な、何を言ってるのよ。そんなこと出来るはずないでしょっ」

慌てて首を横に振りながら、拒否するマールリア。

しかし、サラボナはマールリアの肩に片手を置いて、真顔で説得する。

「こうするしか方法がないのよ。後から迎えに来てくれればいいから、ね？」

正面から力強い眼差しで見つめられ、マールリアは直感した。彼女は一度言い出したら、断固として引き下がらないだろうと。

「……わ、分かったわ。後で絶対戻るからここで待っててね」

「うん、気をつけてね」

二人は真剣な面持ちで目を合わせる。

マールリアは、グラスの顔を見た。

「行くわよ、グラス」

グラスはマールリアを見て、首を縦に振った。

マールリアはサラボナの無事を祈りながら歩んでいた。そのま
ましれつと通路を通り抜けようとしたら、兵士が負ぶっている女に
気づいたらしく、声をかけてきた。

「あ、マールリア様。そのメイドどう致しました？」

「途中で貧血になりまして……。今から部屋へ戻すのです」

「そうですか、お大事に……」

兵士は会釈をして、心配そうな顔つきでマールリア達を見送った。

そうして三人は、無事マールリアの部屋まで辿り着いたのである。
マールリアは窓を開いて顔を外に出し、口元に手を立てて抑えた
声で二人を呼んだ。

「ラマー、ルイザーいる？」

直ぐにルイザとラマが走ってきて、高く上げた両手をひらひらと
振った。

「ここにいますよー！」

「今から女の子を窓辺に出すから、ラマ魔法をかけて！」

「了解ー！」

予め決めていた通りに行動する二人。

女を背負ったまま木を降りるのは難しいので、魔法をかけて落と
すといった戦法だ。ラマ曰く、スローモーションを全身にかけると
落下する物も遅くなるとのことだ。

マールリアは乗り出していた顔を戻して、後ろに立っているグラ
スの顔を見た。

「グラス、その子を窓辺に寄せて」

「何か作戦があるの？」

そう問いながら、グラスは窓辺まで歩いてきた。
マールリアはグラスに簡単な説明をして協力してもらった。

グラスが後ろを向き、窓から女が見える状態にした。

「ラマー、よろしくー」

上からマールリアの声が聞こえた。

ラマは両腕を上げて、両手のひらを女に向けた。そして、両手のひらから太い銀色の光線を放った。

「スローモーション！」

ヒュンと伸びた光線が女の身体に当たり、銀色の光が全身を包んだ。

それを確認したマールリアとグラスは、女を下へ落とした。

すると、まるで軽い物が落ちているかの様に、女がゆっくりと地面に向かっていく。何とも不思議な光景だ。

ラマは、女が落ちてくる位置に腕を合わせて、がっしりとお姫様だっこをした。

「よし、終わった！」

「へー、その魔法そんな使い方も出来るのね。いいなあー」
ルイザから羨ましがられて、ラマは得意気に笑った。

「へへっ、便利だろ！」

再びマールリアが窓から顔を覗かせた。

「大丈夫ー？」

顔を上げて、ラマは女の無事を知らせる。

「大丈夫だ。用事も済んだし早く撤退するぞ！」

「サラボナがまだなの。もうちょっと待ってて！」

その発言を聞き、ラマとルイザは驚いて顔をこわばらせた。

「えっ！」

「う、うそっ……。サラボナは大丈夫なの……？」

みるみるうちに、ルイザが泣きそうな顔になる。

「今からすぐに向かうわっ！」

そう伝えたと、マールリアは窓から顔を引っ込めた。

マールリアは窓の外に指を差し、グラスの方を見て促した。

「さ、グラスも早く降りて」

「その前に一つ聞きたいことがあるわ。……あなたは一体何者なのよ？」

グラスはマールリアを刺すような視線で睨み付けた。

やっぱりこの質問が来たかと、マールリアは心の中で思った。だけど、ゆっくり説明している場合ではない。

「サラボナが待っているから、お喋りをしている暇はないわ！ さあ、早く」

グラスはまだ何か言いたげな顔つきをしていたが、黙って窓枠に足をかけた。

一方その頃。サラボナは壁の影に隠れて、見張りの兵士の様子を見ていた。

彼女の性格上、マールリアの迎えをただじっと待っているだけではいられなかった。何とか兵士の間を見て、ここを通り抜けてやろうと企んでいたのだ。

と、兵士が背中を見せて前を歩いていく。

これはチャンスとばかりにサラボナは少し距離を置いて、兵士の後ろを足音を立てずに着いて行った。振り向かれたら終わりだが、そうなったら得意の演技で取り繕ってやろうと、サラボナは身構えていた。

長い通路の突き当りには左右に分かれ道があり、兵士が右を曲がった瞬間、サラボナは左側に曲がって進んでいた。

どうにか兵士を切り抜けたのはいいが、サラボナには城の中が全然分からなかった。

広い場所に出たり、長い通路に出たり、扉が沢山並ぶ所に出たりと、まるで巨大な迷路に迷い込んだかのような心境だった。

「はあ……、はあ……」

ずっと走り続けて息が上がリ、足がよろよろになっている。

（はあ……、完全に迷子。こんなだったら、マーヤに城のマップを描いてもらうべきだったわ）

サラボナは止まり、ハンカチで額ににじみ出た汗を拭った。

その時だった。静まり返っている通路に、コツツ、コツツ……と固い足音が鳴り響いた。

サラボナは心臓が跳ね上がった。誰かが来る——！

「メイドか。こんな時間に何をしている？」

落ち着きのある低い声が耳に入った。

通路の所々にある四角い窓から月明かりが照らされ、近づいてくる人が目に映る。

サラボナは、その男の姿を見て目を大きく見開いた。吊上がった目、水色の髪、冷やかな形相。サラボナの知っている水星人。

一瞬動揺したが、すぐに平静を装った。サラボナは俯いて首に手を添える。

「……少し気分が悪くて、外の空気を吸いに来ました」

「そうか。治ったら早く部屋へ戻れ」

「は、はい……」

目を泳がせながら、サラボナは胸に手を当てた。緊張して心臓が激しく鼓動を打ちつづけている。

男はサラボナの横を通り過ぎて、そのまま前へ進んで行った。が、突然サラボナの方を振り返った。

「——お前、サラボナ……か？」

ばれてしまった。サラボナは微かに頬を引きつらせて、一歩後ろに下がる。

「無意味な活動、まだ続けているみたいだな……」

男はサラボナの瞳を真っ直ぐに捉えて、コツコツと歩いて来た。

「あなたも相変わらずのようね……」

先程までしおらしくしていた態度とは打って変わって、サラボナは片手を腰に当ててニヤツとした。口元は笑っていたが、憎しみの籠った目をしている。

「仲間を売り渡し、大臣にまで成り上がってどんな気分なのかしら？ さぞかし気持ちいいんでしょうね」

皮肉たっぷりの言葉を口にするサラボナを見て、男は薄っすらと笑った。

「フツ、相変わらず気の強い女だ。まあ、そこが気に入ったんだがな……」

「冗談はやめてよね」

つんと顔を横に向けて、サラボナが冷たく言い放ったその直後だった。

いきなり男がサラボナの腕を掴んで、少し前へ引つ張り寄せた。「冗談なんかじゃない。こんなくだらない事いい加減にやめて、一緒にこの城で暮らさないか？」

俺がフローライン様に頼めば、すぐに城へ入れてもらえるさ」

それを聞いたサラボナは怒りが頂点に達し、大きく腕を振って男の手を振り払った。

「ふざけないでよっ、シエルッ！ 私はあなたが裏切ったことを、今でも許してないんだからっ！！」

大声で怒鳴り散らし、サラボナは振り向いて走り出した。

シエルは腕を組み、ニヤリと口の端を上げて、小さくなっていくサラボナの背中をじっと見つめた。

サラボナは俯いて、城の中を無我夢中に駆け走って行った。思い出したくない過去の記憶が蘇ってきて涙が出そうになったが、齒を食いしばって懸命に我慢する。

突然、ドンツと鈍い音が鳴った。

「わっ！」「キャッ！」

暗闇の中誰かとぶつかってしまい、二人は同時に短い叫び声をあげた。

ぶつかった反動で、二人とも床に尻餅をつく。

「いたあ……」

前を見ると、中腰で痛そうにお尻を撫でているマールリアが居た。彼女の姿を見て、サラボナは思わず頬が緩んだ。すぐさまお尻を上げて、四つん這いでマールリアに顔を近づける。

「マールヤッ！」

「サラボナッ！」

二人は安心して笑い、座ったまま両腕を背中に回して抱きつき合った。

「良かったー！」

*

*

*

やつのことで全員城の庭に揃った。既にマールリアはラフな服に着替えている。

ルイザがサラボナの姿を見て、両腕を伸ばして抱きついた。

「わあああん！ サラボナー！」

案の定ルイザは泣いていたらしく、頬が涙でテカテカに光っている。

抱きつかれたサラボナは、ルイザの頭を見て困った目をしていた。

「ルイザ、大声出したら見つかるわよ」

「本当に無事で良かった……」

ラマもサラボナの姿を見て、安堵の表情を浮かべていた。

これで目的達成といたい所だったが、最後の問題が残っていた。女付きでこの城壁をどのようにして登るのか、という肝心な部分を作戦で決め忘れている。

高い城壁を見上げてマールリアは腕を伸ばした。

「ねえここ、どうやって登る？ 助けた女の子はまだ歩けないわよ」すると全員申し合わせた様に首を動かして、一斉にラマの顔を見た。

皆から視線を投げられたラマは、両手のひらを差し出して顔を左右に振った。

「わーかったよ！ 俺の仕事だろ？ 背負って行ってやるよ」

「だけど、この子が手を離したら危ないわ。何か縛る物は無いかしらね」

とサラボナ。

「あつ、ちょっと待ってて。私の部屋から何か持ってくるわ」

マールリアは一旦自分の部屋へ戻った。

その間に、ルイザとサラボナが雑談をする。

「ねー、サラボナ。ホウキで来れば良かったねー」

「ホウキは高いからダメよ!」

「えー! サラボナって、どケチ!」

ルイザが両手を腰にあてて、むすくれる。

暫く時間が経ち、マールリアはベッドのシーツを剥ぎ取って持ってきた。

「これで腰を固定させるといいわ」

マールリアは両手で持った薄いシーツを、ラマに見せた。

「サンキュ!」

ラマはグラスから女を預かり、背中に背負って声をかけた。

「いいか。落ちたくなかったら、絶対に手を離すなよ」

「……」

女は黙ってラマの首に両腕を回した。

そうしてサラボナが、二人の腰にシーツを巻いて固定させた。

「じゃあ頑張ってね、ラマ!」

「がんばーれラマちゃん!」

マールリアとルイザは、微笑みながらラマを応援する。

ラマは立ち上がり、げんなりとした顔をして返事をした。

「ハイハイ……」

「それじゃあ皆行きましょう!」

マールリアは城壁に手をかけて、皆の顔を見回した。

全員、手足をかけて城壁を登っていき、天辺まで来ると今度は降りていった。

そうして、高い壁を越えて全員地面に足をつけた。ついに任務完了である。

「ラマ、お疲れ様」

マールリアは、女を固定させていたシーツをほどいた。

「はあ……、重かった……」

ラマは疲れた表情を浮かべて、女をお姫様抱っこした。

「悪かったわね」

グラスは後ろを向いて前かがみになり、女を背中に負ぶった。全てが終わり、サラボナが腕を組んで例の物の話を切り出す。

「グラス、無事解放できたわよ。約束の報酬は？」

「今は手元に無いから、後日店へ持って来るわ。それじゃあ私はこれで……」

そう告げると、グラスは背中を見せてゆつくりと歩き出した。

（本当に持って来るかなあ……？）

マールリアは闇の中へ消えていくグラスの背中を、疑いの眼差しで見ている。

全員は基地へ向かって歩いて行く。

マールリアは精神的に疲れて、ダラダラと足を動かしていた。

「はあー、皆が無事で良かった……。何とか上手くいったけど、もう二度とこんな仕事したくないわ」

「私、今日何にもしてない！ お仕事したかったなー！」

文句をこぼしながら、ルイザは大きく腕を振って歩いた。今日だけではなく、前回も何もして無いはずだが。

その時、ふとマールリアの頭の中にひとつの疑問が浮かび上がった。

（そういえば何故あの女の子は、処刑されずに長い間監禁されていたのかなあ……？）

大きな謎が残り、マールリアは何となく心が晴れなかった。

マールリアとルイザの後ろに、ラマとサラボナが横に並んで歩いていた。

おかしいことに、サラボナがずっと俯いている。

「どうしたサラボナ、さっきから暗い顔をして。……城の中で何か

あつたのか？」

ラマは前の二人に聞こえないように小声で尋ねた。

「中でシエルと会ったの……」

下を向いたまま、サラボナが力ない声をぼつりと出した。

「そっか……」

ラマは天を仰いで大きな満月を見つめた。そしてサラボナの肩を、ポンポンと軽く叩いた。

*

*

*

その頃、女を背負ったグラスは人通りの無い路地を歩いていた。

「——ねえ、起きている？」

「……ん」

後ろから、か細い声で返事をする女。

「やっと城に戻るのよ。何年ぶりかしら……。きっと、キャンドル様もお喜びになるわ！」

「キャンドル姉さん……」

「そう、あなたのお姉さんが待っているわよ」

しばし沈黙が続いた後、女はおもむろに口を開いた。

「……ねえ、グラス。父さんや母さん、姉さん、弟は元気にしているの……？」

辛い質問が来てグラスは唇を歪めた。しかし、このまま黙っているわけにもいかず、女に真実を告げた。

「……心を落ち着かせて聞いてよね。」

実は、王様と王女様と王子は、あなたが監禁されている間に……、フローラインが率いる軍に攻められて……」

「……えっ！」

ひどくショックを受けている女の声が耳に入って、グラスは胸が痛んだが、なお続けた。

「生き残ったのは、あなたのお姉さん、たった一人だけなの……」

「う、嘘でしょ……」

女が震える声を出した。

この日、マールリア達から助け出された女の正体は、裏月星人の姫だった。彼女は十年以上もムーン城の牢獄に監禁され、その間に家族が惨殺されている。

この後、裏月姫の激しい怒りと憎悪がマールリアにぶつかることになるのであった。

【第五話・完】

ムーン城に忍び込んだあの日から、平穩無事に数日が過ぎていった。

そんなある昼下がりのこと。サラボナ、ラマ、マールリアの三人はいつものように会議室の椅子に座り、お茶を楽しみながら過ごしていた。ルイザだけがまだ顔を出していない。

まったりとした一時を堪能している最中、急にサラボナが両手でテーブルを叩いて大きな音を立てた。

「一体どうなっているの？ あれから何日経ったと思っているのよ！」

彼女は、誰に向かって言っているのか分からないことを言い放つ。そしてその後、またバンバンと激しくテーブルを叩きつけた。

「サラボナ……、うるさい……」

隣に腰掛けているラマが、サラボナを横目で睨みながら低い声を出す。

そのラマの声に反応して、サラボナはぴたりと停止したかのように思われた。が、今度は両手で頭を押さえ、狂ったように首を回して金切り声をあげ始めた。

「ああああー！！ 一千万スターはどうなったのよおおー！！」

このサラボナが大いに荒れている理由は……。言うまでもないが、数日経ってもグラスが姿を現さなかったからだ。

結局の所、マールリアが思っていた通りの流れになってしまったのである。

髪を振り乱しているサラボナから目線を外して、マールリアはティーカップに入ったお茶を口に含んだ。

「……何となく、こうなる予感はしていたんだけどね。」

事前に、住んでいる場所でも聞いておけば良かったわね」

マールリアは少し後悔した。

もっとも、最初から騙すつもりだったとすれば、本当の場所を教えるはずもないだろうが。

「あの裏月星人の態度もそんなに悪くなかったし、すっかり信用してしまっただな」

ラマは特に怒っている様子もなく、のん気にお茶を飲んでいる。だがサラボナの方はまだ諦めがつかないらしく、両拳でドンドンツとテーブルを叩き続けていた。

「騙したわね、あの女！ こっちは命懸けで行ったっていうのに！」

そんな激怒している彼女を見て、マールリアは把握した。お金のことになるサラボナは人が変わる、と。

思い起こせば依頼が入ったあの時も、彼女はお金に対して過剰な反応を示していた。

マールリアは向かい側に座っているラマの顔を見て、問いかけた。「ね、ラマ。どうしてサラボナは、あんなにお金に執着しているの？」

ラマは後頭部に手を組んで、淡々とした口調で答え始めた。

「お金のやりくりは、全てサラボナに任せているからな。」

近頃は何でも屋の仕事も減ったし、家計が厳しいんじゃないか？

俺もそのうちここから追い出されるかも」

それを聞いて、マールリアは驚き戸惑った。

「えっ！？ ラマってここに住んでいたの？」

「ああ、そうだけど？ 知らなかったのか？」

「うん。てつきりここはサラボナの家だと思っていた……」

そう発した後、マールリアは徐々に曇った表情になっていった。

この二人は前々から妙な関係だとマールリアは感じていたが、ひとつ屋根の下で暮らしている仲だったようだ。

ということとは……。

(ひょっとして、二人は恋人同士……?)

そう考えた途端、マールリアの胸が微かにちくりとした。まるで細く小さな針が刺さったように。

(……何、これ……?)

この異変に気づいたマールリアは、治りもしないのに自らの胸元を手のひらで撫でた。

と、その時。扉が荒々しく開いたと共に、活発な声が響いた。

「みんな、おつはよー!」

三人が一斉に振り向くと、ルイザが両手に大きな布のカバンを持って、のっしのっしと会議室に入ってきた。

「ルイザ、その手荷物はどうしたの?」

指を差してマールリアが尋ねると、ルイザは両手の荷物をドスンと床に置き、明るい笑顔でピースをした。

「私も、ここに住ませてもらいまーすっ!」

「ええっ!?!」

そのビックリ発言に、ルイザ以外の三人が大きな声を出し揃えた。「だって毎日ここへ通うのめんどろーだし。どうせ私一人暮らしかからさっ! いいでしょ、サラボナ?」

と勝手なことを言って、ルイザは楽しそうに微笑んだ。

(グラスのことで苛立っている今のサラボナに、こんな話を持ち出して大丈夫なの?)

と不安になったマールリアは、恐る恐るサラボナの方に目を向けた。するとサラボナは、今にも怒りが爆発しそうに顔を赤らめて、テーブルに置いてある両拳をブルブルと震わせている。

「わわっ」

驚きのあまり、マールリアは口に手のひらをあてた。

「ただでさえ家計が厳しい状況なのに、住人が一人増えるなんて……!」

サラボナが、怒りに満ちた低い声を出す。

そしたらラマが苦笑いをしながら、手を上下に振ってサラボナをなだめた。

「まあまあ、そう怒るなよサラボナ！ 賑やかになっていいじゃないか。」

これからルイザにも何でも屋の仕事頑張ってもらおうぜ！」

その効果があったのか、サラボナは静かに表情を戻し、腕を組んで俯いた。

「……仕方ないわね、ベッドは空いているから自由に使っていていいわ」「わーい！ ありがとうサラボナっ！ 大好きっ！！」

ルイザは両腕を高く伸ばして喜んだ。

いつもの真面目な顔に戻ったサラボナは、立ち上がって歩き始めた。

「ルイザ、部屋に案内するわ」

「はいっ！」

「あっ、私も部屋見たい！」

マールリアも、サラボナ達が生活している場所に興味があったので、腰を上げて二人の後を着いていった。

ラマを残して、三人は会議室から出た。そこには長い廊下があった。扉が二つとその奥に階段が見える。

「この部屋は、確かキッチンだったわね」

マールリアが手前の扉に指を差して確認すると、サラボナが、うんと頷いた。

「じゃあ隣の部屋は？」

「そこはお風呂とトイレ。廊下の突き当たりの扉は裏口よ」

マールリアは、なるほどと納得して首を振った。

その二人のつまらない会話に我慢が出来なくなったルイザは、両手のカバンを少し持ち上げて急かした。

「早く行こうよー。荷物重たいのよー！」

「ごめんごめん」

サラボナとマールリアは、頬を膨らませて怒っているルイザの顔を見て笑った。

そうして、三人は二階へ上がっていった。

二階へ上がると短い廊下があつて、扉が二つあつた。

「二階もあるなんて、随分大きな家に住んでいるのね。たった二人暮らしなのに」

とマールリアは言った。

「うん。手前は女子部屋で、奥は男子部屋よ」

そう説明して、サラボナは階段側にある手前の扉を開けた。

（ん……？　サラボナとラマは一緒の部屋じゃないの？）

マールリアは、ますます二人の関係が分からなくなってきた。

マールリア達は、導かれた部屋の中へ足を踏み入れた。

中を見た瞬間、ルイザが大きく口を開けて、カバンをドスンと床に落とした。

「わーお……！」

「わあ、広いつ！」

マールリアも目を見開いて、嘆声をもらした。

そこは、マールリアが思っていたよりも広い部屋だった。室内には小さなテーブルと椅子が二脚、洋服タンス。

それから窓が一つと、壁際にはベッドが五台も並んでいた。綺麗に掃除も行き届いていて、とても過ごし良さそうな寝室だ。

「ベッド沢山……！　すごいっ！」

目を輝かせて興奮した声を出すルイザ。

サラボナが差し出した右手を、広々とした部屋に向けた。

「ここが女性部屋よ。自由に使っていいわ。

実は仲間が増えた時のことを考えて、ベッドを沢山用意していたのよ」

「やったー！ まさに私の為にある部屋ね！」

すぐさまルイザはベッドに腰掛け、両腕を伸ばして気持ちよさそうに上半身だけ寝転がる。

そのはしゃいでいるルイザを見て、マールリアは羨ましい気持ちになった。

（いいなー、ルイザは。私も普通の女の子だったら……）

マールリア達が住んでいるムーンの城下街からずっとずっと南、遙か彼方の大地に裏月星人達は暮らしていた。

この土地はムーン王国の領土の一部であるけれども、辺境に位置するこの場所までは中央の目が行き届いていない。なお、ここには明確な名前が付いておらず、月星人達から『裏月星人の土地』と呼ばれていた。

この辺りは土地の大部分が緑に覆われ、昼間でも薄暗い森がどこまでも長く続いている。従って、月星人達が住んでいるような大きな都市は無く、小さな村がぽつぽつと散らばっているのみだ。もしかしたら未だに発見されていない集落も存在するかもしれない。それほど僻地ということだ。

このようなへんぴな場所にも貴族がいた。裏月星人の貴族『クラルカッド家』である。

彼らは裏月星人の中でも際立って魔力が高い家系で、遠い昔から民族の頂点に立っていた。

始めは単なる村のリーダー的存在だったのだが、次第にこの地域をまとめるようになり、いつしか貴族という存在に変わっていた。それゆえ、ここは独立国でもないのに『王』が存在している。

その貴族達は、森の中に囲まれた小さなお城、『クラルカッド城』に住んでいた。

クラルカッド城は円筒形の細長い塔が幾つも立っており、その上には鋭く尖った円錐形の屋根がついている。

壁には、誰もが気味悪がるような長いツタが絡み、窓は陽の光が差し込まない分厚いカーテンが閉められている。城全体が黒色をベ

ースにし、いかにも『魔物が住むお城』と感じさせられる建物だ。

そんな不気味な外見にふさわしく、城内も薄暗かった。

広々とした玉座の間は、黒い大理石の床、周囲は紺色の壁で囲まれている。玉座前には何故か薄い灰色のカーテンが上から吊ってあり、主の姿が影しか見えない。

正面の両サイドには、黒い鉄で作られた松明台が設けられ、赤い炎が妖しく燃え盛っていた。

その隅に、男と女の姿があった。

男の方は、この城の大臣『ジュラン』だ。グラスの兄である。髪は肩まで伸び、グラスと同様に袖や裾がズタズタに引き裂かれた紺色のローブを着用している。

その隣に立っている女は、以前マールリア達の前に現れたグラスだ。彼女は大臣の妹という位置を鼻にかけ、この城の中を我が物顔で振舞っている。しかし、主の前ではへこへこと頭を低くするセコイ女だった。

「グラス、マリラ様の身体の様子はどうだ？」

ジュラン大臣は、隣に立っているグラスに問う。

「かなり体調いいみたい。もう部屋でストレッチ運動なんかしているのよ」

「長年監禁されていた割には、驚く程早い回復だな」

安心して頬を緩ます、ジュラン大臣。

「牢屋の中で毎日身体を動かしていたみたいよ。」

あきれたわ。会った時は衰弱していたと思っていたのに」

「マリラ様らしい。幼い頃活発だったのを思い出すな。で、精神的には立ち直ったのか？」

それを聞くとグラスは俯き加減で、重苦しい声を発した。

「初日はショックで取り乱していたけど、今は落ち着いていたわ……」

「自分が拉致されている間に、家族が惨殺だから……。無理もない」

ジュラン大臣は小さな溜息をつき、赤い瞳を閉じて『あの日』を思い出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

『クラルカッド家』は同じ国に住みながらも、ムーン王国に反抗している反王国派だった。

昔から敵対関係にあり、頻繁に攻撃を繰り返している。正確に言うと、クラルカッド家側が勝手に意気込んでいて、フローライン王女は殆ど相手にしていなかった。

もともと彼女が本気を出せば、こんなちっぽけな貴族などひとたまりも無いだろう。フローライン王女から見ると、裏月星人なんぞ「虫けら」に等しい存在だという。

さて、そのクラルカッド家には、王と王女の間生まれた三姉弟がいた。

長女の『キャンドル』、次女の『マリラ』、末っ子の『ミラー』。三姉弟は仲良く暮らして、すくすくと元気に育っていった。

だがある日のこと、ムーン城の兵士から次女のマリラが拉致されてしまった。それが原因で、クラルカッド家は王国に手も足も出せなくなってしまう。

それから数年後……。さらに追い討ちをかけるような事件が起こったのだ。

雨が激しく降り注いでいた嵐の夜――、

とある用事があったジュラン大臣は、兵士達を数人連れて泊りがけの外出をしていた。その際、グラスも着いて来ている。

その途中、突然兵士から緊急伝達が入り、ジュラン大臣達は至急クラルカッド城に帰還した。

一同が城に足を踏み入れると、そこには横たわる兵士達の死体まみれだった。壁には血が飛び散り、床にはどす黒い血だまりが出来ている。

一同は主の安否を確認する為に、死体だらけの通路を走り抜け、王と王女の部屋の扉を開けた。

すると、その部屋も真っ赤に染まっていた。次に目に飛び込んできたのは、床で仰向けに倒れている王と王女の無残な死体……。

その凄まじい有様に、一同は目を背け、顔をしかめる。

『まさか、月星人達が攻めて来たのか……？ いや、しかし——』

ジュラン大臣はそこまで言って、言葉を飲み込んだ。

フローライン王女は、今や衰退しきっているクラルカッド家など眼中に無いはずだ。そしたら一体誰が——？

そのような状況で唯一生き残ったのは、森へ上手く逃げ込んだクラルカッド家の長女、『キャンドル』のみだった。彼女は次の日の朝に、とぼとぼと歩いて城へ帰ってきたのである。

キャンドルは当時十歳だった。

さぞ恐ろしい目に会ったのだろう。彼女は目の焦点が定まらずに、放心状態だった。純白のワンピースには、黒い血の痕が水玉模様のように転々と付着し、それが生命の危機に直面したことを物語っている。

ジュラン大臣はしゃがみ、小さなキャンドルの肩を両手で持って、しっかりと目を見つめた。

『キャンドル様。一体城で何があつたんです？』

『つ、月星人の兵士が……、攻めてきたの……』

『フローラインか……！』

そのキャンドルの怯えた震える声を聞いて、ジュラン大臣は眉間

を寄せて険しい顔をした。

やはりフローライン王女の軍だったようだ。しかし何故、王女は突然攻めて来たのか。何が目的だったのか……。

ジュラン大臣が思い悩んでいると、小さなグラスが横から割り込んできてキャンドルに話しかけた。

『ミラー様はどうしたの？ どこへ行つたの？』

『……ミラーは……、森の中を一緒に逃げている途中、足を滑らせて崖から……』

キャンドルは目を左右に泳がせながら、もごもごと聞こえ難い声で答えた。

『そ、そんなああ、うわーああん！』

グラスは顎を上げ、大きく口を開けて涙をボロボロと落とし始めた。

ジュラン大臣は俯いて、目を片手で覆った。

——数日後、崖下から未っ子のミラーの死体が見つかった。

こうして最終的にクラルカッド家で生き残った者は、長女の『キャンドル』。それから、監禁されていた『マリラ』の二人のみになつてしまった。

.....

ジュラン大臣はゆっくりと瞳を開いた。もう遠い昔の出来事なのに、未だにあの時のことを鮮明に思い出せる。

「——あの日、私達が外出をしていなければ……！」

「兄さんのせいじゃないわよ！ 攻めて来たフローラインが悪いのよ！」

グラスが、ジュラン大臣の腕を掴んで必死にかばう。

「そうだな……、フローラインさえ……。フローラインさえいなけ

れば」

「うん……」

それっきり、二人は視線を落として黙り込んでしまった。

彼女に強い私怨を抱いても、今の状況じゃどうにもできないのを二人は良く理解している。

「兄さん、私マリラの様子を見てくるわね」

「ああ」

話が程よく途切れたので、グラスは兄に一言伝えて玉座の間から出て行った。

グラスは薄暗い通路を歩き、マリラの部屋の前まで来て両開きの扉を開けた。

視線が部屋の中心に留まると、マリラがせっせと腕立て伏せをしている姿が見える。

「マリラ、今日も相変わらずストレッチ？」

マリラはグラスの声に気づくと、腕立て伏せを止めて立ち上がった。そして、傍のベッドにドスンと豪快に腰掛ける。

「そりゃあね。早く体力を戻して戦いに備えなきゃ！」

「まったくマリラってば、監禁されていたとは思えない程の回復ぶりね」

グラスに感心されて嬉しかったのか、マリラは顎を上げてニツと笑った。

「ふっふっ。私はその辺に居る軟弱野郎と違って超人なのよ。」

それよりそんな所に突っ立ってないで、アンタも座りなさいよ」

「ええ」

マリラに促されて、グラスもその隣に腰掛けた。

グラスとマリラは幼き頃、良く遊んでいた間柄だ。そのおかげで、グラスは自分より身分の高いマリラに対して気安く話することが出来る。

グラスは先程、マリラが発言した話題を持ち出した。

「ねえ、マリラ。戦いに備えるって、まさかフーラインと戦うつ

もりなの？」

「もちろんよ！ 私の家族を無茶苦茶にしたアイツを、この手でぶっ殺してやるっ！」

マリラは力のこもった声を荒らげ、胸の前で両手を重ねてボキボキと骨の音を鳴らす。

彼女の瞳には、憎悪の炎で爛々と燃えさかっていた。それと同時に、暗く悲しい色も宿している。

グラスもマリラと同じ心境であった。けれども、ムーン王国は驚異的な魔法軍を有しており、クラルカッド家のレベルでは全然歯が立たない。そんな所に攻め込むなんて、とんだ自殺行為だ。

「……でもマリラ、まだ体力が戻ってないんでしょ？」

それにうちは兵士が激減しているから、今フローラインに立ち向かうのは無謀よ」

「駄目で元々！ 私一人でも突っ込んでみせるわ！」

マリラは出した右手をぐっと強く握り締め、小さく震わせている。せつかくグラスが忠告しても、マリラはやる気満々の姿勢だ。この調子では、どれだけ止めても効果は無いだろう。それに彼女は昔から単純な頭の持ち主で、物事を冷静に考えるよりも、手が先に出るタイプだった。

（本当はマリラの体力が完全に戻ってから伝えようと思っていたんだけど……、止むを得ないわね）

グラスはマリラに気を引かせようと、精一杯明るめの声を喉から出した。

「じゃあこれはどうかしら。マリラに話そうと思っていたとおきの情報！」

「何？」

「私が依頼した『何でも屋』に、何故だか知らないけどフローラインの娘っぽい人がいたのよ。」

——ほら、マリラを助けた時にいた髪が長くてストレートの女！」

「あの時の……！」

マリラが大きく目を見開いた。きっと、あの時の女を頭に思い浮かべているのだろう。

このまま上手く丸め込めそうなので、グラスは人差し指を立ててもう一押しした。

「今ムーン城に攻めるのは無理だから、まずはフローラインの身内から消していくのはどう？」

「……なるほどね。グラス、面白い情報を有難う」

マリラは腕を組み、視線を右上に向けて、ニヤツと口から牙を覗かせた。

その表情から見て、マリラはきっとフローラインの娘の所に向かうはずだ。

どうにか彼女を止めることができて、グラスは胸を撫で下ろした。

——グラスが立ち去った後、マリラは考えていた。

自分を長年監禁して、家族を奪ったアイツが一番憎い相手だ。今すぐにでも殺してやりたい。

でもまず娘を手にかけたら、アイツはどんな気分になるだろうか？ 自分と同じように、無念の気持ちになるだろうか？ ……自分が

が味わったような苦しみを、アイツにも味あわせてやりたい……！

このようにあれこれと思考を巡らせていると、マリラは今すぐ城から飛び出したくなってきた。

（まだ体力が完全じゃないけど……大丈夫。私は昔から強い女だったから！）

そう自分に自信をつけて、マリラは着替え始めた。

*

*

*

マリラは黒光りする床の上をカツカツと足音を立てながら、玉座

の間に入った。

端に目を向けると、グラスとジュラン大臣が二人並んで立っている。

ジュラン大臣がそのマリラの派手な格好を見て、ぽかんと口を開けた。

「マリラ様……、その格好は……？」

マリラは胸元が見える真っ赤なレオタードに、腰から下はスリット付きのロングスカートをはいていた。大きく開いたスリットからは、大胆に素肌とロングブーツが覗いている。

頭には二股帽子を被り、片手には死神のような大きな鎌を持っていた。

マリラはトントンと鎌の柄で床を叩き、はつきりとした口調で玉座の間にいる皆にこう伝えた。

「今から城を出て、フローラインの娘を殺してくるわ！」

するとそれを聞いて、グラスが片腕を伸ばして一歩前に出てきた。

「あ、私も手伝うわ！ あの子、妙に清楚ぶってて気に入らなかったのよ。」

二人で協力して傷めてつけてやりましょ！」

「だめだグラス。お前は魔力が低いだろう！ かえってマリラ様の足手まといになる！」

ジュラン大臣から厳しく叱られたグラスは、途端に表情を崩した。「そんなあ、兄さん……。私だって死んだミラー様の無念を晴らしてやりたいわよ……」

肩を落としているグラスの姿を見て、マリラはふと思い出した。弟のミラーとグラスは、将来結婚をする約束をしていた、と。

「そっか……。ミラーはあんたのフィアンセだったわね」

「うん……」

ぽつりと、寂しい面持ちでグラスは返事をした。

子供の頃とはいえ、愛する人を突然失ってグラスもずっと苦しん

できたに違いない。

マリラはグラスを元氣付けるために、彼女に向かって優しく微笑んだ。

「大丈夫よ、グラス。私が皆の分まで頑張ってくるから」

その時、玉座のカーテン奥から女の声が響いた。

「——しかし、マリラ。お前は仮にもこの城の姫だ。その身に何かあつては困る」

マリラは声がした方を振り向いた。灰色のカーテンに、ぼんやりとした人影が映っている。

カーテンの奥の玉座に座っているのは、あの『惨劇』からたつた一人生き残った、長女のキャンドル「クラルカッド」だ。現在、彼女が王女の座に就いている。

「丁度いい兵士がいるんだ。それを側近にさせよう」

そのキャンドルの発言に、マリラはドンと片足を一步前に踏み出して、怒りをあらわにした。

「姉さん！ 私は側近なんていらなわっ！ 一人で平気よ！」

「……不安なんだ。お前がまた居なくなってしまういそうで……。そうになったら、私はどうすれば良いか……」

カーテン越しでキャンドルの表情は見えないが、その元氣の無い声の様子から憂い顔が想像できる。

マリラの拉致事件と、あの惨劇があつたことにより、キャンドルはすっかりと弱氣になってしまっているようだ。

「ね、姉さん……」

そんな姉の様子に言葉を失い、マリラは目をふらふらとさせた。

結局マリラは洪々承知して、側近をつけることにした。

ほどなくして、使いの者から呼ばれた兵士が玉座の間に現れた。杖を持った青いローブの男だ。

その男は、フードを目深く被っていて口の辺りしか見えず、とても薄気味悪かった。少し俯いた顔には濃い影ができていて、それが

一段と不気味に映る。とはいえ、このような人物は裏月星人の中にごろごろいるので、特に珍しくは無い。

青ローブの男はマリラの隣で足を止めると、顔を少し上げて口を開いた。

「……俺はビースだ。よろしく」

「あんたが私の側近なの？　始めに言っておくけど、私の足を引っ張ったら承知しないからね！」

マリラはビースの顔に人差し指を向け、キツイ口調で言い放った。再びキャンドルが、カーテン越しから声を響かせた。

「頼んだぞビース。いかなる時でもマリラを守ってやってくれ」

「言われなくても分かっている」

「……守られるなんて、私のガラじゃないんだけどね」

マリラは何とも決まりが悪くなり、後ろを向いて足早に歩き出した。その後に、ビースが着いていく。

そうして二人は玉座の間から出て行った。

ビースが現れた頃から、グラスは両手を腰に当てて不服そうな表情を浮かべていた。

（キャンドル様、ひどいわ。ずっとここに住んでいる私には目もくれないで、あんな奴を選ぶなんて。

本来なら私がマリラの側近になるべきなんじゃないの？）

グラスの胸の中は、嫉妬心で一色になっていた。

実の所、グラスは権力者の傍に立って、更に威張った態度を取ろうと企んでいたのだ。

グラスは、腕を組んでいるジュラン大臣の顔を覗き込んで尋ねた。

「……兄さん、あの気味の悪い男は何なの？」

「先日、兵を補充するために、志願兵を集めたんだ。その内の一人だ」

「へえ……」

突然ジュラン大臣は、グラスに顔を近づけて耳打ちをした。

「どうやら奴はキャンドル様のお気に入りらしい」

「お気に入り……ですって……？」

グラスはそれを聞いて、なおさら不機嫌な顔つきになった。

時間は夕方に差し掛かってきた頃、ツイン・マジックの基地では……。

今日はツイン・マジックと何でも屋の仕事がまるつきり無く、四人は椅子に腰掛けて時間を持て余していた。

友達とゆったり過ごすことが大好きなマールリアは、このままでも十分満足だった。

ただルイザの方は、両腕を伸ばしてうつ伏せになり、この状況に飽き飽きとしている素振りをあからさまに見せている。何かしらやっていないと、気が済まない性分なのだろう。

「もー、退屈！ 店番してもお客さん来ないしー。マーヤ、お城で何か情報ないの？」

ルイザに問いかけられたその拍子に、マールリアは城の兵士達が話していた世間話を思い出して、視線を上に行った。

「そういえば……あの」

だが伝えるべき内容が迷いが生じ、言いかけた言葉を無理やり止めて視線を元に戻した。

「——やっぱり何でもない……」

その中途半端なマールリアの言動に反応して、ラマとサラボナがテーブルに手をつけて身を乗り出す。

「そこまで言っておいて何だよ。気になるだろ！」

「そうよ、マーヤ。少しでも何かあったら隠していないで話して。もしかして悪い知らせなの？」

威圧感を与えるような強い目つきの二人に押されて、マールリアは仕方ないといった表情で話し始めた。

「だったら言うけど……。私達が城へ忍び込んだ時に、牢獄を守っていた若い兵士がいたでしょ？」

あの人炭鉱に飛ばされたんだって」

うつ伏せだったルイザが急に頭を上げて、大きな目をくるつと動かした。

「炭鉱に飛ばされた？」

「炭鉱では辛い労働を強いられて、一生奴隷のように扱われるみたい……」

マールリアが静かにそう口にした後、誰もが眉をひそめ、堅く口を閉じてしまった。

きつとみんな様々な思いを抱いているのだろう。

誰も声を発しない気まずいムードが少し続いていたが、急にその空気を吹き飛ばすような明るい声をルイザがあげた。

「ねね、マーマ。今日ここに泊まりなよ！ 私マーマと一杯話したいことがあるんだー！」

マールリアは驚き、口が半開きの状態でルイザの顔を見た。

「えっ！ 私も泊まっていたいのかな？」

「ええ。ベッドもたっぷりあることだし、構わないわよ。マーマが大丈夫ならね」

サラボナの返事を聞き、マールリアは嬉しくなっていて思わず笑みがこぼれた。今まで友達と一緒に泊まることを、どれほど憧れたことか。

「じゃ、じゃあ私、城に着替えを取りに帰るねっ！」

はやる気持ちを抑えきれず、マールリアは立ち上がった椅子を入れないまま会議室から飛び出していった。

即座に出て行ったマールリアに、残った三人は瞳をぱちぱちとさせて、あっけらかんとしていた。

「なんか、すっげー嬉しそうだったな……」

ラムが椅子の背もたれに寄りかかって、ぼそつと小声を漏らした。「お姫様だもの。友達とお泊まり会なんてしたことないんでしょ。

あんなに喜んでる姿を見ると、逆にこっちまで嬉しくなっちゃう

わね」

まるでマールリアの姉のような、優しい表情でサラボナは言う。ちよつとしたことで感動を示すマールリアは、三人の目から見るとすごく新鮮に映り、可愛らしくて胸がくすぐられる。実に、放っておけないという気持ちをかき立てられる女の子であった。

*

しばらく経ち、マールリアはオリビアに一言断りを入れて基地に戻ってきた。

これだけ部屋を開けているのにも関わらず、気づかれていない所からすると、マールリアは完全に母親から放置されていることが分かる。この分だと、家出なんてしても到底見つかりっこないだろう。

晩御飯はサラボナが作ってくれたカレーだった。

スパイシーないいい香りが、とても食欲をそそられる。

マールリアはカレーをスプーンで一すくいして、口に運んだ。

「わあ、美味しいっ！」

口中に広がる初めての家庭の味に、マールリアは感動した。

もちろん城の料理も、高級素材がふんだんに使用されていて美味しい。しかし家庭料理のこちらは、心がほっとする様な優しい味だった。

「お城のご馳走と比べたら質素だと思うけど、喜んでもらえたみたいで良かったわ」

謙遜するサラボナに、マールリアは左右に手を振って素直な気持ちを伝えた。

「とんでもない！ お世辞なんかじゃなく、本当に美味しいわよ！」

「うんうん、サラボナ天才！！ きつと料理の先生になれるわよ！」

「そ、そう？ ありがとうね」

マールリアとルイザから褒めちぎられて、サラボナは少し顔を赤

くし、照れ笑いをした。

（料理は美味しいし、皆と一緒に楽しいし、最高の気分！）

マールリアはこれまでにないぐらい、心が幸せな気持ちであふれていた。

というのも、マールリアの食事風景は縦長いテーブルにぽつりと一人で座って、黙々と料理を口にするだけだったからだ。背後にはメイド達が立っているが、会話なんて当然無い。

マールリアは、こんなに寂しい食事を日々繰り返しているのだ。

やがてカレーを食べ終わった四人は、手を合わせて頭を下げた。

「ごちそうさまでした！」

「さあー、女性陣は片付けるんだー！」

食事の挨拶が終わった途端、ラムが空の食器を両手でサラボナの方にぐいっと押す。とても彼らしい態度だ。

サラボナが眉を吊り上げてラムを睨む。

「もうっ、ラムは食べるだけ食べて、ちっとも手伝わないのよ！」

「何にもしてないような言い方するなよ。いっつも買出しに行ってやってるだろー？」

腕を組み、ラムはぶっきらぼうな口ぶりでサラボナに反発する。

「それとこれとは別っ！　自分が食べたものぐらい運びなさいよね
！」

「あー、うるさいうるさいっ！」

最後はすねた子供のように、ラムは顔を背けてしまった。

いつものごとく喧嘩をする二人に、ルイザは口を両手で覆って、くっくつと笑いをこらえている。

けれどもマールリアは少しも笑うことなく、その状況に一人取り残されたようにただじつと眺めていた。

そのような仲の良い光景を見せつけられると、寝床が違うとはいえども、二人が恋人という意識が抜け切れない。

（やっぱり二人は恋人同士なのね。……まあ、私には関係ないけどさっ……！）

マールリアは強く意地を張っていたが、本心は少し寂しかった。ラマが自分にお花をくれたり、仲良く接してくれていたのは『ただの仲間』としてだったのかと。

「マーヤも片付けるの手伝ってよ」

「あ。うん……」

ルイザの声でマールリアは我を取り戻し、生返事をして食器をまとめ始めた。

するとサラボナが二人に右手のひらを向けて、それを止める。

「あ、私が片付けるからいいわよ。二人はお風呂に入っておいで」

「え、いいのー？　じゃあ……」

「サラボナ、ご馳走様でした。ありがとうね」

二人はサラボナの言葉に甘えて、お風呂に入ることにした。

「ね、マーヤ。一緒にお風呂入ろうよ！　私が背中を流してあげるよ」

「うんっ！」

ルイザに誘われて、嬉々とマールリアは大きく頷いた。

（うわー！　ルイザとお風呂だなんて、恥ずかしいけど嬉しい！）

ルイザのおかげで、マールリアの元気が一気に舞い戻ってきた。

「それじゃあ、お風呂行つて来るねー！」

二人は廊下に向かって足を進ませる。

そんな歩いていく二人の後姿を、ラマは片手で頬杖を突いてぼーっと見つめていた。

「いやー、実に楽しそうだ。女の子はいいなあ」

ふいにマールリアが、ピタリと足を止めてラマの方を向いた。

その振り返ったマールリアを見て、ラマは怪訝な表情を浮かべて頬の手を離す。

「ん……？ 何だ？」

マールリアはラムの顔に人差し指を向けて、ズバツとこう言った。
「ラム、絶対お風呂覗かないでよね！」

ムツと来たラムは勢い良く立ち上がった、物凄い剣幕で叫んだ。
「ぶわああーかっ！！ 俺はそんなキャラじゃねえよっ！！」
「あれ？ そんなキャラじゃなかったの」

マールリアは、ラムのリアクションを楽しむかのようにくすつと小さく笑って、ルイザの方へ走って行った。

そうしてマールリアとルイザは、お風呂の中でキャツキャ、キャツキャと、じゃれ合いながら体を洗い合った。

全員お風呂からあがった後、雑談をしたり、トランプをしたりしているうちに、心地よい眠気がゆつくりと近づいてきた。楽しい時間、あつという間に過ぎていくものだ。

サラボナがみんなの顔を見て口を開く。

「そろそろ休みましょうか」

「ふわぁーい」

ルイザが大きく開けた口に手をあてて、欠伸混じりの声を出す。
四人は重たい腰を上げて、そろそろと二階へ上がっていった。

二階に着いて、女三人は奥の扉前にいるラムに手を振った。

「おやすみー」

「またなー」

ラムは眠たそうな目で手を振り返して、男子部屋の中へ入っていた。
った。

女三人も部屋へ入って、ベッドに寝転がった。

マールリアは、楽しくて仕方ないといった風にニコニコとしてベツドの布団に顔をうずめる。

（一日がとても短く感じた。普通の人の生活って、こんなに楽しいんだなあ……）

にぎやかで明るい食卓。うれし恥ずかし、友達とお風呂。一般人にはごく当たり前のことなのだが、お姫様のマールリアには、絶対に体験することが出来ないとても貴重な時間だった。

そして今日のこと、マールリアは普通の女の子への憧れがますます強くなっていった。

隣のベッドにはルイザが横になって、微笑みながらマールリアのことをじっと見ている。

「私、こうやってマールヤと一緒に生活してみたかったんだ」

「私も！」

マールリアは何度も首を振った。

ルイザと出会って半年。こんな日が来ようとは夢にも思わなかった。

夜中、二人は積もる話に花を咲かせた。そして途中で力尽き、深い眠りにについていった。

*

次の日。四人は顔を洗い、着替えを済ませて朝食をとっていた。

朝食はトーストと、目玉焼きと、コーヒード。

コーヒードの芳ばしい香りが辺りを漂っている中、マールリアは半目でトーストの端をかじった。

まだ目が覚めなくて、もやっと頭に霧がかかっているようだ。

ルイザの方はというと、小さな手鏡と睨めっこをして、腫らしているまぶたを人差し指でつつんと触っている。

「昨日遅くまで起きてたから、最悪なぐらい目が腫れてる……」

「二人とも、ずっと話していたでしょ。おかげでこっちも、あんまり眠れなかったわよ……」

サラボナも寝ぼけまなこで、しまりの無い顔をしている。気の毒なことに、同じ部屋にいた彼女も二人の巻きぞいになってしまった。眠そうな女性三人を見て、呆れた様子でラムが肩をすくめた。

「どうして女の子って、こうぺちゃくちゃ、ぺちゃくちゃと話すんだ？」

「ラムちゃん。女の子はね、しゃべっていないと死んじゃう生き物なのよ！」

人差し指を立てて、キリツとルイザが答えた。

その時だった。

いきなり奥からくぐもったノック音が、ドンドンドンと響いた。マールリア達がいる会議室の扉ではなく、どうやら外の扉を叩いているようだ。

この音のせいで、三人は一気に眠気が吹っ飛んだ。

サラボナが扉の方へ顔を向ける。

「何よ……、こんな朝早くから」

「普段もこの時間にお客さんって来るの？」

とルイザが二人に訊いた。

「いや、こんな朝っぱらからお客は来ないぞ。また訪問販売かもしれないな」

「ラム、追っ払ってきて」

うっとうしそうな顔つきで、サラボナは手を振ってしっしっとい払い払うような仕草をした。

「ハイ、ハイ」

けだるそうな返事をして、ラムは立ち上がる。

サラボナがキツと厳しい顔をして、ラムに指を差した。

「返事は一回っ！」

「あいよっ！」

ラムは、ダラダラと歩いて会議室から出て行った。

またあのやりとりだ。マールリアとルイザは可笑しくなり、顔を見合わせてクスクスと笑った。

ラムが入り口へ足を進ませている途中に、またしても外の者が扉を荒々しく叩いてきた。そちらに視線を移すと、木の扉が今にも外れてしまいそうな程、大きく揺れ動いている。もはやノックというよりも、扉を殴っている状態に殆ど近かった。

「はいはいはいっ！ 何なんだよ朝っぱらから！」

ラムは苛立ちが混じった声を吐き出し、扉を開いて外の人を確認した。

するとそこに待ち受けていた者は、大きな鎌を持った女と、杖を持つ男の二人だった。その特徴ある奇抜な衣服は、一目見ただけで裏月星人だということが分かる。

ラムは一瞬ぎょっとしたが、直ぐに落ち着いて、ひとまず二人に何か用かと訪ねようとした。

その矢先、いきなり喉の辺りに冷たく堅い感触が伝わってきた。女が鎌の背の湾曲部分を、ラムの顎下へと押し当てた為である。

そのような危機な状況に置かれているにも関わらず、ラムは能天気二人の容姿を観察していた。

（随分とでかい女だな。俺と身長同じぐらいじゃないか？ それにこの派手な衣装。

よく恥ずかしくもなく出てこれたもんだなあ。もう片方の青い奴は……、男か？ すっげー暗そうだ）

などとペラペラと心の中で話していると、女が腕に力を加えて、刃の背を痛いぐらいにラムの首へ押しつけてきた。

「……死にたくなかったら、中へ入れなさい」

女は静かに低めの声で発言した。

「もしかしてグラスの友達か？ 一千万スター持ってきた？」

堅い顔つきの女を少しでも和らげようと、ラムは両手を差し出して軽く笑いながら対応した。けれども、女は無言のままギロリとラ

マを睨む。

「——んなワケないか。で、何の用？ 何でも屋の依頼だったら中で話聞くけど」

ラムがそう言ったら、女は喉に当てていた鎌をスツと降ろして鼻で笑った。

「フツ、大した男ね。鎌を目の前にして怯えないなんて」

「それはどうも。こういうのに良く慣れているんでね」

余裕の口振りで言い、ラムは片手を腰に当てて不敵な笑みを浮かべた。

「アンタのその度胸に免じて穩便に進めてあげるわ。

ここにフローラインの娘がいるんでしょ？ ……その娘を今すぐ連れてきて！」

女のその要求を聞いてラムは少々俯き、厳しい顔つきで腕を組んだ。それから思案に暮れる。

（マーヤのことを知っているということは、やっぱりグラスの知り合いか。

それはさて置き、どうするか。不意打ちするにもここじゃ狭くて思うように行動が取れないし……。

何よりも二人いるのが厄介だな）

そうしていると、女がじれったそうに片足をぱたぱたと動かし始めた。まさに典型的な裏月星人の行動である。

「そう苛々すんなよ。今連れて来るから少しここで待ってる」

女にそう伝えて、ラムは店の扉を閉めきった。そして鍵をかけて皆の元へ走って行った。

（ひとまずマーヤには裏口から逃げてもらって、後は俺達で何とかするか）

一方その頃、会議室で朝食をとっている女三人は……。

そんな事が起こっているとはつゆ知らず、テーブル席で楽しい会話が繰り広げられていた。きつとラムが、訪れた商人をすっかり門

前払いしてくれるだろうと、三人は安心しきっていたのだ。

ところがこれから、三人が思わぬ方向へと展開を見せることになる。

突如大きく扉が開いて、ラムが飛び込んできた。それによって賑やかだった食事の場が、しんと物静かになる。

ラムは見るからに緊迫した面持ちを出しており、三人はつい見入ってしまった。

「どうしたのラム？ そんなに血相を変えて」

そう訊いたサラボナには目を向けず、ラムは腕を伸ばしてマールリアの顔に人差し指を向けた。

「マーヤ、今すぐ裏口から逃げろ。お前狙われている！」

「えっ!？」

三人は飛び上がるような高い声を一齐にあげて、急激に表情を変させた。もちろん名指しされた当のご本人、マールリアが顔を硬直させて一番驚いている。

サラボナがいぶかしげな表情で、再びラムに尋ねた。

「……一体誰が来ているの？」

「やばそうな裏月星人が二人。今は鍵をかけている」

「裏月星人……!」

マールリアはごくりと唾液を飲み込み、足の上に置いていた両手を握って力を込めた。そのラムの言葉に緊張感を煽られて、心臓の鼓動がドクドクと次第に早まってきていた。

「な、なぜマーヤが……? どうすればいいの？」

怯えと困惑の色が混ざった瞳で、ルイザが皆の表情を伺いながら答えを待つ。

そこでサラボナが立ち、決意に満ちた顔でマールリアの方を向いた。

「ラムの言う通り、ここは私達で食い止めるからマーヤは急いで裏口から逃げて!」

サラボナまでラムと同じことを言う。だけど正義感の強いマール

リアは、自分だけ逃げるなんてまっぴらだった。それに、自分はそのフローライン王女の娘なんだという自信も多少胸の中に含まれていた。

「――逃げるなんて冗談じゃないっ！ 私も皆と一緒に戦うわ！」
勇ましい声を張り上げ、マールリアはテーブルに両手をついて立ち上がった。

と、次の瞬間。思わず身体を動かしてしまう程の大きな音が鳴り響いた。それが外の扉を壊された音だと、皆はすぐに察知する。

「壊されたか……」

占い部屋の方に顔を向け、ラマは悔しげに唇へ力を入れる。

もう逃げている暇など一刻も無い。一同は身を寄せて固まり、戦闘体勢に入った。

やがて、裏月星人の二人が会議室に足を踏み入れてきた。

（わっ……！）

その独特な身なりの二人組に、マールリアは自然と目が釘付けになってしまった。

一人は大きな鎌を持った背が高い女。血を連想させるような赤い衣装に、頭は二股帽子を被っている。赤い瞳の中は、月星人と違って猫のように縦長い瞳孔だった。

もう一人は杖を手にした青いローブの男。こちらはフードを深く被っていて表情が見えない。

（こ、これが裏月星人……。グ、グラスより怖い……！）

たった今強気なことを口走ったが、想像していたよりも恐ろしいその姿に、マールリアは恐怖を感じて小さく身震いをした。この二人に比べると、グラスなんてずっと可愛いものだった。

「せっかく人が穏便に済ませてあげようとしたのに、鍵をかけるなんて随分じゃない？」

女は尖った牙を見せて微笑み、ゆっくりと歩んで四人の元へ間合

いを縮めて来た。

それに合わせて、四人は魔法を使うタイミングを見計らいながら、少しずつ後ずさりしていった。

「うわわっ……、本当にやばそうな奴……！」

恐怖で顔を歪めたルイザが、マールリアの後ろへ回り込み、両腕で腰にしがみついていた。

「ちよっ、ちよっとルイザ……」

腰を掴まれたマールリアは身動きが出来ず、戸惑って後ろを向く。そこで唐突に、サラボナが目にも両手を当てて、シクシクとすすり泣き始めた。

「うっう……、扉の修理代がかかるわ……」

「そこかよっ！」

突拍子もないことを呟いたサラボナの腰を、ラマが手の甲で叩いて突っ込んだ。

ついに女の足が、四人の目前まで来たところで止まった。女はゾクツとするような赤い瞳で、マールリアの顔を真っ直ぐに捉えて口を開く。

「アンタがフローラインの娘ね？」

マールリアは両拳を胸の前へ構えて、強気の瞳で女を睨み返した。「だ、だったら何なのよっ！」

その答えが合図だったかのように、突然女が大きく足を踏み出して鎌を縦に振ってきた。

「死んでもらうわっー！！」

「わあっ！」

とっさにマールリアとルイザは、体を右に投げ出して振り下ろされた鎌を避けた。ラマとサラボナは、左側に飛んだようだ。

あまりの恐怖でルイザは床にぺたんと座り込み、顎を上げてキヤー、キヤーと叫び始めた。

女はゆらりとマールリアの方へと振り向く。すぐさまマールリア

は、床に手をつけて身体を起こした。

「こっのー……！」

マールリアは猛々しい声を荒らげ、両手のひらを前に出して銀色の光を集め始めた。その途端、離れた場所からラムが怒鳴ってきた。「ばっか、マーヤ！　ここで大きな魔法を使うなっ、家が壊れる！」

「えっ！？」

慌てて出した手を戻すマールリア。魔法使用禁止なんて、マールリアには致命的だ。何にも出来ないただの女の子になってしまう。「だったらどうすればいいの？」

困った表情で、マールリアはラムの方を向いて答えを求めた。しかしその答えを聞く前に、女がタンツと足を踏み鳴らして、マールリアの前にやって来た。それから、目にも止まらぬ早さで鎌を大きく振りかざす。

「きゃあっ！」

マールリアは両腕を胸の前でクロスさせ、横へ飛んで間一髪に避けた。鎌の刃はただ宙を切っただけだ。

すぐさまラムは、近くにある椅子の背もたれを両手で握り、頭上に持ち上げて女に殴りかかった。

ところが女がそれに気づいて、即座に鎌を横へ振るう。スパツと椅子の座面が簡単に切られて、ラムが手に持っているのは背もたれの部分だけになってしまった。

ラムはそれを握ったまま、啞然として止まってしまった。

「うげっ……、何て馬鹿力……」

「邪魔をするとアンタも真っ二つにするわよ！」

女は腕を伸ばし、ラムの顔に鎌を突きつけて脅した、その後、ぐりと方向転換してマールリアの元へ走っていった。

刃物を目の前にして手も足も出せなかったラムは、もどかしくなっただけで駆け足をした。

「おいサラボナツ！ 剣とか武器になるような物は無いのかよっ！
早くしないとマアヤが！」

「無いこと知っているでしょっ！ 天才だったら両手で刃を受け止めなさいよっ！」

「何だよその無茶な言い草はっ！ こういう時だけ天才扱いすんなっ！」

二人は怒りをむき出しにした顔をぎりぎりまで近づけて、激しくいがみ合う。

その二人がやり取りしている間だった。マールリアがふと後ろを振り向くと、女が鎌を高く振り上げている姿が視界に映った。

「わあっ！」

マールリアは前へ身を乗り出して飛び、勢い余ってうつ伏せに倒れ込んだ。バキツと乾いた音が響いて、鎌の刃がマールリアのスカート裾すれすれに刺さる。

「あらら、残念。また外れたわ！」

女は、まったく残念そうには聞こえない口調で言って愉快そうに笑った。あたかも、わざと外してこの状況を楽しんでいるように見受けられる。

と、急に女の表情が曇った。鎌の刃が床に引っかかって、抜くの
に手間取っているようだ。

その合間にマールリアは身体を起こし、女から距離を取って、ラ
マ達に両手を振りながら早口で叫んだ。

「ラマ、動きを止める魔法が使えるんでしょ？ それ使ってよっ！」

「あー、あれを使うと、俺使えない子になるから」

片手で後頭部を撫でながら、ラマは苦笑いをする。それに続けて
サラボナが言った。

「そうそう。強い魔法だから、一日の魔力が無くなっちゃうのよ。」

その上、体力まで失ってしまう嫌なオマケ付き」

「あの女の動きを止めたとしてもなあ」

まだ男の方が残っていると、ラマは言いたいらしい。
そういえば片割れの男は、未だに入り口付近で突っ立ったままで、
不気味なほど行動を起こさない。

「とにかくスローモーションを使うから、マアヤは何とか逃げ回ってくれ！」

「わ、分かったわ！」

そのラマの言葉を信じて、マールリアは広い会議室の中を走り出した。

「待ちなさいっ！ 逃がさないわよっ！」

女は鎌を引き抜いて、マールリアの後を追いつめた。

走行中、マールリアの背後からビュンビュンと風を切る音が聞こえた。恐らく女が、鎌をやみくもに振り回しているのだろう。

（ひゃあああ、こけたら一巻の終わりだわー！！）

心の中で喚きながら、マールリアは無我夢中で駆け走った。

その間にラマは両手のひらを前に出して、走っている女へ狙いをつけた。

「スローモーションッ！！」

叫び声と同時に、ラマの手のひらから銀色の光線が素早く伸びて行った。ところが、光線は女が通り過ぎた壁に空しく当たった。

「もう一回、スローモーションッ！」

手のひらを女に合わせて動かし、ラマは銀色の光線を飛ばした。今度はマールリアと女の間を抜けていった。

ラマはぐつと歯を食いしばり、再び手のひらを女に合わせた。

「くそっ、もう一回っ……イテッ！」

隣で見ていたサラボナが、ラマの頭をこづいた。

「外してんじゃないわよっ！！」

「あんなに力一杯走ってたら、あたんねーよっ！」

ラマは両手で頭をさすり、反発的な目でサラボナを睨んだ。実のところ、ラマは素早く動き回っている相手に魔法を当てることが、物凄

く苦手であつた。

「バカッ！ あんたが逃げ回れって言つたんでしょっ！？」

肝心な時に当てないと、あんたはただの無能よ！ このへっぽこっ！」

サラボナはラマの背中をバシバシと叩きながら、ずけずけと痛い言葉を吐き出す。

「うるせー！ マーヤへ当たらないように調節するのが難しいんだよ！」

「それは下手なのを言い訳しているだけでしょっ？！」

またしても始まつた。二人には危機感という物が無いのだろうか。ルイザはルイザで腰を抜かして、キヤーキヤーと休みなく叫んでいる状態だ。

「もー、もーっ！！ こんな時にケンカなんてしないで、早く何とかしてよー！」

まったく頼りにならない皆に、マールリアは走りながら悲鳴混じりの声で訴えた。

後ろからは女が、マールリアに狙いを定めて絶え間なく追い続けて来ている。この状況をどうしたら良いものかと悩みながら走っていると、突然ぴんとマールリアは閃いた。

外ならば、魔法を遠慮なく使用しても大丈夫なんじゃないかと。

そして外へ飛び出しても、あの女だったら間違いなく自分の後を追ってくるはずだと。マールリアは心の中でそう断定した。

そうこう考えているうちに、女は勢いをつけて、マールリアの傍まで一気に追いついてきた。

「そろそろ止めを刺してあげないと可愛そうねっ！」

言い終わつた直後、女はマールリアの首に向かって鎌を横に大振りしてきた。

「きゃあっ！」

思わず目を閉じ、マールリアは頭を両手で押さえてしゃがみ込ん

だ。

鎌の刃は棚に飾っている花瓶に命中して、ガラスの割れる大きな音が鳴った。花瓶はバラバラに砕けて、お花と一緒に床へ落ちていく。

それを見たサラボナが、僅かに頬を引きつらせた。部屋をやりたい放題に荒らされて、抑えていた怒りが爆発したようだ。

サラボナは自分の胸元に片手を差し入れてタロット・カードを取り出し、四枚のカードを指の間に挟んで胸の前へ構えた。

「誰が修理代出すと思ってるのよおおーっ!!」

サラボナはドスの利いた怒り声を放って、同時に腕を振ってカードを投げつけた。

飛ばされたそのカードは瞬く間に飛んで行って、全て女の背中に突き刺さった。

「うっ!」

女は短い呻き声をあげて動きが停止した。サラボナの投げたカードは武器専用で、刃物の様に鋭く、硬い作りになっている。

「今だっ!! スローモーション!!」

ここぞとばかりにラマは両手を前に出して、止まっている女に目掛けて銀色の光線を放った。

同様に、マールリアも絶好のチャンスだった。この隙に女から四つん這いで離れて、裏口へ向かって走っていった。

その時である。ここまで微動だにしなかった男が、いきなり持っている杖を胸の前で回転させて声を発した。

「マジック・ミラー!!」

すると、たちまち女の前に巨大な透明の壁が現れた。

ラマが放った光線はその壁が受け止めて、衝撃音を鳴り響かせた。それだけならまだ良かったが、光線は向きを変え、斜め下に伸びて三人の元へ戻ってきたのだ。

三人は一体何が起きたのか判断ができず、そのまま立ちすくんでしまった。

「きゃっ！」

サラボナは悲鳴を上げて、ビクンと大きく身体を震わす。なんと戻ってきた光線はサラボナの足元に当たってしまった。

「えええーっ！！ そんな魔法ありかよっ！！」

「う、うっそーっ！」

ラムとルイザは信じられないものでも見たように、顔をこわばらせて驚いた。

しばらくすると、その透明の壁は霧のごとく薄くなっていき、跡形も無く消え去っていった。全てが、わずか数秒の出来事である。

女は背中に刺さっているカードを抜き終わった後、男の方を向いて微笑んだ。その微笑みぶりは、『この女もこんな顔するんだ』と思わせるような柔らかい表情だった。

「よくやったわ、ピース。」

私は娘の後を追うから、アンタはこいつらが下手な動きをしないように、ここで見張ってなさい。

少しでも齒向かって来たら、始末しても構わないわ」

女はそう言い残して、マールリアの向かった方へ走って行った。

「やつ、やばい……、マーマヤが！」

去って行く女の背中を見て、ラムは焦りを感じ始めた。

本当は、すぐさまここを飛び出して女を追いかけてたい。しかしながら、か弱いルイザと、動けないサラボナを置いて行くなんて決して出来ない。

今はもう、いつもの様に調子に乗って冗談を言う余裕はまるでなかった。自分がこの場を何とかしなければと、ラムは極度の重圧感で胸が埋めつくされていた。

ここにきてようやくルイザが立ち上がり、両手を伸ばして二人の傍まで駆け寄ってきた。

「サラボナッ！ 大丈夫ー？！」

「うっ……、動けないわ……！」

サラボナは足を上げようとしているようだが、思い通りに動かずに、顔をしかめて苦しい声をあげた。

その辛そうな姿にラムはひどく罪悪感を感じ、サラボナに向かって手を合わせて頭を下げた。

「すまん、サラボナ！ しばらく経つと魔法の効果が切れるから、もう少し我慢してくれ！」

「……大丈夫、ラムのせいじゃないから。それよりも、すぐにこいつを倒して、私達もマーヤの後を追うわよ！」

「了解！」

ラムとルイザは、首を縦に振って、サラボナの言葉に同じた。

女からを見張っておくように言われた男は、別に襲ってくることもなく、その場でじっとたたずんでいる。でももしここから離れたりしようものなら、すぐに魔法が飛んでくるのだろう。

「よーしっ！！ マーヤを助けに行くんだから、私も本気を出すわよー！！！」

ルイザは急に大きな声を出し、両手のひらを前に出して魔法を使うポーズをした。さっきまでの怯えっぷりはどこえやら、彼女はすっかり強気な顔つきになっていた。今頃、親友の身に危険が迫っていることを感じたのだろう。

「おい、ルイザちょっと待て！」

ラムは、ルイザの片腕を握って魔法を使うのを止めようとした。ところが、もう遅かった。既にルイザの両手のひらの前には、片手で握れそうなほどの小さな銀色の光の玉が作られていた。

「えーいつ！ ムーン・ライトオー！！！」

甲高い声で叫んで、ルイザは小さな光の玉を男に目掛けて飛ばした。

「マジック・ミラー！」

先ほどと同様に、男が杖を軽々しく回転させて、自分の前に大きな透明の壁を作った。そこに光の玉が激突し、派手な音を立てて二人の足元に飛んできた。

「うっきゃあ！」

「どわっ！」

二人は叫び声と共に、飛び跳ねて上手く避けた。しかし、ルイザだけ着地する時にバランスを崩して、べちゃっとうつ伏せに倒れた。「大丈夫か、ルイザ？」

ラムはかがんで、ルイザに手を差し伸べた。

でもルイザはラムの手につかまらず、ぶるぶると震えながら起き上がった。

「ま、まだまだ、これぐらいのことにくじけないっ……！ 私だつてやればできるんだから！」

強がった言葉を吐き捨て、ルイザは手のひらを前に出し構えて、まだまだやる気の姿勢を見せる。

「ルイザ、待てっ！」

ラムがルイザの肩に手を置き、揺さぶって止めるも彼女は聞く耳を持たない。

「えーいつ！ やあっ！ やあっ！ やあっ！」

ルイザは大声を出しながら、小さな光の玉を連続で撃ちまくった。でもやはり、男はガラスの様な壁を作り上げる。ルイザの撃った小さな光の玉は、バシバシと壁に当たって全て反射してきた。

とうとう我慢ができなくなり、ラムは拳を高く上げてルイザに怒った。

「コラー！ お前には学習能力が無いのかっ！」

と、そうしているうちに小さな光の玉が、四方八方から戻ってきた。

「きゃあああっー！」

うるさい悲鳴をあげながら、ルイザが頭を両手で押さえて、左右にぴよんぴよんと飛び跳ねた。

ラマも身をひるがえしながら、次々と襲い掛かってくる光の玉を避けていった。

「キャッ！」

ふいに近くから悲鳴が聞こえた。戻ってきた魔法の一つが、サラボナの顔に激突したのだ。

ラマとルイザは、身動きが取れない彼女の存在を今思い出したかのように、そちらの方へ視線を移した。そしたらサラボナは半目になり、ゆらつと上半身を後ろに反らせて、そのままゆっくり後ろへ倒れていった。

床が地響きして、ラマとルイザは声を合わせて叫んだ。

「サラボナッ！！」

しかし、その声はもう届かないようだ。サラボナは仰向けの状態で、まったく反応を返してこなかった。

ラマとルイザはお互いに目を合わせて、口元を引きつらせる。：

…それから、何とも言えぬ沈黙が少しの間続いた。

その沈黙を破ったのはルイザだ。ルイザは足を大きく開いて、キツと攻撃的な視線で男に指を差す。

「あんたっ！ よくもサラボナをやってくれたわねっ！ もう許さないんだからっ！」

まるで開き直ったルイザのその態度に、ラマは呆れて腕を組んだ。「いや……、正確に言うと、ルイザの魔法にやられたんだけどな…

…」

「ラマちゃんどうしたらいいのー？ 魔法効かないじゃないー！」
ころりと泣きそうな顔に変わって、ルイザがラマの腕にしがみついた。もはや、さっきまでの強がった姿はどこにも無い。

ラマは自信ありげな顔で笑うと、片手で拳を作り、もう片方の手のひらでそれを受け止めた。

「ここは俺に任せろ！」

ラマは少し前へ歩いて、手のひらを前に伸ばし、魔法を使う構えをした。

その行動を見て、ルイザが慌てた声をラマの背中にかけてくる。

「ラ、ラマちゃん、またはね返される——」

そのルイザの言葉をさえぎるように、ラマは魔法名を口にした。

「スローモーシヨンツ！」

「何度やつても同じだ。マジック・ミラー！」

馬鹿の一つ覚えみたいに、男は杖を回して同じことを繰り返す。

ラマはその姿を見て、しめしめとしたり顔で笑いながら、猛ダッシュをして男に接近した。

「——魔法が効かねえなら接近戦だろっ！！」

腹の底から大声を出し、ラマは右腕を大きく振り上げて、男の頬をありったけの力で殴りつけた。

「うわっ！」

殴った鈍い音と共に、男は叫び声をあげた。男は杖を手から離し、バランスを崩してそのまま後ろに倒れた。その落ちた杖は回転して、カラカラと音を立てながら床をすべっていく。

直ぐにラマは大きく飛び込み、仰向けに倒れた男の腹の上に馬乗りになった。

「バーカッ！ 魔法を使うふりしたんだよっ！」

ラマは左手で男のローブの胸ぐらを掴み、拳を大きく振ってもう一発頬を殴った。

「いっけー！ やっちゃえー！！」

こちら側が優勢になった途端、ルイザは宙で腕を振って殴るような仕草をしながら、威勢よく応援を始めた。彼女もなかなか調子のいい人間である。

次に殴ろうとラムが右腕を高く上げた瞬間、男は顎を少し上げてフードの中から赤い目を覗かせた。口からは一筋の血を流し、憎々しい目でラムを刺すように睨みつける。

「……死ね」

男は、ぼそりと聞き取りにくい声を漏らした。

その声でラムは気づいた。男は右手に、いつの間にか黒い光を集めている。すかさず男は素早く腕を伸ばして、それをラムのお腹にぶつけてきた。

「ダーク・ライトツ！」

「わっ！」

黒い光に直撃し、ラムはお腹を押されて、腕と足を伸ばしきったままの状態で勢いよく飛ばされた。

——ドンツと衝突音が響いて、ラムはテーブルの天板のふち部分に背中を激突してしまった。

「ぐっわっ……！」

ぐぐもった声をあげ、ラムは前へ崩れるように倒れた。背中を強く打って、激しい痛みと呼吸困難に襲われる。

「ラムちゃんっ……！」

ルイザが泣きそうな声で叫んで、ラムに駆け寄った。

「ごぼっ……。くそっ……」

ラムは苦痛で顔をしかめ、両手を床につけてゆっくりと上半身を起こした。完全にこちらの流れだと思って、止めを刺ささずに油断していた自分に腹立たしく感じていた。

「動かないで！」

そう言ってルイザがラムの横にしゃがみ込み、手のひらで背中をなでた。

「……すまん、ルイザ。……悪いけど、少し時間を稼いでくれないか？　すぐ復帰するから」

俯いたままラムは言った。女の子にこんなことを頼むなんて情け

ないけれども、今はまだ身体がいうことをきいてくれない。それに加えて、ラマは少しずるい勝ち方を思いついていた。

ルイザはいささか不安そうな表情を浮かべていたが、そのラマの頼みに頷いた。

「わ、わかったわ!」

ルイザは立ち上がって男の方を向いた。

すると倒れていたはずの男は、とつくに杖を拾っていて、また見張りの体勢に戻っている。

この男……、鋭利な刃物を持っていないところが唯一の救いだが、それでも戦うことを知らない平凡な女の子のルイザにとって、非常に恐ろしい相手だった。だけど、今自由に動けるのはルイザしかない。もう自分が戦うしか選択肢は無かった。

(怖いけど、時間を稼ぐだけだから大丈夫……、私でもやれる!)

気持ちを整えるために、自分に自分で言い聞かせる。

ルイザは傍にある椅子の背もたれを、ぎゅっと両手で握って頭上に持ち上げた。魔法が効かないとなると、これ以外に方法はない。

「やあああーっ!!」

恐怖を紛らわすためにルイザは大声を上げ、男の方へ駆け走って、椅子を力一杯振り降ろした。

瞬間、ガキンツと木と木がぶつかる音が鳴り響いて、男から杖の柄で椅子を受け止められた。

ルイザは唇を噛み、両腕に力を入れて椅子を前に押した。しかし男の方も片足を一步前に出して、杖を押しやってくる。お互い一歩も引こうとせず、床を蹴りながら二人は必死に押し合いを続けた。

ぎり……、ぎり……と、木と木が擦れる嫌な音が鳴る。二人の力は互角なのか、この形から動く気配が一向になかった。

「はあ……、はあ……。やつ、やっぱり私には……無理だよおー……」

疲労のせいで力が抜け始め、ルイザは泣き声で弱音を吐いた。そ

の時――、

「ルイザ、よくやったっ！」

ついさっきまで、ルイザの後ろに座っていたはずのラマの聲が、急に前方から聞こえてきた。

そこに目を向けると、いつの間にやら男の背後にラマが回って立っている。

ラマの声を耳にした男も、びっくりと身を動かして動揺した。ルイザとの押し合いに気を取られすぎて、男はラマの行動まで目がいかなかったようだ。

ラマは直ぐに男の背中に右手のひらを伸ばして、今残っている魔力を全て放った。

「くらえーっ!!」

叫びと同時に、手のひらから銀色のまばゆい光が輝く。

その瞬間、男の全身が微かに痙攣して、両手を上げたまま動かなくなかった。

「……！ か、体が……！」

男が驚いて絶句する。

勝利を確信して、ラマはニヤリと笑った。

「へへっ、ストップの魔法だ。ルイザ今だ、やれっ！」

「りょーかーいっ！ やあああっ!!」

ルイザは杖とクロスさせていた椅子を一旦後ろに戻し、渾身の力を振り絞って縦に振った。

ガッンツと凄まじい衝撃音が部屋中に響いて、椅子が男の頭に振り落とされた。

「うっ！」

うめき声をあげ、男は両腕を上げた格好で後ろに倒れていった。

落ちた杖がコロコロと横に転がっていく。

それから男は起き上がってくることはなかった。

ルイザはすがすがしい顔で笑って、椅子を床に置いた。

「——やったあ……！」

あの魔法を使ったことにより、大きな疲労感に襲われて、ラムはぐったりとその場にへたり込んだ。

ルイザがラムの横にかがんで、心配顔を覗かせる。

「ラムちゃん大丈夫？」

ラムは顎を少し上げて、疲れた表情でルイザの目を見た。

「ああ……、いつものことだから大丈夫。でも、だれている場合じゃないな」

よろめく足で無理やり立ち上がり、ラムは倒れている男に指を差して言葉を続けた。

「ルイザ、急いでこいつをロープで縛ってくれ。それからサラボナを起こして、マーヤを助けに行くぞっ！」

「うん！」

ルイザは力強い返事をした後、行動に移した。

*

その頃、裏口から外に出たマールリアは、暗い建物の間をでために走っていた。

道なんて全然分らないけど、とにかくマールリアは一生懸命足を進ませていた。なぜかという、なおも後ろから、しつこく女が追って来ているからだ。

辺りを見回しても、人ひとり通っていない。そういえばここが、人気の無い路地裏だったのをマールリアは思い出した。だが、たとえ人が通って居たとしても、この状況から救ってくれる人など決して居ないだろう。

マールリアは走りながら、後ろの様子を伺った。すると、女がどんどん間合いを狭めて来ている。かなり足が速いようだ。

「えいっ！」

マールリアは手のひらから、一瞬で作ることができる小さな銀色の光の玉を飛ばした。

その小さな光の玉は、女の腹を目がけて飛んでいったが、女は横飛びをして軽々と避けてしまった。

マールリアはぎりつと奥歯をかみしめ、再び前を向いて走り続けた。

（外に出たのはいいけれど、だめだわ……。こうも全力疾走していると、集中して大きな魔法が使えないっ！）

一息入れる暇もなく、足は完全に疲れきっていて、マールリアはどうしていいか頭も回らなくなってきた。

（どうしよう……。どうしよう……。何か良い方法は……。！）

きよろきよろと首を回して何かを探しながら走っていると、少し先に曲がり角が見えてきた。

「そうだっ！」

マールリアは急いで角に曲がった。そして立ち止まり、まず荒い呼吸を整えた。

次に両手を前に出し、魔力を込めて光を集め始めた。そうすると両手のひらの前に、銀色の光が徐々に集まってくる。マールリアが思いついた作戦は、ここで待ち伏せをして、女が角を曲がった瞬間に不意打ちをするという、ごくごく単純なものだった。

あつという間に魔法の準備が整って、銀色の光は人間と同じぐらいの大きさになっていた。後は女が来るのを待つのみだ。

マールリアは気迫のこもった面持ちで、手のひらを出した状態で待ち構えた。

こらした耳から、女の走る足音が聴こえてくる。それが次第に大きくなってきて、ついに女が角を曲がってきた。

（来たっ……。！）

マールリアは大きな銀色の光の玉を両手のひらで押して、声を張り上げた。

「ムーン・ライトツォー!!」

女は飛んできた大きな光の玉を見て一瞬身を動かしたが、人間離れした大きなジャンプをして魔法を飛び越えた。

「——えっ!」

マールリアはあっさりと自分の魔法が避けられて、つい高い声を漏らしていた。

ジャンプした女は、空中で大きく鎌を振り上げて、マールリアに目掛けて降りてきた。

その時、マールリアは金縛りにあつたように立ち尽くし、飛んでくる女をただただ見つめていた——。

ザンツと身を切る音が聞こえて、鎌の刃がマールリアの左肩に振り落とされた。

「あうっ!!」

マールリアは襲いかかる鋭い痛みに、たまらず悲鳴をあげた。女は薄笑いをして、鎌の刃をマールリアの左肩から外した。その刃には、マールリアの血がべっとりと付着している。

マールリアはガクンと崩れ落ち、そのまま地面に両膝をつけた。

「うっ……、うああ……」

左肩には激痛が走り、苦悶の表情で呻き声を漏らす。

（い、痛い……、もう……だめ……、走れない……）

全身からは、脂汗が気持ち悪いぐらいに吹き出している。マールリアは傷口付近の肩を右手で握って、そつと顔を上げた。

そこには、満足げな笑みを浮かべた女の顔があつた。やっと、目標の獲物を仕留めることができるという喜びで満たされた表情だった。それを見て、マールリアは初めて『死』という恐怖に直面し、ガタガタと身体が震え始めた。

（殺される……! 殺される……!）

女が両腕を動かして、ゆつくりと鎌を上げ始めた。

「フフフ……、死ねっ、フローラインの娘っ!」

なす術も無く、マールリアは震えながら、高く振り上げられた鎌を見つめていた。

抵抗するにも、痛みで腕に力が入らない。もはや自分の人生はここまでだ……、と頭の中で考えていた。

視線を上に向けた瞬間――、ある物が目に映ってマールリアは、はつとした。

建物の三階程の高さの位置にある窓から、向かい側の建物の窓へと長いロープが張っており、そこに沢山の洗濯物や布団が干してある。その光景がこの通りにはずっと続いていた。

マールリアは目を大きく開いた。

（――これだっ！）

最後の賭けだった。直ぐにマールリアは傷ついていない腕を上げて、空に向かって小さな銀色の光の玉を無茶苦茶に数発撃ち放った。「どこに撃っているの？ 恐怖で頭がおかしくなった？」

女が、マールリアを馬鹿にしたような口調で言い放った。その時――

ふわり……。

丁度、女とマールリアの間に白いタオルが一枚落ちてきた。

「えっ!？」

女が、ぎょつとして顔を上げた。

はらはらと服や、タオル、下着などが次々と舞い落ちてくる。マールリアが撃った魔法は、どうにか命中してロープの数箇所をちぎったようだ。

（やつ、やったあ。命中!）

マールリアの瞳に希望の光が輝いた。だけど当たったからといって、うかうかしてられない。すぐに気持ちを切り替えて、マールリアは出した両手のひらの前に銀色の光を集め出した。女は、落ちてくる洗濯物に気が取られていて気づいていない。

と、大きめの薄い布団が、バサツと女の頭上に落ちてきてた。

「ちよっ、ちよっとなのよ、これはっ!」

視界を失った女は慌てて、布団を取り除こうと鎌を投げ捨てても

がいている。

その瞬間マールリアは両手を押し、大きな光の玉を思いっきり女にぶつけた。

「今度こそ、当たれー!!」

至近距離で魔法を撃たれた女は、無論、避けることが出来なかった。

「ギャアッー!!」

女は大きな光に直撃して、辺りに響き渡るような叫び声を上げた。マールリアは正座をし、女が光の玉に押されて行く様を見開いて見守った。だが女は、途中で光の玉を押すように両足に力を入れて、その場で踏み留まろうとしていた。物凄い形相をして、必死に一步前へ進もうとしている。

その光景を見て、『なんて凄い人なんだ』とマールリアは息をのんで驚愕した。

ほどなくして光の玉は消え去り、その途端女は糸が切れたみたいの前に倒れた。

（もう起き上がってこないで……！　お願い……！）

マールリアは痛む左肩を右手で押さえて、うつ伏せに倒れている女を祈るように見つめた。

女は体をビクビクと動かして、痙攣をしている。

「うつ……、うつ……」

女は呻きながら、四つん這いになった。手足はふるふると小刻みに震えて、もう体を支えているのがやつの状態だった。

「くっ！」

マールリアは慌てて立ち上がり、両拳を胸の前に出して身構えを取った。だが次の瞬間、女はガクツと両腕の力が抜けて、地面に顎を付けた。

それから、女は恨みのこもった瞳でマールリアを睨んでいたが、完全に力尽きた様子でもう起き上がって来なかった。

（終わった……、助かったんだ、私）

何とか死を免れて、マールリアは安堵の溜息を吐いた。

ここでいきなり女が、口の隙間から震える声を出して、うわ言のように呟き始めた。

「フロー……ライン、許さ……ない。許さない……。私の……家族を、奪ったあいつを」

「あっ……」

その弱々しい赤い瞳に、マールリアは見覚えがあった。

彼女は牢屋の中にいた、——そう、皆で助け出したあの時の裏月星人だった。

（ああ……、今頃気づくななんて……）

マールリアは愕然として、両腕の力が抜けた。

彼女は十年以上牢獄で過ごし、更に家族も殺されたみたいだ。どんなに悔しいだろうか……。

暗い闇の底へ突き落とされた彼女の心中は、マールリアでは計り知れない。

この時、胸が締め付けられる様な苦しい罪悪感が、マールリアを襲った。

マールリアは一步一步進んで、女の前にかがみ込み、両手で女の両腕を持つて上半身を起こした。

意外な行動を起こすマールリアに、女は驚いて目を見開いた。

「ごめん……、ごめんね……」

女の瞳をじつと見つめ、マールリアは小さな声で、ぼつりと言った。あの時と同様に、他の言葉が思い浮かばなかった。

「お母様が酷いことをして、ごめんね……」

「……」

女は何も声をあげない。彼女からすると、マールリアは偽善者と思われているかもしれないだろう。だけど、マールリアは謝らずに

はいられなかった。酷いことをした母親の代わりに……。

マールリアは女の首に両腕を回して、ぎゅっと抱きしめた。

「ごめんね……、ごめんね……」

マールリアは女の耳元で、何度も、何度もつぶやいた。

女は静かに目を閉じていった――。

＊

忘れていた傷の痛みが戻ってきて、熱く脈打っている。

マールリアは壁を背にして、横座りをしていた。自分の足で基地に戻らないのは、どこまで走って来たのか分からないのと、きっと皆が来てくれると信じていたからだ。

なるべく血が流れ出たしまわないように、マールリアは手で傷口を押さえていた。その手のひらには真つ赤な血が、ぞつとするぐらい付着している。……もしかしたら、このまま血を流しすぎて自分は死んでしまうんじゃないか。そんなことを、マールリアが頭の中でよぎらせていた時だった。

「マールリア――」

ルイザの甲高い声が、静かな路地裏にこだました。

はっとしてマールリアは、顔を横に向けた。すると、ルイザと、ラマと、サラボナが角を曲がって来ている姿が視界に入ってきた。

「み……んな……！」

マールリアはうつろな瞳で三人を見た。

皆はやっぱり来てくれた。マールリアの胸に大きな安心感が広がり、薄っすらと笑顔がこぼれた。

三人はマールリアの前で足を止めた。

「ふう、良かった、生きていた……！」

ラマが前かがみになって両手を膝に当てた。マールリアの姿を見て、本当に安心した表情をしている。

「ああああ、マールリアひどい傷っ！」

血だらけのマールリアの肩を見て、真っ青になったルイザが大声でわめいた。そこにサラボナが割り込んできて、ルイザを押しつけた。

「ルイザ、ちょっとどいて。治療の魔法を使うわ。マ―ヤは手を離して傷口を見せて」

それを聞いてルイザが、きょとんと驚いた顔をした。

「えっ、サラボナって治療の魔法使えるの？」

「うん、少しね。専門じゃないから時間が掛かるけど」

そう答えた後、サラボナは腰を下ろしてマールリアの肩に両手のひらを向けた。そしてそこから、淡い銀色の光を放ち始めた。

マールリアは、肩に温風を当てられているような温かさを肌に感じた。とてもゆっくりだったが、端の方から傷口がじわじわと塞がっていく。

「温かい……」

マールリアは目を細めて、傷が治るのをじっと見つめていた。

ラマが片膝を立てて腰を下ろし、マールリアに問う。

「あの女はどうなった？」

「あそこにいるわ」

マールリアが指を差し示した場所に、ボロボロに変わり果てた女がうつ伏せで倒れている。あれから女が動くことは一度もなかった。「死んでいるの……？」

怪訝そうな顔つきで、ルイザは静かに声を出した。

マールリアは首を横に振って言った。

「うつん、気絶しているだけ」

「どうする？ 今のうちにロープで縛っておくか？」

そう訊いたラマの肩には、輪に束ねたロープがかけられていた。

「いや、そのままでもいいわ……。あの子ね、この前私たちが助けた裏月星人よ」

「ええっ!？」

女のことを知って、三人は意外そうな顔を見せた。皆もマールリアと一緒に、あの女に気づいていなかったらしい。

「どうして助けてあげたのに私達を襲ってくるのよー！」

ルイザが目尻を上げて、怒った口調で疑問を投げかける。

「お母様から家族を殺されたみたい。それに監禁もされていたし……」

「そう……」

とサラボナが一言相槌を打った。そして、渋い顔で治療の魔法を続ける。

また、何ともいえない静かな時が流れ始めたので、マールリアは横に座っているラマの顔を見て尋ねた。

「ところでラマ達の方は大丈夫だったの？ あの男の人は？」

「ああ。あいつなら、ルイザが頑張ってくれたおかげで、何とかぶっ倒したぜ」

ラマが、ルイザに目を向けて合図を送るように笑った。あの腰を抜かして怖がっていたはずのルイザが何故だか誉められている。

今度はルイザが、さも嬉しそうに自分の顔に指を差して自画自賛をした。

「聞いてよマーヤ！ 私、大活躍だったのよ！ 止めだって私が刺したんだから！」

「へえー、すごいじゃない！ ルイザ」

マールリアは喜んで、顔一面に笑みを浮かばせた。あの後、何があったのかマールリアには分からないが、きっとルイザが真剣に頑張ってくれたのだろう。

しばらく経つと、肩の痛みが嘘のように消え去り、マールリアは左腕をぐるぐると元氣よく回して微笑んだ。

「すごい魔法っ、もう傷が治っている！ ありがとっ、サラボナ！」

サラボナが立ち上がり、皆の顔を見て口を開いた。

「さあ、傷口も塞がったことだし、基地に戻りましょー！」

「うん」

全員返事をして立ち上がり、基地に向かって歩き始めた。

……マールリアは歩いている途中で足を止めた。首を後ろに回し、悲痛な表情で倒れている女を見つめ、そして前を向いて三人の後を追って行った。

*

会議室に戻ったところ、ラマとルイザが縛っていたはずの男の姿が、綺麗さっぱりと消えていた。

「いないねえ……」

ルイザがロープを拾い、ちぎれた切り口を見つめながら、残念そうな声を出した。男は意識を取り戻し、魔法でロープを切って既にここから逃げ出していたのだ。

「あのヤロー！ もう一発殴ってやろうと思ってたのに！」

ラマが、いまいましてな口調で吐き出し、殴る素振りを一発した。

「ラマ、いいじゃない。居たら居たで面倒なことになりそうだし。これで良かったのよ」

サラボナが、ラマの背中を軽く叩いて言った。

「そう言われればそうだな」

「あれだけコテンパンにしてやったから、あの二人も二度とここへは来ないよねー！」

拳を突き上げながら、楽しそうにルイザが飛び跳ねる。

「それにしても本当に危なかったわ……。あの洗濯物がなければ、今頃死んでいたかもしれない」

マールリアは両手を腰にあてて、しみじみと一人で語った。

今回、皆は混乱に陥ってまとまりがなかったが、何はともあれ全員無事で本当に良かったと、マールリアは心から思った。

そんなことを考えていたら、厳しい顔つきのサラボナがマールリアの真正面にやって来て、深刻な声でこう切り出した。

「あのねマーヤ。今日みたいな怖いこと、これから頻繁に起こると思うの。」

それでもあなたはツイン・マジックに残る？」

当然、答えは決まっている。

マールリアは気づかぬ間に、ツイン・マジックの皆が大好きになっていたのだ。それ所か、かけがえのない大きな存在に変わっていた。

マールリアは迷いもなく、強い口調で答えた。

「もちろん！ 今更、後に引けないわよ！」

それに皆と一緒に居たいから――。今の言葉にそう付け足そうと思ったが、照れくさくてそれ以上口にしなかった。

マールリアの意志を聞くと、サラボナは一気に穏やかな表情に変わった。

「そう。じゃあ一緒に頑張りましょうね！」

「しかし、ひどい部屋になったもんだなあ……」

ラムが後頭部に両手を組み、部屋を見渡して呟いた。

女が空振りした鎌のせいで床には大きな穴が開き、花瓶は割れ、椅子は真つ二つと荒れ放題だ。ついでに外の扉も破壊されている。

「ああああ……。無駄な出費がああああ……。」

サラボナが大声で嘆き、頭を両手で押さえて涙をぼろぼろと流し出した。皆は『また始まった』と、他人事のような目でその姿を眺める。

マールリアは、泣いているサラボナの肩をポンと叩いた。

「サラボナ。私の部屋に高そうな壺があるから、今度それ持つてくるね！」

「ええっ！？ 本当につ！？」

サラボナは勢いよくマールリアの方を振り向いた。その瞳には明

るい光りが灯っている。

「うん。質屋に売ったら、きっといい金額になると思っわ」

サラボナは泣き笑いをし、両腕を伸ばしてマールリアにぎゅっと抱きついてきた。

「マールヤ大好き……！！」

【第六話・完】

薄暗い路地裏でマリラは仰向けのまま額に片腕を置き、建物の隙間から見える空を眺めていた。

雲ひとつ浮かんでいない、綺麗に澄み切った青空。身体全体にやわらかい日差しが降り注ぎ、ぽかぽかと暖かさを肌に感じる。まるで、太陽が惨敗した自分を慰めてくれているようだった。

（さすがフローラインの娘……。ほんのわずかな間に、あれほどの魔法を作り上げるなんて――）

マリラは、敵ながら物凄い魔力を持つ彼女に感心していた。不思議なことに、負けた悔しさや惨めさは胸に湧き上がってこない。それは最後に『あの彼女の行動』が、あつたせいだろうか？

「マリラ、無事が……？」

ふいに、すぐ傍から男の声が耳に入り、マリラは起き上がってあぐらをかいた。見ると、ビースがマリラの横で片膝を立てて座っている。相変わらず表情は見えなかったが、口元に流した黒い血の痕が残っており、それで彼も惨敗したことがうかがわれる。

「ビース、あんたもやられたの？」

「ああ」

マリラの問いかけに、言い訳することなくビースは答えた。

思った通りの答えが返ってきて、マリラは落胆して肩を落とした。本来のマリラならやかましく怒るところだが、自分も同様に負けてしまったことでビースに文句一つ言えやしない。結果、二人共々フローラインの娘と、あのわけの分らない連中にやられてしまったわけだ。

だが、マリラはこれしきのことと断念するわけにはいかなかった。家族の仇を討つと固く誓い、グラス達の分まで頑張ってくると約束をしたのだから。

決心したからには、何が何でもやり遂げなくては自分のプライドが許さなかった。

「このままじゃ絶対に終わらせないわ。ビース、一旦城に戻って策を考え直すわよっ!」

マリラは立ち上がって、落つことした二股帽子と鎌を拾った。次は正面からぶつかるとのを避け、意表について攻撃を仕掛けてやる。マリラはそう思ったのだ。

ビースも続けて立ち、マリラに顔を向けてこう伝えた。

「マリラ。あいつら、ただの何でも屋じゃないぞ。身動きを封じる魔法を使う奴がいる」

その話を聞いて、マリラは無意識のうちに顔を引きつらせた。

「うそ……、そんな魔法がこの世にあるの……? ヤバイじゃない」
これは、ますます作戦が必要なことがマリラにも自覚できた。

*

クラルカッド城に戻った二人は、キャンドル王女とジュラン大臣に結果報告をした。そしてその後、マリラの部屋で作戦を練ることにした。

「さて、どうしたものかしら……」

マリラはベッドの上で腕と足を組み、普段使うことがない脳を精一杯働かせた。しかし猪突猛進タイプのマリラには、奇襲の戦法なんて全くと言っていいほど頭に浮かび上がってこない。

(こんな時に策士でもいてくれたらいいのに……)

そう願っても、あいにく頭が切れる者などこの城には存在しなかった。

ビースの方は俯いて腕を組み、壁を背にして立っている。彼は口を堅く閉じていて、いつまでも開こうとしなかった。

そうやってしばらく二人が考えていると、外の通路からドタバタ

と慌しく走る足音が近づいてき、やがてこの部屋の扉が大きく開かれた。飛び込んできた者はグラスだ。ピンク色の髪はボサボサに乱しており、肩を上下に動かしながら、荒い息と声を吐き出す。

「はぁ、はぁ……、マリラ、帰っていたのね！」

「何よ、グラス。騒々しいわね！」

マリラは顔を斜めに傾けて、邪魔者を見るような目でグラスを睨んだ。考えを絞っていた最中にいきなり割り込まれて、やや機嫌が悪くなったのだ。

グラスがマリラの無事を確認するように、全身を見つめながら歩み寄ってくる。

「マリラがやられて帰ってきたって聞いて、飛んできたのよ！」

そう言われて少し耳が痛かったが、マリラは何でもないふりをし、ツンと横を向いた。

「フン、ちよつと油断しただけよ！ 次こそは決着をつけて見せるわ！」

そのいつもと変わらないマリラの様子を見て、グラスは安心したらしい。肩の力を抜いて、ふうと大きく息を吐いた。

しかし、これだけで出て行けばいいものの、グラスは隅に立っているピースの方をちらりと見て、いらぬ言葉まで吐き始めた。

「ピースだったっけ？ あんたさあ、一般人にやられたんだって？ ざまあないわね。」

そのくせ、よくのこのこと城に帰って来れたものね？ 私だったら恥ずかしくて戻れやしないわ！」

グラスは意地悪そうにクスリと笑い、さげすんだ目付きでピースを眺めている。『さあ、その口からどんな言い訳が飛び出してくるの？』とでも言っているかのような顔ぶりだ。このことから、グラスがピースに反感を抱いているのは明らかだった。

しかしそのピースはというと、耳がついているのかと疑問を感じるぐらいに全く反応がなかった。

当然のごとく、グラスがピクリと片方の眉を突っ張らせて、苛立ちをあらわにする。

「ちよつとお……、無視？ 何とか言ったらどうなの？」

たった一度無視されたからといって、グラスも食い下がらなかった。くると背中を向けて、なおも嫌味口撃をチクチクと続ける。

「……大体さあ。側近を任されたくせに、マリラをこんな目に遭わせてどういふつもりなの？」

最初からあなたには無理な仕事だったんじゃない？ 私の方が側近に絶対ふさわしいと思うわよ？」

と、ここで急にビースが僅かに顔を上げて、ぼそりと低い声を出した。

「……お前、うるさい」

「なっ、何ですって!？」

グラスが歯を食いしばり、ギョーンと勢いよく振り向く。

「たかが兵士の分際で、この私に向かつて『お前』ですって?!」

私は大臣の妹なのよ?!? 『グラス様』と呼びなさいよ!! 『グラス様』とっ!!」

ビースに指差しながら、キンキン声でグラスは偉ぶった言葉を言い放った。

「……グラス。アンタ、うるさい」

今度はマリラだった。その騒音に辛抱たまらず、つい口を挟んでしまった。

するとグラスは瞳をウルウルと潤ませて、小さく震えだした。

「うつ……、うつ……、マリラまでヒドイわっ!!」

自分の味方だと思っていた人からキツイ言葉を投げられて、ショックを受けてしまったのだろう。グラスは両手で顔を覆って、わんわんと泣きながら部屋を出て行ってしまった。

「まったくあの子ったら……。自分が側近に選ばれなかったからって、くだらない八つ当たりなんかして……」

そう呟いて、マリラは深い溜息を吐き出した。

それからマリラとビースは頭を切り替えて、共に意見を出し合いながら悩み続けた。けれども、目ぼしい案は何も出なかった。これはもう、お手上げ状態か？

マリラは歯がゆくなり、自らの髪を両手でくしゃくしゃと掻き乱した。

「そういえば――」

ビースがおもむろに声を発した。

「あ？」

動かしていた手を止めて、マリラはビースを見た。

「何故、何でも屋にフローラインの娘がいるんだ？」

マリラは、ぽんつと拳を手のひらに叩いた。

「そう、それよそれ！ 私も変だと思っていたのよ。一体あんなところは何をしているのかしら？」

「……偽者じゃないのか？」

「いや、あの魔力は間違いなくフローラインの娘よ。そこら辺にいる人達と比べ物にならなかったわ」

首を横に振りながら、マリラはキツパリと断言した。

「少し奴らを探ってみるか……」

言葉少なに言って、ビースは顔を上げた。

「さすがに二日間も部屋を空けている訳にもいかないから、今日はもうお城に帰るわね」

あの裏月星人の襲来騒動が終わって一息ついた頃、マールリアは皆に挨拶をして部屋を出ようとした。そしたらサラボナが、こちらに手を伸ばして引き止める。

「——ああ、ちょっと待ってマァー！」

サラボナは奥の部屋にパタパタと走って行き、程なくして戻ってきた。そしてマールリアの肩に薄茶色のポンチョをそっとかけて、優しく微笑みかける。

「はい、これ。そんな服じゃ、街中で目立つちゃうでしょ」

肩の斬られた跡形が、ポンチョによって覆い隠された。

「……ありがとう、サラボナ」

マールリアはサラボナに微笑み返して、感謝の意を伝えた。

マールリアは裏通りを進んでいく。——頭上には、例の洗濯物達が風でヒラヒラとはたみいていた。生活感の溢れたのどかな光景。こんな所で、女との逃走劇が繰り広げられていたなんて、とても信じられなかった。

大通りへ抜けると、道の中央を走っている馬車達や、歩いていく人々の姿が見え出した。いつもと何も変わらない日常である。

（サラボナは優しいなあ……。お姉さんってあんな感じなのかな）
マールリアはやわらかい生地のパンチョを撫でながら、サラボナのことを想って温かい気持ちに浸っていた。彼女の優しさに触れていると胸に安心感が広がり、思わず自分の姉のような錯覚に陥ってしまう。

そんな時——、

「おーい！ マーヤー！」

その呼び声でマールリアの足が止まった。声の方へ向くと、ラムが後ろから片手を上げてチンタラと追ってきている。やたら辛そうに走っているのは、あの魔法のせいなのだろう。

マールリアの前まで辿り着いたラムは、上半身を前に曲げて苦しそうな呼吸をした。

「はぁ……、はぁ……」

「どうしたのラム。今日は疲れているんでしょ？ 無理しないで」
ラムは顔を上げ、マールリアに目を合わせて息が混じった声を出した。

「あのさっ……、肩はもう大丈夫なのかっ？」

「もう平気よ？ ほら」

マールリアが腕を回して完治しているところを見せたら、ラムの表情に安堵の色が浮かんた。

「そっか……。良かった」

「だから心配しないで」

大丈夫、大丈夫と笑顔でマールリアは手のひらを振った。

（……もしかしてそれを訊きに、ここまで来てくれたの？ さっきまで一緒にいたはずなのに）

でもマールリアは悪い気分はしなかった。むしろ嬉しかった。自分のことを心配してくれる人がいるというのは、とても幸せなことだ。

それっきりラムは口を閉ざしたままだ。何か言いたいことでもあるのか、マールリアの目をじっと見つめている。

（……？）

しばし変な間できる。次の言葉を待つてマールリアが黙っていると、ラムは少し視線を落として、妙に沈んだ声を出し始めた。

「……ごめんな、守ってあげなくて」

「えっ……」

「俺がもつとしっかりしていれば、マーヤもあんな目に遭わなくて済んだのに……」

普段からは想像できないほど、ラマは元気がなかった。あの時上手くマールリアを助けることができなくて、落ち込んでいるらしい。でもそんなラマの姿を見て、マールリアは「情けない」とこれっぽっちも思わなかった。なぜなら、この世に完璧な人間など存在しないからだ。自分では天才だと言い張っているが、ラマにだって不得意なこともあるだろう。

それにツイン・マジックのメンバーは、ラマ以外全員女の子だ。あんな大混乱の中、たった一人で皆を守るのは到底無理であろう。

（あの時、ラマは誰よりも重いプレッシャーを感じていたんじゃないかな……）

そう考えると、思わず同情心が揺さぶられてしまう。

そんなマールリアの心中を見透かしたのか、ラマは片手を向けて早口でこう言った。

「あつと、かばったりするなよ！ 俺はただ謝りたかっただけなんだ。だからこの話はこれで終わりっ！」

ラマは勝手に会話を終わらせてしまった。しかし、言わなければならなかったことをマールリアは思い出し、話を続けようと口を開いた。

「待つて」

「ん？」

「こちらこそ申し訳なかったと思っているの……。私のせいで関係ない皆を巻き込んでしまつて……」

マールリアはラマの顔を見ながら、静かにゆっくりと言った。

「いや……、俺はああいうの慣れているから」

小さな声でそれだけを言い、ラマは頭を掻く仕草をする。逆にマールリアから謝られて、少し体裁悪そうだ。

「そんな顔しないでよっ。ラマには全然似合わないわよっ」

気まずい空気をかき消すように、めいっばい元気な声を出して、マールリアはラマの腕をぽんと叩いた。

「どーせ俺は真面目な顔が似合わねーよ！」

彼らしいぶっきらぼうな物の言い方、そして子供のようなすねた顔。一瞬でいつものラマが戻ってきた。その姿を見ると、この上なく落ち着く。

マールリアは両手を後ろに組んで、その顔を見ながら言った。

「……こんな私だからさ、色々あるかもしれないけど……、これからもよろしくね」

「ああ、もちろん！」

マールリアの改まったお願いに、ラマは首を振ってしつかりと返事をした。

湿っぽい話に区切りがついて、ラマが別の話題を持ち出した。

「マーヤに伝えるのを忘れていたんだけどさ。」

明日大工を呼んで、基地の修理に取り掛かるから来なくていいんだってさ」

「そうなんだ。じゃあ明日は一日城の中かあ……」

マールリアはがっかりとした。これが当然の仕事なのだが、ひどく億劫に感じる。外の生活に慣れてきたせいだろうか。

マールリアが憂鬱な表情をしているとラマが、

「——でさ、マーヤ明日暇か？」

「ん？ えーと、これといった用事は無いけれど何かあるの？」

マールリアが訊き返すと、ラマの表情に明るい笑顔があふれた。

「じゃあさ、二人で動物園に行かないか？」

「行くーー!!」

急にマールリアが大声で即答したので、ラマは驚いて身を後ろに反らせた。

「び、びつくりした！ いきなり大声出すなよ」

「だって私、動物園に行ったことないから。ずーと行ってみたかったの！」

マールリアは拳を胸の前に出して、目を宝石のようにきらめかせる。

「じゃあ決まりだな！ 明日の朝、フローラインの像の所で待ってるからな！」

「うんうん！ 絶対行くから！」

マールリアは二つ返事で頷いた。

このように、二人は遊びに行く約束をして別れた。

「動物園、動物園！ 嬉しいな、明日が待ちどおしいな」
足取りが軽くなったマールリアは、気持ちよく鼻歌を歌い、スキップをしながら城へ帰っていった。この時マールリアの心の天秤は、ラマと出かけることよりも、動物園の方に大きく傾いていた。

*

ところが、不運なことが起こった。マールリアが部屋に戻って服を着替えている途中、急に空模様が悪くなり、一気に雨が降り出したのだ。マールリアは、雨が遠慮なく叩きつける窓にへばり付き、薄暗い外を眺める。

「うわー……。こんなに降って、明日大丈夫かなあ……」

黒い雲が覆った空を見上げていると、ノックをしてオリビアが部屋へ入ってきた。

「マールリア様、お帰りなさいませ。ご無事に戻られて何よりです」
「オリビア丁度良かったわ。明日晴れるおまじないを知らない？」

「えっ？ は、はい。古いおまじないでよろしければ……」

入って来るやいなや、いきなりマールリアから訊かれて、オリビアは驚き顔で返事をした。

オリビアが、窓の上から小さな太陽の模型をひもで吊り下げてくれた。——こうしていると、亡くなった太陽星人達が翌日晴れにしてくれる、とこの世界では言い伝えられているらしい。

「ありがとうね、オリビア。これで明日晴れたらいいなあ」

揺れ動く太陽の模型を見上げて、マールリアは微笑んだ。もっとも、おまじないなんて気休め程度のものだろうが、今のマールリアには大きな安心をもたらす心強い存在だった。

「マールリア様、明日もお出かけですか？」

小首を傾げながらオリビアが問いかける。

マールリアは良くぞ聞いてくれましたと言うように、ウキウキとはしゃぎながら話し始めた。

「明日ね、お友達と一緒に動物園へ遊びに行くの！ 初めてだから凄く嬉しくって！」

「お友達とお二人で、ですか？」

「ええ！」

「そのお友達って、……ひょっとして男性の方ですか？」

「ええ、そうだけど？」

オリビアの質問の意味がつかめず、マールリアは青い瞳をぱちぱちさせる。

そして、次にオリビアの口から出た一言は意外なものだった。

「……それはつまり、デートですよね？」

「——えっ！？」

一瞬、マールリアの脳に電撃が走った。動物園に夢中になっていて、ラマと二人きりで出かけることを今更気づいたのだ。その途端、照れと動揺が押し寄せてきて、急激に心臓が煽られる。

「ちっ、ちちち違うわよっ！！ ラマは社会見学のために私を連れて行ってくれるのよ！？

ぜぜぜ絶対にデートなんかじゃないわっ！」

マールリアは手のひらを振りながら、大きく否定する。声がども

りすぎて、あきらかに動揺の色を隠せていない。

その様子を見て、オリビアは柔らかい顔でにこにここと笑った。

「ラム様とおっしゃるんですね。デート、思う存分楽しんで来てくださいね！」

「だから違うんだってばっ！！」

口調が強めなのは、羞恥心をごまかすためだ。

（ラムだったら、私を誘ったりして何考えているの？ サラボナという恋人がいるのに——！）

マールリアは以前、オリビアから借りた三角関係の恋愛小説を読んだことがある。二人の女性が一人の男性を取り合うという、それはもうドロッドロの泥沼の様な内容だ。もしそのようになってしまつたら——。

急にマールリアの胸に不安が渦巻き始めた。

（私はサラボナのこと好きなんだから、ドロドロな三角関係になりたくないわよ！）

夜が明けると、散々降り続いていた雨は無かったことのように止んでいて、晴れ渡った青空が見えていた。

「じゃあ行ってくるからなー」

ラマは片手を上げてルイザとサラボナに挨拶をし、会議室から出て行くとする。あらかじめ、二人にはマールリアと出かけることを伝えてあった。

「ラマちゃん、行つてらっしゃいー！ お土産よろしくねー！」

椅子に座っているルイザが、大きく手を振ってラマを見送る。

「あそこにお土産屋なんかあったっけなー」

顎に拳を置いて、ラマが記憶をたどっている時だった。

「ちよつとラマ。あんたまさか、マールヤのこと好きになつたんじゃないでしょうね？」

何の前振りもなくサラボナが、ぎくりと胸を突かれるような質問をぶつけてきた。彼女は何故か、冷やかな眼差しでラマに視線を送り続けている。

「さあね」

それに構わず、ラマは外へ出て行つた。

先程サラボナにあいまいな答えを返したが、ラマはマールリアに好意を秘めていた。それも昨日今日ではなく、初めて出逢った時からずっと気になっていたのだ。

可愛い外見はもちろんのことだが、きゃしゃな体つきながら、強力な魔力を持っているところ。平凡なことに大きく感動を示す姿。恥ずかしがつてすぐに白い頬を赤らめるところなんかは、思わず男心をそそられる。

そして何よりも、『お姫様なのに、お姫様らしくないところ』に強く惹かれていた。とにかく今のラマには、『べた惚れ』や『首つ

たけ』という言葉がふさわしいぐらい、どつぷりとマールリアに惚れ込んでいたのだ。

今日はそんなマールリアとデートが出来て、ラムは嬉しさを抑えられなかった。

一歩でも、半歩でもいい。少しでもいいから彼女に近づけたら――。そしてゆくゆくは、恋人同士に。……そうなれたらいいなと、ラムは心から願っている。

外はポカポカ陽気に恵まれた快晴だった。しかしながら、昨晩降り続いた雨のせいで、まだ土はぬかるんでいる。その土を踏みしめながら、ラムは小さな公園へ辿り着いた。まだマールリアの姿はない。というより、自分以外誰も公園内に見当たらなかった。ラムは約束どおり、フローライン王女の像の横で待つことにした。

しばらく経ってもマールリアはまだ来ない。少し遅いと感じ始めた頃、ラムはフローライン王女の像を何気なく見上げた。自分達の頭よりも高い位置にあるそれは、あたかも偉そうに人を見下ろしているようである。

「銅像まで俺達を見下しやがって……」

ラムは一人で愚痴をこぼしながら、憎らしい目で像を睨んだ。

「そうだった！」

そこでいきなり、イタズラ心に火がついた。ラムは足元に落ちている小石を手に取り、背伸びをして像の鼻の下に、ヒゲの様な悪戯描きをした。

「どうだった、ざまーみろってんだ！」

銅像のフローライン王女の顔に、おかしなヒゲが生えた。ラムはそれを見上げ、してやったりといった感じで笑った。

それにしてもマールリアは遅かった。女性支度にかかる時間がかかると知っているが、幾らなんでも遅すぎる。

ラムは、はっとした。

（まさか俺とのデートに張り切って、マーヤはおめかししてるんじゃないかっ?!）

ラムは自分の都合のいいように解釈する、めでたい男であった。

やつのことで、マールリアの姿が遠くから見えた。ラムが予想していたおめかしは特にしておらず、至っていつも通りだ。しかし顔だけはいつも通りではなく、機嫌悪さを表面に出している。でもそんなマールリアの怒った顔も、ラムの目には可愛く映るのであった。

「おおっ、マーヤちゃん待っていたよ！ さーあ、僕の胸に飛び込んでおいで！」

ラムは演技かかった爽やかな声を出し、両腕を大きく開いてマールリアを誘った。冗談でもいいから来てくれたらな、と思う。でも、それも叶わず、

「何が『マーヤちゃん』よ！ 茶化さないで！」

マールリアはキツイ目で睨み、長いまつげを瞬かせる。どういうわけか昨日とは打って変わって、カリカリとした態度。

「ったく、マーヤは全然乗ってくれないな。せつかく抱きしめてあげようと思ったのに」

困り笑顔でラムがそう言うと、マールリアは人差し指を向けて一層激しく怒り始めた。

「またそうやってチャラチャラチャラしてっ！ 一体どういっつつもりで私を誘ったのよ！」

「へ？ どういうつもりって？」

話が見えず、ラムはマールリアに問い返した。

「だからっ、どうして私を誘ったかって聞いているの！ デートのつもりだったら、私行かないからね！」

もちろんデートのつもりだったので、ラムは不満を覚える。

「どうしてデートだったら駄目なんだよ！」

「昔から人様の物は盗ってはいけませんって、じいから教わっているのー！」

「はあっ？」

ラムは顔を前に突き出し、眉を寄せた。ますます彼女の言っている意味が分からない。

「でもさ……。デートじゃないんだったら……。別に行つてあげてもいいわよ！」

とんがった口調で言い放ち、マールリアは腕を組んで、ぷいと顎を斜めに上げた。時折こちらにチラチラと視線を送っており、本当は行きたいのが見え見えである。

ラムは呆れた声で言った。

「要するに、行きたいんだよね？」

「……………うん」

マールリアは急にしおらしくなって、小声で返事をした。

「何だよ。行きたいなら行きたいって素直に言えよ。デートじゃなくていいからさ、早く行こうぜ」

と、突然にマールリアが幽霊でも見たような顔をして、口をパクさせた。

「ん？ どうした？」

「そ、それ……」

マールリアはフローライン王女の銅像をふるふると指差す。どうやらラムが付け加えた『ヒゲ』を見て、顔を青くしているようだ。

ラムは銅像の肩の部分をポンポンと叩き、いたずら気味に笑った。

「なーんだ、これか！ いいだろ。俺が描いてやったんだ！」

「ひゃあああー！」

マールリアはラムの腕を握り、無理やり引っ張ってこの場から離れていった。

*

「はあ…、はあ……」

二人は大通りまで走ってきて、息を上げながら足を止めた。

「何やってるのっ！ いたずらにも程があるわよっ！ もし見つかったら拷問どころじゃ済まないわっ！」

両手を腰に当て、マールリアはラマに向かって叱った。

しかしラマは反省する所か、開き直った態度だ。手を左右に振りながら、それを笑い飛ばす。

「大丈夫だって。誰が描いたかわかりやあしないさ！ さ、行こうぜ！」

「もー！」

マールリアは口を尖がらせた。

こうして、二人は肩を並べて目的地に足を向かわせた。

「ほーんとラマってば、いたずらっ子全開よね」

言いながら、マールリアは隣にいるラマの横顔を見た。

そうしたら、ラマは顔を前に向けたまま、へへへと嬉しそうに笑う。マールリアは皮肉を込めて言っただつもりだが、ラマは褒められたと勘違いしているようだ。

「ね、ラマの年齢聞いてなかったけど、一体何歳なの？」

「んあ？ 俺マーマと同じ歳だぞ。ちなみにサラボナが一個上」

「ええー！！ こんなに子供っぽいのに私と同じなの？！」

目を見開いて、マールリアはいつい本音を漏らしてしまった。

「すっげー失礼な言い方だな！ 俺はいつだって大人じゃないか！」

そう反論したラマの表情は、むっすりとしていて、あからさまに機嫌を損ねている。

（自分で大人だと言い切るところが、子供なのよねー）

マールリアは可笑しくなり、下を向いてクスクスと笑った。でも、ラマのそういうところが不思議と憎めない。

ムーン王国の大きな城下街には、植物園、図書館、劇場といった娯楽施設が数箇所ある。今回二人が向かっている動物園もその内の一つだ。

だが動物園と言っても現代地球にある動物園と違って、キリンやゾウ等の大型動物は居ない。ここの動物園は、小動物達を手で触れることができる、ただの『ふれあい広場』である。

二人はアーチ型の入り口をぐりぬけて、園内に踏み込んだ。

「着いた着いたー！」

ラムが両腕を挙げて、のびのびと背伸びをする。

園内は広い道が幾つも枝分かれしており、途中途中に檻や柵が見える。適度に緑があつて、この美しい景色を眺めるだけでも十分楽しめそうだった。

「うわああー、広い！ それに綺麗な所ね！」

感動の声をあげ、マールリアは口を開けたまま、きよるきよると首を回し続ける。丁度、田舎者が都会に出てきた時のような仕草だ。二人の周りには、子供連れの家族や恋人らしき姿がぽつぽつと見え、とても魔法王国と似つかぬような、ほのぼのとした風景であつた。

「城下街にこんな素敵な場所があつたのね！」

初めての場所に胸がわくわくして、マールリアは地に足が着かない状態だ。

「ねえねえ、ラム。あそこには何がいるのかなっ？」

少し先に見える屋根がある場所を指差し、マールリアは興奮した口調でラムに質問した。

「ウサギだったかな」

「きゃーっ！ ウサギ見たいっ！ 早く行きましょっ！」

マールリアは高い声と同時に飛び上がり、我慢できなくなって凄じ勢いで走り出した。

「おーいつ、走るなよっ！ こけたら泥んこになるぞっ！」

ラマは叫んでマールリアに注意を促した。でも今のマールリアには、何を言っても通じない。もうウサギへまっしぐらだった。

「マーヤだって大いにガキじゃないか……」

ぽつりと一人で眩き、ラマは走っていくマールリアの後を追いかけた。

二人は雨よけ用の屋根が付いている場所までやってきた。そこは高い柵で囲まれていて、中には数え切れない程のウサギが飼われていた。

「かわいいー！」

マールリアは上から柵の中を覗き込んだ。ワラが混じった土の上を、ぴよこぴよことウサギが元気に走り回っている。

初めて目にする可愛らしいウサギに見入っていると、ラマが柵に付いている扉を開き、中に入ってマールリアに手招きをした。

「マーヤ、中に入って抱っこしてもいいんだぞ」

「本当に？ やったー」

マールリアの顔に笑顔がはじけた。マールリアは柵の中に入って、さっそく白ウサギを抱っこした。ラマの方は、白黒模様のウサギを抱っこしている。

「あー、ふわふわで可愛いー！」

マールリアはうつとりした目をして、ウサギの耳を撫でた。その小さな身体はぷにぷにとしていて、想像以上に柔らかい感触だった。「マーヤ、耳を握って引つ張るんじゃないぞ。ウサギは耳に、血管が沢山通っているんだからな」

「えっ、そうなの！？ 知らなかった」

慌ててマールリアは、耳を撫でていた手を離した。

「もしかして、マーヤはウサギも初めてなのか？」

ラマが手にしたウサギの頭をよしよしと撫でながら、尋ねた。「うん、絵は見たことあるんだけどね」

「マールリアの言葉を聞いて、ラマは啞然とした顔つきになった。
「マールやって本当にお姫様なんだな……」

もそもそも動くウサギをマールリアが抱き直していると、ラムが質問を切り出してきた。

「前から気になっていたんだけど、お姫様って普段どんな生活を送っているんだ？」

「えーと、いつも魔法の勉強かな。」

あとは……、パーティーに参加したり、他は、えーと、えーと……」
マールリアは視線を上に向けて一生懸命考える。でも、他にこれといったものはなかった。

（……あれ？ 私、意外と何にもしていない？）
マールリアは今更なことに気が付く。

だが、王室の女性は皆こんなものだ。女として産まれてきた以上、政略結婚が待ち受けている。だからマールリアものんびりと毎日を過ごし、来るべき時をただただ待つだけなのだ。

ラムが興味深そうな目でこちらを見ながら、話を続ける。

「へえ……。花嫁修業みたいなことは全くやってないんだな。じゃあ自分の時間は？」

「読書や、城の中の散歩や、窓から外の景色を眺めるの」

マールリアがそう答えた直後、ラムがどこかで聞き覚えのあるセリフを付け加えた。

「それと、城から脱走だったな」

「――！」

その拍子に初めてラムと出会った時の記憶が呼び起こされて、マールリアは何となくすぐつたい気分になった。

「ちよつともうつ！ あのこと思い出したくないんだから言わないでよ！」

ラムは演技をしていたかもしれないけど、私は真剣に話していたん

だからね！」

せかせかと早口で喋るマールリアの様子を見て、ラマは俯いて吹き出し、いともおかしそうに笑い始めた。

「ぷぷっ！ マーヤってからかうと本当に面白いな！」

「からかわれる方は気持ち良くないわよ！」
マールリアがふくれっつらで言い返すと、ラマが落ち着いた口調でそれをなだめる。

「まあまあ、そんなに大声出すなよ。ウサギが耳元で可愛そうだぞ。それにマーヤだってさ。俺をからかう時あるじゃん」

「まあ、そうだけども……」

マールリアは少し渋った顔で、それに頷く。言われてみれば、知らず知らずのうちに、ラマをからかっていたことがあった。

「そういう関係って、凄くいいと思うんだ。」

俺さ。マーヤとは冗談を言い合ったり、何でも話せるような間柄になりたい。お互い遠慮せずにね」

急に真面目なことを語ったラマに、マールリアは少しどきりとした。抱いているウサギがひどく不釣り合いだったが、ラマの表情は真剣そのものだった。

（私と何でも話せるような間柄？ ……それって親友ということ？ それとも――）

マールリアはそこまで考えたところで、慌ててその考えを打ち消した。なぜなら、抱いてはいけない期待を、つい抱いてしまったからだ。

*

たつぷりとウサギの可愛らしさを堪能した二人は、さらに別の動物を求めて園内を歩み始めた。来た時はあんなに興奮していたマールリアも、今や落ち着きを取り戻してゆっくりと歩いている。

「いやー、昨日はどうなることかと思ったけど、今日は天気になって良かったなー」

ラムが清々しい声をあげ、目を細めて空を仰ぎ見た。

そう言ったラムにつられて、マールリアも遠くの空を見つめる。

「本当よね。晴れるおまじないをして良かった！」

「おまじない？ そんなことしてたのか」

「うん、侍女が教えてくれたのよ。窓の上から、小さな太陽の模型を吊り下げて――」

青々とした空の下。微笑み合い、何気ない会話を交わしながら、二人は穏やかな時間を共有していった。

ふとマールリアが首を動かすと、瞳の中にラムの横顔が映っている。今日のラムは普段かぶっている帽子をはずしていて、クセ毛のない丸い髪型を見せていた。

そよ風で、さらさらと銀色の前髪を揺らせて素敵。……と言いたところだったが、普通だった。ラムは見れば見るほど、ただの平凡な男の子だった。

しかしマールリアは、このラムの平凡なところが親しみやすく好きだった。（仲間として）

それもそのはず。これまでにマールリアが接してきた男性は、性的で綺麗な貴族や王族達ばかり。もちろん美形貴族に越したことはないが、マールリアは彼らが何となく苦手だった。その理由は、『本性』がまるで見えないから。

彼らはきちんとした礼儀作法を心得ており、紳士的な振る舞いを見せている。そのせいだろうか。偽りの仮面を被って、本性を覆い隠しているように感じられる。腹の中では何を考えているのか分かったもんじゃない。

だからマールリアは、美形で礼儀正しい貴族達が好きになれなかった。

それに比べると、ラムは明るくて、ちょっとお馬鹿で、とても分

かりやすい性格。安心して気兼ねなく話せる相手といったところだ。
（ラマみたいな王族や貴族がいたら、政略結婚も苦じゃないのになあ……）

マールリアは自分の将来のことを思考して、ぼんやりとしていた。

「——どうしたんだ？ そんなに俺の顔を見つめて」
「あつ」

ラマが顔を横に向けて、マールリアと視線を重ねている。声をかけられて、ようやく自分がラマの顔を凝視していたことに気が付いた。マールリアの顔が、一気にかーっと赤く染まる。

「なっ、何でもないので。向こうに珍しい動物がいたから……」

マールリアは言葉を濁して、すぐにラマから目をそらした。

しかし、その行動がまずかった。ラマがいたずらっぽい笑みを浮かべて、調子こき始めたのである。

「その慌てぶり……。さーては、マーヤ。俺に見とれていたな？」
「うっ……」

ズバリの中されて、マールリアはやや悔しい顔つきをする。確かに見入っていたが、気恥ずかしくて素直に認めたくない。

「見とれてなんか……！」

何とか誤魔化そうと、マールリアが口を開く。

ところがラマときたら、いつもの自信満々の顔つきで、

「分かるぞっ！ 分かるぞ、その気持ち！ なんせ俺は大天才だからな！」

見たければ、気が済むまで見ていいんだぞっ。マーヤだけ特別だからな！」

自分の胸をぽんぽんと叩きながら、こちらが話す隙を与えないぐらいにまくし立ててきた。……図に乗ると、これである。

これさえなければ……とマールリアも、頭を下げて溜息をひとつ。

そんな中。いきなりラマが足を止め、マールリアと向き合っ

んなことを言い出した。

「なあなあマーヤ。手を繋いで歩かないか？」

「えっ！」

マールリアは顔に驚きの色を浮かべた。あまりにも唐突な発言すぎて、一瞬自分の耳を疑ってしまった程だ。

「ほら」

ラマは満面の笑顔で手を差し伸ばし、ここに手を持ってこいと言うように揺さぶって催促する。まだふざけているのだろうか？

「でっ、でも……」

どうすればいいのか分からず、マールリアは言葉を詰まらせてしまった。

マールリアは男性と手を繋ぐことは、初めてではない。今までパーティーで、何人もの男性とダンスのお相手をやってきたからだ。だけでも手を繋いで一緒に歩くという行為は、まったく別物だ。それは恋人同士がすること。恋愛経験がないマールリアにも、それぐらい分かっている。だからこそ、気軽にいいよなんて言えなかった。

マールリアが困惑した瞳で見上げると、ラマが手を差し伸ばした状態でにこにこ笑い続けている。

「またもや、自分ばかりかわれているのだろうか？ そのようにも見えるし、本気のようにも見える。彼は分かりやすい性格のはずだが、今回ばかりは何を考えて、何故そういう発言に至ったのか、少しも読み取れなかった。」

「どっ、どうして……？」

「どうしてって、俺が繋ぎたいから！ それ以外に理由はない！」

ラマは気持ちがいいほど、さらりと言ったのけた。

「……」

その答えに対してマールリアがためらっていると、ラマは待てな

かったのだろう。一步前に近づいて、マールリアの手を強引に取った。

ぎゅっと手を握られて、マールリアの心臓がドキンと大きく跳ねる。

「ちょ、ちよっとラマツ……！」

「さあ行こう！」

満足した様子でラマは笑い、マールリアを軽く引っ張って誘導し始めた。

仕方なく、マールリアも手を引かれて足を動かす。頬をほんのりと赤く染めて。

（なっ、何だか変なことになっちゃった……）

お花を渡されたあの時もそうだったが、マールリアは彼のこういうさっぱりとした部分にとても弱かった。

握ったその手は、優しいぬくもりが伝わってきて心の奥に沁み込んでいく。……とくん、とくんと静かに心臓が脈打つのを、マールリアは感じていた。

二人は手と手を繋いで、動物達を一通り眺めて楽しんだ。

「あつ、見て見て！ あそこに大きな鳥がいる！」

マールリアははしゃぎ声をあげ、大きな檻がある場所に指を向ける。この時、マールリアは地面が濡れていることを完全に忘れきっていた。大きく足を踏み込んだ瞬間、ぬかるんだ土でするっと滑りそうになったのだ。

「ひゃっ！」

口から高い声が飛び出す。しかしマールリアは足をとっさに踏ん張り、危うくこけそうになるのをこらえた。両足を大きく開いて、かなりみつともない格好で止まっている。

「ふあっ……、危機一髪……」

どうにか助かり、マールリアは妙な声を漏らして体勢を立て直す。ラマもさりげなく手を引っ張ってくれた。

「あつぶないなー。今日こけると服がドロドロになるぞっ」

「——ドロドロ！」

ぴくりとマールリアは、ラマの言った一つの単語に反応してしまった。その途端、物凄い駆け足で、三角関係の記憶が戻ってくる。(わっ、私ったら、人の彼氏と手を繋いだりして、何て無神経なことをしているの!?)

こんな姿、サラボナに見られた日にはっ——!)

急激に、自分がいけないことをしているという意識が働き始める。マールリアは思い切り腕を振って、握っているラマの手を振り解いた。

突然不可解な行動を起こしたマールリアに驚いて、ラマが振り向く。

「どうした? いきなり」

「私はサラボナのこと好きなんだから、ケンカしたくないのっ!」

マールリアは強く拳を作り、怒った形相でラマに言い放った。

ラマは、マールリアの瞳を見て、ぽかんとした顔をしている。いきなりマールリアが怒り出したことが、よほど不思議なのだろう。

「どうしてサラボナの名前が出てくるんだ?」

「そんなの聞くまでもないでしょ!」

「サラボナ……?」

やっぱりラマは、腕を組んで不思議そうな顔をするばかり。

「はあ……。ラマは少し心を入れ替えた方がいいわよ」

マールリアは嘆くように呟いた後、ラマに背中を見せて走っていった。

ただ一人取り残されたラマは、マールリアの発言に未だ理解できず、しきりに首をひねっていた。

「全っ然意味が分からないぞ。今朝からマーヤは何のことを言ってるんだ……?」

走ってきた先はベンチだった。座面は水滴ひとつもなく、綺麗に拭き取られている。マールリアはここで腰を下ろして落ち着くことにした。

（がっかりしたな……。ラマって、こうやって色々な女の子と遊んでいるのね……）

話しやすい相手で気に入っていただけに、マールリアのショックは大きかった。思い起こせば彼と初めて会った時も、軽い調子で話しかけられて、とても女の子に慣れている様子だった。そのため、どうしても遊び人という印象が否めない。

（……でも、サラボナがいると分かっているが、今日来てしまった私も私よね。

これからはサラボナの為にも、なるべくラマに近づかないようにしよう）

マールリアは今日の反省を踏まえて、今後の決意を固めた。

そのうちラマもここまでやって来て、ベンチに腰掛けた。マールリアの機嫌をうかがって、顔を覗きながらそつと声をかけてくる。

「なあ、マーマ」

「ん」

「何を怒っているのか知らないけど、ケンカなんてやめようぜ。俺達仲間なんだし」

ラマがマールリアに目を合わせて、カラッと笑った。たった今決意したことがぐらついてしまいそうな程、明るい笑顔だ。どうにも調子が狂ってしまう。

「……別に怒ってなんか、いないわよ」

「怒ってないんだったら、どうしてもそんなに離れてんだよ？」

こちらに指を差し、不服そうな顔つきでラムが尋ねる。

ラムは当たり前前にベンチの中央で座っていたが、マールリアは異様に左端へ寄っている。はたから見ると、不自然なぐらいに二人は離れていた。

「これは、その……」

マールリアは口ごもって、あっちこっちに目を動かす。こういう時こそ冷たくすべきなのに、いざとなると良い答えが頭に思いつかない。

そうしている間に、ラムがずりずりと横にずれてきた。

「そんなに避けるなよ！ 俺達せつかく出会ったんだからさ、もっと仲良くしようぜ！」

「わわわっ……！」

ぴったりと二人の身体が密着し、思わずマールリアはうるたえた声を漏らした。すぐ隣にラムの身体があり、顔も間近。マールリアは途端にあがってしまい、両手を足の上に置いて縮こまった。

（まずいつ、まずいじゃないの！ これじゃあ完全にラムのペースじゃないっ！

負けちゃだめよ！ ちゃんと冷たい態度を取らなきゃ！）

マールリアはどぎまぎするのを必死に抑え、ラムから離れる為に立ち上がろうとした。

ところがその時、それを止めるかのごとく、ラムが変な冗談を言ってきた。

「マールリアってさ、純粹と言うか何と言うか、すぐ顔を赤くするよな。さつき手を繋いでいた時も赤くしていたし。」

こんな調子だと、キスなんかすると失神しちゃうんだろうな」

「何言ってるの！ いくら私でもそんなので失神するはずないですよ！」

キッと眉を上げ、マールリアはトゲトゲしい言い方で言葉を返す。するとラムが、マールリアの瞳を覗きこむようにして囁いてきた。

「——ふん……。失神するはずない、か。……じゃあ試してみようかなー」

「え……？」

とんでもないことを耳にして、マールリアはぎくりとした。揺れ動く目でラマに視線を向けると、ニヤツと小悪魔的な笑みを浮かべている。それを見て、ラマから上手く乗せられてしまったことが分かった。

けれども、時既に遅しだった。ラマが思いっきりマールリアに顔を寄せてきたのである。

「わあっ！　ちよつとラマッ！」

とつさにマールリアは、そこから逃げるように上半身をのけ反る。でもラマは容赦なく、マールリアに顔を近づけてきた。マールリアの鼓動はどんどん大きくなっていき、それと同時に顔も赤く染まっていた。

「サツ、サラボナがほら。こっ、こ、こういうのは、す、す、好きな人同士で、するものなのよっ。怒るから……」

気が動転して、もはや何を口走っているのか自分でもわからない。ラマの顔が目前に段々迫ってくる。マールリアは両腕を出して小さな抵抗を試みたが、ラマから手首を握られて易々と制されてしまった。

（わあああ、だめだわっ。本当にキスされちゃう——！）

身体を縮め、もうあと少しで唇が触れる直前で、マールリアはぎゅつと固く目を閉じた。

その瞬間、ふつと頬に何かが触れた――。

ようやく両腕が解放されて、マールリアはゆっくりと瞳を開いた。……そこには既に離れているラマの顔。どうやらラマは、マールリアの頬にキスをしたようだ。

「はあっ、はあっ……」

無意識のうちに息を止めていたせいで、マールリアはいきなり呼

吸が苦しくなってきた。胸に手を当てると、バクバクと心臓が爆発しそうに鳴り続けている。そして、尋常じゃないくらい赤面顔になっていた。今日のマールリアは顔が赤くなりっぱなしである。

「へへっ、やったね！ お姫様のほっぺにチューしちゃったぜ！」
ラマはこちらにピースを向けて、憎ったらしいほど無邪気に笑った。

その瞬間、マールリアの胸の中でブチンと何かが切れる音が鳴る。

「……ふざけないでよ」

言った自分でも驚く程、喉の奥から低い声が飛び出した。マールリアはすっと立ち上がって、ラマを物凄い形相で見下ろした。

「マーマ……？」

ラマはマールリアの迫力に圧倒されたのか、静かな声を出す。

「ラマはいつもこんなことをやって、女の子と遊んでいるのかもしれないけど私は真面目なのっ！」

私を遊びの対象に扱うのはやめてよっ！」

マールリアの感情的な怒鳴り声が辺りに響いた。本日何度目の怒りだろうか。だが今度という今度は、簡単に怒りが収まりそうになり。本気でキスをされてしまうところだったからだ。

場所は同じく動物園。

太い木の陰にそつと身をひそめて、マールリア達がいる方角を見ている怪しげな人物がいた。その正体は、マリラの側近ピースだ。ピースはマリラから命じられ、何でも屋の素性を調べるべく、今朝からずつと二人の後を尾行していたのだ。

あのメンバーは特別な任務をこなしている何かの組織なのか。はたまた、外出癖のあるマールリア姫に振り回されているムーン城の兵士なのか。そんなことを頭の中でぐるぐると考えながら、ピースは追尾をしていた。

奴らの素性が明らかになったところで、それが大きなことに繋がるかは分らない。しかしあのメンバーは、きつと何かに使えそうな気がしてならなかった。何せ、あのフローライン王女の娘であるマールリア姫が混ざっているからだ。

いずれにせよ、現段階では漠然としすぎている。奴らの正体が明確に分かる場面を目にしない限り、マリラとピースには新たな道が開けなかった。

ところが今日の二人といったら、ただぶらついているだけで、今の今まで目立った行動を起こさない。この様子だと、これ以上ここに留まっても時間の無駄になるだけだ。

（仕方ない。また出直すか）

今日は諦めて、ピースがこの場から離れようとした矢先のことだった。

「その青いローブ。あんた、ピースよね？」

背後から女の声がした。振り返って声の主を確認すると、そこにはグラスの姿がある。片手を腰に当て、不快そうに眉を寄せてビースのことを睨んでいた。

面倒臭い女のお出ましである。気が進まなかったが、ビースは仕方なく彼女に声をかけた。

「グラスか」

「ムツキーーーーッ！！ 『様』を付けなさい、『様』を！ 下っ端のあんたに呼び捨てされる覚えなど無いわっ！！」

グラスはビースの無礼ぶりに腹を立て、地団駄を踏みながら奇声を発した。足を地面に着ける度に、べちゃべちゃと泥が跳ねている（相変わらず、うるさい女……）

グラスのキンキン声が脳天に響いて、ビースはフードの中で目を細める。

「何しに来た」

「つまらない質問ね！ 当然マールリアムーンを痛めつけるために、ここまで足を運んだのよ！」

「へえ」

まずグラスには無理だろう、と思いつつもビースはあえて何も言わなかった。どうせ言ったところで、ヒステリックに怒るのが目に見えているからだ。

「じゃあ逆に聞くけど、あんたこそ、こんなところで何をやってるの？ そうやって人のデートをコソコソ覗き見するのが好み？ そうだとしたら随分悪趣味ねえ……」

もともと、あんたのような陰気な奴にはぴったりの趣味だけどさあ」

昨日と同様に、嫌味をたっぷり含んだ言い方をするグラス。おまけに腕を組み、鼻先を上に向けて流し目だ。

そんな彼女にビースは話す気にもならない。

「ふんっ。また、そうやってだんまりなわけね。」

まあいいわ。今日ここへ来た目的は、あんたじゃなくてマールリア
「ムーンだし」

言いながらグラスは木の傍に寄り、幹からわずかに顔を覗かせる。
続いて、向こうにいるマールリア達を忌々しい瞳で見つめながら、
愚痴をこぼし始めた。というより、ウザさを発動し始めた。

「ああ、むかつくわっ！ あの女、彼氏と仲良くデートしちゃって！
私なんか、私なんかフィアンセのミラー王子が殺されたって言う
のに！ ミラー様を返してよっ！」

（……死んだ人間が戻ってくるはずないだろう）

溜息をついてピースが呆れているのにも目をくれず、グラスは次
から次へと文句を吐き出す。木の幹をバンバンと手で叩きながら。

「それに職業はお姫様で？ 綺麗な銀髪で、大きな青い瞳！ 胸だ
って私より大きいし！

とにかくあの女は私が持っていない物を、ゼーんぶ持っていて、許
せないのよっ……！」

多少自らの人種を卑屈に感じているようにも捉えられるが、大方
くだらない女の妬みである。

とうとう馬鹿ばかしくなって、ピースは二、三步グラスから離れ
て伝えた。

「じゃあ俺は城に帰るからな」

「えっ？」

グラスは驚き顔でピースの方に首を動かす。

「今日は何も収穫を得られそうに無い」

「待ちなさいよ。今あいつらを倒す絶好のチャンスじゃない。早く
行つて来なさいよ！」

「お前がやればいいだろう」

ピースから言い返されて、グラスはカチンと来たようだ。険悪な
表情を正直に浮かべている。

「はあ？ あんたうちの城の兵士でしょ？ こんな時に動かないな

んで、どういう神経しているのよ」

「俺はマリラに命じられて動いているだけだ。命令に背く行動はしない」

そう言つて、ビースは立ち去ろうと歩き始めた。すると、後ろからグラスのこんな言葉が聞こえてきた。

「はーん、分かったわ。あんた臆病者だったのね？ 本当はあいづらが怖いんでしょ？」

立ち向かいたくないから、適当なこじつけをつけてさっさと逃げるつもりなんでしょ？ まったく、情けない男ねっ！」

散々な言われようである。

「グラス」

ビースは足を止めてグラスの方に振り返った。

「……！ な、何よ」

「死ね」

ビースはただそれだけを言つて去つていった。

ぴゅうと突風が吹いて、グラスの前に木の葉が一枚舞い落ちた。

「キイイーッ！！ 何なのよあいつ、ム・カ・ツ・クッー！！！」

グラスは両拳に力を込め、再び片足をバンバンと地面に叩き付けた。

「許さないわっ！ いつの日か絶対に殺してやるっ！！ このグラス様の殺人リストに名前を加えてやるんだから！！」

誰へともなく叫んだ後、グラスはマールリア達のところに向かつて走つていった。

ちなみに『グラス様の殺人リスト』には一番目にフローライン王女、二番目にマールリアの名前が載っている。近いうちにビースの名前も載ることになるであろう。

*

時間はお昼に差し掛かった頃だった。その頃のマールリア達は……。

マールリアは未だに怒っていて、後ろを振り返りもせず足を進めていた。そんなマールリアのお尻を、ラムが懸命に追いかけている。周囲の目からは、これがどのように映っているのだろうか。

「——だーから、決していい加減な気持ちでやったんじゃないって」

ラムのいい訳らしきものが耳へと届いている。だが、ぷいとマールリアは知らん顔。何を言われても、口をつぐんでただひたすらに歩いていく。さつきからこの状態が長く続いていた。

（こんな空気楽しくない。……もう帰ろうかな）

もはや楽しい気分など、すっかりと失われていた。たとえマールリアの機嫌が戻ったとしても、もうウサギの時のような和やかなムードは戻って来ないだろう。

その時だった。いきなり前方にピンク髪の女が立ちはだかり、両手を広げて行く手を塞いだ。

「待ちなさい！ マールリアームーン。ここから先は通さないわよ！」

「——っ——！」

女が正面に現れたものだから、マールリアはたじろいでしまった。一瞬警戒したが、よく見るとこの女、この前何でも屋へ依頼に来た裏月星人だった。騙されたのもう二度と会うことはないと思っていたが、まさかこんなところで、ましてや自ら会いに来るとは。

マールリアは警戒心を解いて、彼女と話そうとした。ところが、

「あの、えーとー……。あれ？ 名前……」

顔は覚えているのに名前が出てこない。目を凝らすように細めて思い出そうと努力はするものの、やっぱり思い出せなかった。

「おーお、久しぶり！ 元氣だったか？」

追いついたラムが親しげに片手を振りながら、横からしゃしゃり出てきた。妙に嬉しそうなのは、ピンク髪の女が登場したことによって、マールリアの怒りが一時的に静まったからだ。まさにナイスタイミングというやつである。

「一千万スターの人だよな。確か名前は……、クリスだったけ？」

それを聞いて、マールリアは両手をぱちりと叩いた。

「そうそう。クリスだったわ！ ねえ、クリス。ここから先に通さないとは、一体どういうことなの？」

「……あんた達二人揃って私を馬鹿にしているのっ？！ 私はグラスIIアルメートよ！」

グラスは顔を突き出して、奥歯をギリギリと鳴らしながら、いかにも恨めしげに二人を睨み付ける。

「ああ、そういえばそんな名前だったな。まあ、細かい間違えは気にするな！」

それより俺、お前に会いたかったんだよ！」

ケラケラと笑いながらミスを誤魔化した後、ラムは一步踏み出してグラスに手のひらを差し出した。

「何よ……、この手は……」

「早く一千万スターをくれっ！ あれから俺、毎日サラボナから八つ当たりされて大変なんだ」

その途端、グラスはパチンツとラムの手を叩き、まるで喧嘩ふっかけように声を荒らげてきた。

「ぶわっかじゃないの、あんたっ！ 一千万スターなんてあるはずないじゃない！」

まだ騙されたって気づいてないの？ 頭悪いんじゃない？」

そのグラスの豹変振りに、ラムとマールリアは目を見合わせ、興ざめ気味の感想を述べる。

「しばらく会わない間に、随分と性格変わったな……」

「そうね……。もっと普通だったわよね」

グラスはそれを聞くと、自分の胸に右手を添えて、ふふんと鼻で笑った。

「まあ、そう思うのは無理も無いわ。あの時は大人しく装っていたからね。でもこれが本来の私なのよ？」

そして聞いて驚きなさいつ。私の本当の正体は――」

「そうだったのか。そんじゃ、またなグラス」

グラスの言葉にかぶせるように、ラマが発言した。

「またねー、グラス！」

二人は微笑みながらグラスに手を振り、方向転換をして歩いていった。

びゅううつつと突風が吹いて、グラスの前に虚しく木の葉が一枚舞い落ちてきた。

「――って、まだ話終わっていないわよつ。それに何友好的に手を振っているの?!」

あの態度、もう我慢できないわっ!」

先陣を切ったのはグラスだった。両手を前に構え、そこから人の頭ほどの光の玉をマールリアに狙って撃ち放った。グラスに背中を向けているマールリアは、必然的に命中してしまうことになる。

「キャッ!?!」

一瞬何が起きたのかマールリアは分からなかった。ふいに何かが背中にぶつかってきて、自分の身体が勢いよく前に押される。そして振り向く間もなく、濡れた土の上にべっちゃりとうつ伏せに倒れてしまった。

「マ―ヤッ!?!」

突然隣で転倒したマールリアを見て、ラマが叫び声をあげる。

「うつ……、うつ……」

マールリアは唸りながら、ゆっくりと身体を起こして正座をした。見ると、服も両手も泥んだ。きつと今の自分は上から下までドロドロで、酷いありさまに違いない。

そのまま後ろを向くと、グラスの勝ち誇ったような顔。両手を前に構えて魔法を使う姿勢をしている。それを目にして、彼女が魔法をぶつけてきたということが分かった。

グラスはマールリアの目を見て、わざとらしい高笑いを響かせた。「オーホホホッ！ 私を無視するからそうなるのよ！ もう一発くらいなさいっ」

「ストーップッ！！」

グラスが魔法を使おうとした瞬間、ラムが大声を出して両手から銀色の光線を放った。

魔法を浴びたグラスは、ビクリと微かに跳ねた後、そのまま身動きが取れなくなってしまった。あつと言う間に戦闘終了である。

「ちよっ……、ウソッ。何これ。動けないじゃない……！」

目を見開いて、混乱するグラス。そして魔法を使い終えたラムは案の定、辛そうにうな垂れて立っている。

マールリアは立とうとして片足に力を入れた。そしたら、ラムが慌ててマールリアの方に向き直り、少し前かがみになって手を差し伸べた。その時の彼の目は、マールリアがドキンとするくらい優しい目をしていた。

「大丈夫か？ マーヤ」

「い、いいわよ、ラム疲れているんでしょ？ それに汚れちゃうし……」

マールリアは遠慮して手を振った。あの切り札の魔法を使ったらの方が辛いはずだ。

「いいから！」

ラムは少し強い口調で言っ、マールリアの泥の付いた手を無理やり握り、引っ張って立たせてくれた。

「ありがとう……」

マールリアはお礼の言葉を小さく伝えた。

(……こんなに、……優しくされると困る)

あんなに怒っていたはずなのに、今は嬉しいような、照れくさいような心境になっていた。日頃、馬鹿なことや偉そうなことを言っているのに、時折見せるラムのこの優しさ。そういうところに、マールリアは心が乱されてしまう。

「あー、くそー。俺ハンカチ持ってきてなかったな。仕方ない、これで拭けよマーヤ」

ラムは上着を脱いで、マールリアに差し出した。

「えっ!? 何もそこまでしてもらわなくてもいいわよ。こんなに汚れていたら拭いたって一緒だから」

両手のひらを前に出して、更に遠慮する。さすがにこれは申し訳ないとマールリアは感じてしまった。

「拭けっ。ドロドロで凄いことになってるぞ。それとも俺が拭いてやるのか? 全身くまなく」

「バカッ! どうしてそうやって、いやらしこと言うのっ!?!」

思わず身を乗り出して、マールリアは大声を出してしまった。すると、ニヤツとラムの顔が変化する。

「単に拭いてやるって言ってるのに、どこがヤラシんだよ。何想像してるんだマーヤ?」

「ちょっと!! あんたたち、この私を差し置いてイチャついてるんじゃないわよ!

早くこのわけわからない魔法を解きなさい!!」

急にグラスの怒声が響いた。そのせいでマールリアの怒りが点

火される。ゆらりとグラスの方を向いて、彼女の元にゆっくりと歩んでいった。

グラスは自分が痛めつけられると悟ったのだろう。見る見るうちに顔が青く凍り付いていき、恐怖に引きつった声を出した。

「なっ、何よ……。何をする気よ……」

「マーヤ、やめとけよ。もうそいつ動けないから」

ラムが後ろからたしなめるけれど、マールリアは引き下がらなかった。こんな惨めな姿にされて、このままでは気が済まない。マールリアはグラスの真正面まで来ると、しゃがんで地面の泥を自分の手一杯につけた。

「マッ、マーヤ……」

これからマールリアが何をするのか察して、ラムが引きつった声をあげる。

「これはさっきのお返しよっ！！」

マールリアは立ち上がって、グラスの顔にべちゃべちゃと泥をたっぷり塗りつけた。

「ぎゃあああつ、やめなさいっ、やめなさいっ！ やめないと許さないわよっ！」

泥を塗る度に、グラスはうるさい声をあげた。だけどマールリアはお構いなし。グラスの頬に嫌というほど泥を塗りたくる。

「うわあ……。女ってこええー……」

あきらかに引いた声でラムが小さく呟いた。

マールリアが手を止めると、泥だらけになったグラスがキッと睨んで、古臭い決まり文句を叫んだ。

「覚えてなさいよマールリアムーン！ 次会った時は、あんたを『ぎゃふん』と言わせてやるんだからっ！」

「ばかみたい。そんなこと言うはずないでしょっ！」

両手を腰に当てて、マールリアも強気な態度に出る。グラスのセリフに煽られて、更に何かをしてやりたい気が引き起こされるが、

ここでラマが止めに入った。

「マーヤ、もうほっとして行こうぜ……」

「うん、そうね」

くるり、とマールリアはラマの方を向く。

後ろでグラスがまだギャーギャーと何かを吠えていたが、それに構わず二人はその場から離れていった。

基地では思いのほか修理が早く終わり、ルイザとサラボナは椅子に腰掛けてクッキーを食べていた。

「ラマちゃんとマーヤはデート楽しんでるかなー」

そう言った直後、ルイザはしまったと言う様に苦い顔つきをして口元に手をやった。サラボナの前でつい無神経な発言をしてしまったからだ。

「仲良くなつてもらったら困るんだけどね。お姫様に恋愛感情なんて持つんじゃないわよ」

目の前で頼杖をしているサラボナは、いつにない冷たい目付きだった。彼女は今朝からずっとご機嫌斜めで、気まずい雰囲気をもし出している。

「あはは、彼女のにはそうだろうねー」

ルイザはサラボナに気を使って、遠慮がちに笑った。するとサラボナが目を大きく見開いて、きよんとする。

「彼女？ 誰が？」

「サラボナでしょ」

「えっ？ 何を勘違いしているの？ 私はラマの彼女なんかじゃないわよ？ 冗談よしてよ」

いかにも嫌そうにサラボナは顔を歪めて、ぶんぶんと手を振った。「ええー？ だって同棲しているじゃない」

「同棲つて、何だか嫌な響きね。……えーとね。私とラマは、ただのいとこ同士。あいつは私から見ると弟みたいなもんよ」

「うつわあ、いとこ同士だったんだ！」

意外な事実を聞いて、ルイザは目を丸くして興奮した声をあげた。「ラマの家は別の街にあるんだけどね。ルイザと同じように、通うのが面倒だからってここに寝泊りしているのよ」

「へーっ。じゃあどうして二人が仲良くするのを反対するの？」

不思議そうな顔でルイザが質問をすると、サラボナの表情がガラリと変化して真剣な面持ちになった。

「分かっていると思うけど、マーヤはお姫様なのよ？ いずれ、どこぞかの人と結婚してツイン・マジックを脱退していくの」

サラボナは目と閉じ、一旦深呼吸して静かに話を続けた。

「——マーヤは二度とここへは戻ってこない。……私は、最後にマーヤとラマが泣く姿なんて見たくないの。だから、二人には恋愛感情を持ってほしくないのよ」

「……」

サラボナの話を聞いて、ルイザはテーブルに視線を落とした。目を背けていたが、いつかそういう日が来ることを分かっていた。マールリアと永遠のお別れが——。

*

ラマは疲れ、マールリアは服が汚れているために、時間は早いが帰ることにした。

マールリアは、いつもよりも重く感じる足を動かしながら歩いていく。後ろからは、疲れたラマがだらだらと着いて来ていた。

「今日は散々だったな……」

「本当ね……。もっと遊びたかったのに、こんな羽目になるなんて最悪……」

マールリアは泥が付着したスカートの裾を両手で持ち上げて、ブツブツとぼやく。結局、違う意味でドロドロになってしまった。

道行く人は、すれ違う度に泥だらけのマールリアの姿をじろじろと眺めて行く。中には、くすくすと必死に笑いを押し殺して歩いて行く人も。小さな子供なんかは、マールリアに指を差して『このお姉ちゃん、きちゃないー』と叫ぶ始末。その後母親がやって来て、お決まりのごとく子供を叱るのだが。

「はあ……。早くお風呂に入って綺麗にしてしまいたい……」

何とも惨めな気分だ。マールリアは更にテンションが落ちていき、背筋を曲げて暗い溜息を漏らした。

「うつわあっ!!」

唐突に背後からラマの盛大な悲鳴が聞こえてきた。何事かとマールリアが振り返ると、ラマがべっちょりと地面に身体をつけている。マールリアは驚き、ラマの元まで走って腰をかがめた。

「ラマツ、どうしたの急に？」

ラマは頭をむくりと上げて、泥だらけの顔を見せた。

「もう疲れて足がふらふらだ……」

足元がおぼつかず、こけてしまったのだろう。

「大丈夫……？　しっかりして……ふふっ！」

マールリアは心配していたはずだけど、ラマの泥顔を見てつい吹き出してしまった。

「笑うなよー！」

「だってさあ。目と口の部分しか見えないんだもん！　ふふふっ」

「マーヤだって同じ顔しているんだぞっ！　それにマーヤなんか、泥が乾きかけてパリパリになってるんだぞ！」

不貞腐れた声でぶーぶーと文句をたれながら、ラマは片膝を立てて立ち上がる。

「ふふふっ、そうだけどっ」

いくら自分の顔と同じと言えども、マールリアは笑いが込み上げてきて止まらない。

そんな中、ラマがぼそりとさりげなく言った。

「……でもさ、これでマーヤとお揃いだな」

「――！」

瞬時にマールリアの笑いと思考が止まった。

それからしばらくの沈黙。マールリアはじっとその場に佇んで、自分の世界に入りこんだ。

（もしかして……。わざとこけてくれたの……？）

だとしたら、なんてクサイことをする人なんだろう——。けど、マールリアは嬉しかった。胸の奥から温かい何かが溢れてきて、ほわわとする。どこかで感じたことがある不思議な感情。それは、あのお花を貰った時とまったく同じ感情だった。

ふと現実世界に戻った時、いつの間にかラムは少し先を歩いていた。その背中がどこか照れているように見える。

すぐにマールリアは追いかけて、ラムの隣に来て、微笑んで、そして心を込めてこう伝えた。

「ラム……、ありがとうね」

「ん？ 何が？」

ラムはとぼけて空を見ている。そんな彼の姿を見てマールリアは俯き、口元に笑みを浮かべた。

（……私、ラムのこういうところ、好きだな……）

カッコ良くもカッコ悪くも無い、ごく普通の少年。ゆっくり、ゆっくりと遅足で、マールリアの心がこの少年に向かって動いていた。だけでも、『好き』というところへ到達する手前で、気持ち踏み留まる。なぜならば、ラムにはサラボナという恋人が居る。そしてマールリアは、いつか別の人と結婚するからだ。

【第七話・完】

マールリアが大きく扉を開けると、会議室にはいつもの顔ぶれが既に揃っていた。今日も仕事が無いのか、椅子に座ってゆったりとお茶を飲んでいる光景は、もう毎度お馴染みになってしまっている。「おはよう皆！」

マールリアが片手を上げて元気な一声を出すと、それに気づいてツイン・マジックの皆も次々と挨拶を交わす。

「マーヤ、おはよう」

「よっ！ マーヤ」

「おはよー、マーヤ！ マーヤが来るのを待っていたのよー！」
何やらルイザが嬉しそうにマールリアの元へドタバタと騒がしく走ってき、ぴしつと細長い布を両手で伸ばして見せた。

「見て見てこれ。前にツイン・マジック用の変装道具を作るって言うてたでしょ？」

それが完成したの！

「えっ、本当に作ったんだ！？」

マールリアの声のボリウムがいささかあがる。あのルイザのことだから単なる冗談だと決め付けていたが、こうやって本当に実行していたのでマールリアは驚き気味だ。

「っへー！ ルイザ面白そうな物を作ったな」

「さつきから一人で熱心に縫い物をしていると思ったら、そんな物を作っていたのね」

ラムとサラボナも興味深い眼差しで、ルイザの作った物を後ろから眺めている。この言い方だと、二人も変装道具のことをたった今知ったようである。

マールリアはルイザから目隠しを受け取り、よく見てみる。それは安っぽい生地、目が見える丸い穴が二つ開いているだけの、お

世辞にも変装道具とは言えないお粗末な物だった。だけど、

「わあ、いいじゃない！ こういうの一度付けてみたかったんだ！」

マールリアは目隠しを顔に近づけて、輝く瞳をその穴から覗かせた。こんなちよつとした物でも、マールリアにはすこぶるカッコよく感じてしまうのだ。

「定番中の定番だけどさつ、これこそヒーローって感じていいでしょー？」

ピースをこちらに向けながらルイザはニコニコと笑っている。どうやら自分の作品に大満足しているようだ。

「どれどれ、俺達にも見せてくれ！」

「使用許可を下すのは、リーダーのこの私だからね」

二人の会話を遠目から眺めていたラマとサラボナも、とうとう我慢できずに割って入り、ルイザに手を伸ばした。

「はいっ！ もう全員分作ったのよ。男の子が青で、女の子が赤ね！」

すると、ルイザから受け取った目隠しを広げて見るなり、さっとサラボナが難しい顔つきになった。

「……これじゃあ目の部分が相手にはつきりと分かるから、殆ど変装の意味がないじゃない」

「でも、身軽でいいと思うよー？ フードをかぶっていると前が見辛いじゃない。」

見た目だつてこっちの方がカッコイイし、一石二鳥よ！」

サラボナの意見に少しも動じず、ルイザは布を指先でチョンチョンと押しながら自分の意見を貫く。

そうしている間に、ラマは早くも自分の目に布を巻き終えていた。おっ、コレいいじゃん！ 俺は好きだぜ！」

両手を腰に当てて胸を張っているラマを見たルイザは、パチパチと拍手を鳴らし始めた。

「おお、思ってた通り、ラマちゃん似合うつ……！」

「ふっふーん、そうだろ？ 正義のヒーローは何を装備しても似合うんだよねー」

顎に人差し指と親指を添えてラマは図に乗り始める。けれども彼の言うように、緑の衣装に青の布がよくマッチしていて、なるほど様になっていた。

「うん、ラマ良く似合ってるわよ。かつこいいじゃない！」

マールリアは笑顔でラマを褒めた。もちろん軽い気持ちで言った社交辞令のつもりだったが、いきなりラマの顔は満面の笑顔に変化し、両手を伸ばしてマールリアの片手をぎゅっと握った。

「本当か！？ もっともつと褒めてくれ！！」

「ちよっ、ちよっと、何よ突然……！」

突如自分の片手をラマの両手で包み込まれて、ビクリと身体を反応させて身を硬くする。マールリアも相変わらず、ラマのこういう所にめっぽう弱いようだ。

そんな二人を呆れた瞳で見ていたサラボナ。彼女だけ皆とは違う意見を冷たく投げ放つ。

「どこがヒーロー？ さしずめお宝を頂戴する怪盗ってところかしら！」

「はいはい、言ってる」

小さく両肩をすくめて、ラマは声をあげて笑う。サラボナの皮肉めいたセリフなど今のラマには届いてないようだ。

サラボナは目隠しをチェックする為に、ラマの真正面から見たり、背後に回ったりと、じろじろと念入りに見つめた。そして結び目から垂れ下がっている余った布を掴んで、ひらひらと振りながらルイザの方に見せつけた。

「これは逃げる時に掴まれそうで危ないわね。もっと短くしなきゃ」
確かにその通りだった。結び目から余った布は、ラマのお尻の辺りまできている。

ところがラマは自分の布を握り、サラボナの顔に見ると言わんば

かりに近づけて反論した。

「ばっか、サラボナ！ ヒーローはこれぐらい長くないと！ 基本だろ？」

「そうそう！」

闇夜の中に忽然と現れて、目隠しを風でヒラリとなびかせるのがカツコイのよー？」

ルイザが楽しそうに笑いながら両腕を横にして、手をゆらゆらとくねらせた。

「あのねえ……」

カツコイとかそういうのは、ツイン・マジックに必要なくて――」

「こうなったら決めゼリフまで作らなきゃな！ 何かいい案あるか？ ルイザ」

小言を言い始めたサラボナを遮って、素早くラマが話を切り出す。するとルイザがキリツと眉と右腕を斜めに上げ、よく分からないポーズを決める。

「魔法戦隊ツイン・マジック参上とかは？」

「いいね！ それで行こうか！」

悪戯好きの悪ガキみたいに、片手を口元に近づけてシシシとラマは笑う。

「……………」

二人のやり取りを聞いて、サラボナは無言で顔を引きつらせながら後ろに数歩下がった。ラマとルイザのお馬鹿コンビのせいで、ツイン・マジックが次第に変な方向へ進んでいるような気がする。

「もう……。マーヤもあの二人に何とか言つてよ……！」

サラボナは後ろから身を乗り出して、さっきから一言も発しないマールリアに助けを求めた。その顔を覗き込んだ瞬間――、

「いえーい！ 私も今日からヒーローだっ！！」

威勢のいい声が響く。マールリアはいつの間にか目隠しをして、握った拳を高く上げていた。唯一真面目仲間だと思っていたマールリアもあちら側の人間だと分かると、サラボナは一気に体の力が抜

けてガクリとうな垂れた。

結局、この布の仕様許可は取り下げられることなく、サラボナ以外の三人によって強引に決定してしまったのである。

変装道具でひと盛り上がりした後、ようやく皆は落ち着きを取り戻して、自分の席に足を向かわせた。そして椅子に座るやいなや、サラボナが真顔で相談めいた話を切り出し始めた。

「今日はね、午後から個人的に行きたい場所があるんだけどいい？ 皆が手を貸してくれると、凄く嬉しいんだけど……」

どうしたのかサラボナのその口調は、これまでマールリアが耳にしたことも無いほど甘えたものだった。

「行きたい場所？ お仕事で？」

マールリアは不思議に思い、目隠しを外しながら問いかけると、サラボナはテーブルに視線を落として遠慮がちに言葉を続けた。

「仕事……、じゃないけどね。ほら、あの炭鉱送りになった兵士さんいたでしょ？」

その彼を、どうにか助けてあげたいと思ってね」

「ああ、あの時の兵士ね……」

静かにマールリアは相づちを打った。まだ記憶に新しい、自分の城へ忍び込んだあの時の話である。

「——それって罪悪感で助けたいのか？」

ラムが無表情で、皆が感じている疑問を直球でぶつけた。

そしたらサラボナはただじつと静止して、言いづらそうに言葉をとぎらながら、心の内を打ち明けてくれた。

「うん、きつとそう……」

もちろん敵兵を救出するなど、こんなおかしなことを繰り返していたら、私達の活動が意味の無いものになってしまう。

だから忘れようと必死に抑えていたんだけど……、やっぱりだめだった。

どうしても気になってしまって……。人の良さそうな兵士さんだったから……」

自分でおかしな行為だと理解しつつも、助けずにはいられない。そのサラボナの感情、マールリアは分かるような気がしていた。何故ならムーン城に住んでいるすべての人々が、揃って悪い人ばかりではないことを知っている。オリビアやじい、自分を世話してくれるメイド達、笑顔で挨拶してくれる兵士達。マールリアの周囲では自分に良くしてくれる人達ばかりだ。

フローライン王女を尊敬し、城を守る為に働いている者はほんの一握りで、大半の者が己の生活の為に働いている。そういう罪のない兵士の一人を、たまたま牢獄に居合わせただけで炭鉱送りにさせてしまった。サラボナはそのことを、胸の奥底ですつと気にし続けていたらしい。

そのサラボナの気持ちが伝わったのか、気づかぬ間に皆は笑顔に変わっていた。

「無神経であるより、はるかにいいじゃん。もちろん俺は付き合うぜ！」

ラマは親指をぐつと立てて、キザにウィンクなんかする。ルイザも両手で頬杖を突き、ころころと笑っている。

「敵兵のことを気にかけるなんてサラボナって優しいよねー」
無論、マールリアも二人と同じ感想を抱いていた。サラボナにしっかりと目線を合わせて、こう伝える。

「おかしなことだなんて全然思わないわよ。サラボナはとても人間らしいと思う！」

「……ありがとう、ラマ、ルイザ、マーヤ。恩に着るわ」
会議室の皆が意気投合し、サラボナはとても嬉しそうに顔をほころばせた。

そこで、マールリアはすぐにサラボナに疑問を投げかけた。
「決定したのはいいけど、その兵士をどうやって探すの？」

まさか一人一人あたって調べていくの？」

「えええー！？ そんな地道な方法しかないのー？ 炭鉱って広いんじゃないのー？」

サラボナはその兵士の顔覚えてるのー？」

続いてルイザからも質問攻めにされたサラボナは、眉間にしわを寄せ、頬杖をついて答えた。

「その点で頭を抱えているのよね……」。

炭鉱の広さも、見張りの兵士の規模も、全く見当つかないのよ」

「そっかあ。さすがにサラボナでもそこまで手が回らないわよね……」

がっかりして、マールリアは溜息を交えながら言った。サラボナのことだから、用意周到に下調べをしてくれていると図々しく期待していた。

「心配するなよ！ この俺が付いていればどんな所でも何とかなるって！」

ちよちよいのちよいで兵士を丸めてやるよ！」

真剣な話をしている最中だというのに、場の空気が読めないというか、いつもの彼というか、ラムが得意満面の表情で握った拳を元気に掲げた。

「寝言は寝て言ってね！」

冷たくあしらって、女三人は先程の話を続ける。

「炭鉱を片っ端から回るしかないわね。恐らく大汗をかくことになりそう……」

考えるにつれ、漠然としすぎて炭鉱へ向かう気持ち削がれていく。ルイザとサラボナは思い悩んでいるような顔。ラムは後頭部に両手を組んで寄りかかり、のん気に鼻歌なんか歌っている。一方、マールリアはぼんやりと一点を見つめて考えていた。

（炭鉱かあ……。その労働者達は一生奴隷扱いだとか……。きつと酷いことされているんだろうなあ）

胸の中が痛んだ。

（——私と雲泥の差よね……………）

またもやマールリアは、自分と労働者達の生活を比較して、自虐的な思考になってしまふ。だが、そんな思考を振り払うように大きく頭をふった。

（沈んでいる場合じゃない。こういう時こそ私が出来ることをやるべきよね）

マールリアは少し考えた末、両手をパチンと合わせて思いついたことを言ってみた。

「——ね、この際だから炭鉱の指揮官を倒して、働いている人達全員解放しない？」

労働者達は自由の身だし、お母様も困ってしまうはずよ！」

我ながら大胆な提案だと感じたが、一人の人間を懸命に探し回るより、手間が省けて断然良いと思った。

「そいつ面白そうだな。世にツイン・マジックの名を知らしめるチャンスだ」

「いいね！ いいね！ 絶対フローライン悔しがるわ！」

「そうね、確かに痛快かも！ マーヤもついてるから火力も何とかなりそうだし」

揃って皆はマールリアの案に同意してくれた。

やつのことで道が開け、次は炭鉱の位置だ。サラボナが奥の部屋へ消えていき、ややあつて大きな紙を片手に会議室へ戻って来た。そして地図が皆に見えるように、テーブルの上に大きく広げた。

三人は腰をあげ、テーブルの中心に頭を寄せて地図を覗き込んだ。見たところによると、ムーン王国のみが記されている簡単な地図だ。「炭鉱の位置は前もって調べておいたの。ここよ、炭鉱の町イノア」言いながら、サラボナが地図の一点に指を差す。それを見ても、やっぱりマールリアにはちんぷんかんぷんだったが、地図の端っこ

を示してあることから、国境の近くだということだけが辛うじて分かった。

そこを見るなりルイザが、げんなりとした表情を見せた。

「うへ……。国の端じゃない……。とんでもない時間がかかるわよ」
「徒歩で行くとか言うなよな。この距離じゃあ馬車でも数日かかるぜ」

目を細めて、ラマも憂鬱そうな言い方をする。

「どのみち、この町は山で囲まれているから馬車じゃ越せないのよ。浮遊術屋行きね」

「おおおっ！？ 久しぶりに奮発するじゃねーか、サラボナ！」

マールリアにはよく分からないが、ラマが妙に嬉しそうな声を発して、乾いた拍手の音を立てている。きっと、便利な乗り物があるお店なのだろう。

「『浮遊術屋』って？」

マールリアは初めて耳にする単語にぽかんとして、首を傾げながら訊いてみた。

「そんなことも知らないのか？ これだからお姫様は……」

やれやれ、と言う様にラマは両手を上げて肩をすくめた。

その態度にマールリアが少しむっとしていると、サラボナがそれを察してくれたようで、ゴツンツとラマの頭に鉄拳をぶつけた。

「バカッ！ そうやってマーヤをからかわないの！」

「イテテテッ……」

サラボナから頭を殴られて、ラマは痛そうに目を閉じ、頭を帽子の上から両手で押さえる。

気を取り直してサラボナが人差し指を立てながら、『浮遊術屋』の説明をしてくれた。

「お店で浮遊術を使える魔法使いが、ホウキに魔法をかけて『空飛ぶホウキ』を作ってくれるの。」

魔法の効果は一日よ」

サラボナの話聞いて、わくわくとマールリアの心が高鳴る。いつも窓から『空飛ぶハウキ』で空を飛んでいる人達を目にしていたが、残念ながら姫であるマールリアには乗る機会がなくて未体験。一般人が羨ましくて仕方がなかった。それが身をもって体験することができる。こんなに嬉しいことは無かった。

「わあ〜！ 憧れの空飛ぶハウキ！！ うっれしい！！」

爛々と目を輝かせながら、マールリアは両手をテーブルについてサラボナの方に身を乗り出した。

*

こうしてマールリア達は大通りにある浮遊術屋へと足を運び、店主から空飛ぶハウキを作ってもらった。

「マーマ、こうやって乗るのよ」

人通りがあまりない通りで、ルイザがハウキの柄にまたがり、ポンツと両足で地面を蹴った。すると、ふわっとルイザはハウキと共に空中へ高く飛び上がった。

「うっわあ、ルイザ上手ー！」

顎を上げ、あんぐりと口を開けたまま、マールリアは屋根より高い位置にいるルイザに見入っていた。

「はい、マーマのハウキ。初心者はバランスを崩して落ちやすいから、十分に気をつけてね」

注意を促しながら、サラボナがマールリアにハウキを手渡してくれた。

「よーし！」

ルイザのお手本どおりにハウキへまたがり、柄をしっかりと握って地面を蹴ろうとした、その直後。

「飛ぶのちよっと待った！ 初心者のマーマの為にベテランであるこの俺が、手取り足取り指導してやるよ！」

そう言ってラマが後ろに座ってき、マールリアの身体に両腕を回

して、まともに胸の辺りを触ってきた。背後から抱き寄せられた感触と胸を触られた感触に、思わずどきんとマールリアの心臓が大きく跳ねる。

「きゃあああー!!」

たまらずマールリアは悲鳴をあげ、素早く後ろを向いて反射的に右手を動かした。その瞬間、バチーンと盛大な音が鳴って、ラムの頬に痛い一発が命中。

「イッテッ!! ぶつことないだらっ!？」

とっさにラムは上半身を反らし、目をつぶって叩かれた頬を押さえる。

マールリアはいつものごとく顔を真っ赤にし、金切り声をあげてラムに怒る。

「今思いつきり胸触ったじゃないっ!!」

「マールヤがホウキから落っこちないように支えてやったんだよっ!!」

声を張り上げて自分を正当化するラムに、サラボナの表情が一瞬にして殺気立った。両手を腰に当てて、ラムに大きな雷を落とす。

「バカッ! どうしてアンタはそうやって悪乗りするのっ!? このスケベッ!!」

さっさとマールヤから離れなさいっ!!」

「イタタタッ、引っ張るなっ!」

問答無用でサラボナはラムの耳を引っ張り、無理矢理ホウキから降ろした。

「あはははっ、ラムちゃん面白い!! マールヤは大変だったねっ!!」

頭上からは、空に浮いているルイザの声が聞こえる。口では大変だったねなんて言いながら、全く同情するそぶりは見せていない。むしろ、はしゃいで喜んでいるようだ。

「ルイザったら他人事のように笑って〜! 触られた身にもなつてよ!!」

眉を八の字にし、唇を尖らせて空を見ているその時、聞き取りにくい小さな声がマールリアの耳に入ってきた。

「……あゝあゝ……。もっとマーマの身体触りたかったなあ……」
「……」

あまりに驚いてマールリアは絶句。

発言した犯人は当然ラマだ。横目で見ると、マールリアの手形ができた頬を擦りながら、一人でぶつぶつ愚痴を呟いている。

（もうっ……！ やっぱり下心あったんじゃない。本当にラマってエッチ……！）

マールリアの一旦引いた顔の赤みが、さっと再び染まっていく。もうひとつ文句でも言ってやろうかと思ったが、これ以上話がこじれたら出発が遅れそうだったので、この時ばかりは我慢して言葉を飲み込んだ。

四人はホウキにまたがり、横に並んで大空を飛んでいく。

「あー、気持ちいいー！　まるで鳥になった気分っ！！」

マールリアは、初めて乗る空飛ぶホウキに大きな感動を覚えた。澄み切った青い空、気分爽快な優しい風。だんだん小さくなっていく自分の城や街――。空中から見える景色は、例えば様がないほど綺麗だった。

「マーヤ、初めてで嬉しい気持ちは分かるけど、もう少し落ち着いてね」

「そーよ！　いくら運動神経のいいマーヤでも、あんまり動くと地面へ真っ逆さまだよー！」

あまりにもマールリアが大声をあげながら、せわしなく首を動かしているものだから、横で飛んでいるサラボナとルイザが心配そうな眼差しで見つめている。

だけどそれにもお構い無しで、マールリアは喜びをあらわにしていた。姫である自分には、ホウキに乗る機会など一生無いだろうと諦めていたからだ。

「こんな便利な物、もっと早くから活用していれば良かったのに」

マールリアは正直な気持ちを漏らした。これさえあれば自城へ忍び込んだあの時だって、救出した女の子を苦労してラマが背負わなくても済んだはず。

そんなことを考えていると、ルイザがこちらに顔を向けて発言した。

「その気持ち良く分かるんだけど、無理なのよねー。一般人はそう簡単にホウキへ乗れないのよ」

「えっ？　そうなの？」

「うん、とっても高いの。浮遊術をかけてもらうのに、一本五万ス

ターもするんだから！」

話しながらルイザはホウキから器用に片手を離し、『五』という意味を見せる為に手のひらをこちらへ向けた。

「五万スターって高いの？」

ぽかんとした表情でルイザに問いかける、相変わらず世間の常識に疎いマールリアだった。

すると、それを待つてましたと言う様な悪戯っぽい表情で、ラマが首を突っ込んできた。

「ほーら出たぞ、マーヤの世間知らず発言が！」

「何よ、また姫だからってからかうのっ！？」

再度からかわれたマールリアは、こらえることができず、顔を突き出してラマに食って掛かった。

けれど彼は、普段通りの余裕の表情。これがまた実に憎たらしい。「愛情表現としていじってるんだよ。マーヤの反応っていちいち可愛いんだよな！」

「かつ、可愛いっ！？ 愛情表現っ！？」

思わず高い声が口から飛び出した。可愛いと言われて嬉しくない女の子なんていない。マールリアも、ほんの一瞬だけ嬉しい気持ちに沸き上がった。……が、冷静に考えると、ラマは思わせぶりの行動や言動をよくする人間。だから『これしきのこと舞い上がってはいけない』と自分の胸に言い聞かせ、マールリアはつんけん振舞った。

「私じゃなくて、他にもしてあげなきゃいけない人がいるんじゃないっ！？」

その愛情表現とやらを！」

「へっ！？ 誰だそりゃ？」

「そのくらい自分の頭で考えてよね！」

相変わらず、ラマはマールリアの発言の意味を理解していないようだ。今も不服そうな顔つきで首を捻っている。

それを知らんぷりし、マールリアはルイザに視線を重ねて先程の話に戻した。

「――それでルイザ。五万スターでどれくらい高いの？」

「マ―ヤってば本当にお金の価値が分からないのね。」

「うーんとねえ……、どう説明したらいいのかなー」

困った顔をしながらも、ルイザはちゃんと教えてくれる。マールリアは大人しくルイザの次の言葉を待った。

「そうだ！ マ―ヤ、そのシュシュ幾らで買ったか覚えてるー？」

「えっと……、確か千スターだったわ」

「うんうん、とルイザが頷いてまた似たような質問をしてきた。

「じゃあ私と喫茶店に入った時、マ―ヤが飲んだジュースは幾らだった？」

「ジュースは五百スター……」

しばしの沈黙――。この時マールリアの頭の中で、『シュシュ』と『ジュース』と『ホウキ』がそれぞれ並べられて金額が比べられていた。

「ごつ、五万スターって、とんでもなく高いじゃないっ！――！」

突然マールリアが驚き声をあげると、ルイザがご満悦そうな様子で言った。

「やっと分かった？」

「う、うん」

「だから気安くホウキは使えないのよー。ほら、サラボナは『ド』が付くほどケチだから尚更ね！」

「ぱちり、とウインクをしてルイザが微笑む。

「納得したわ！ 分かりやすく教えてくれてありがとう、ルイザ！」「これぐらいお安い御用よ！」

この後「今、何か言った？」とサラボナがギラリと目を光らせたのは言うまでもない。

＊

ネタが切れずに弾む会話。皆と喋り続けたおかげでかなりの時間が経過し、もう陽は落ちてきて徐々に夕方へ近づいていた。やはり皆と一緒に過ごしていると、あつという間に今が終わってしまう。

「この辺ね」

そのサラボナの一声で景色を見渡すと、いつの間にか辺り一面が岩山だらけとなっていた。このような地帯だと、馬車では越せないというのも頷ける。

それからいくらしもないうちに、ぽつかりと穴が開いた様に山が無い部分に、沢山の建物が見えてきた。どうやら到着のようだ。

たった数時間で国の端まで飛べるとは、なんて素晴らしい乗り物なのだろうと、マールリアは更に感心した。高いお金を払う価値は十二分にあるようだ。

スーツとサラボナが降下していったので、マールリア達もその後に続く。小さな炭鉱町『イノア』の入り口に足を着けて、四人はホウキから降りた。

「ここから先は、ホウキから降りて行きましょ。町外れに炭鉱があるはずよ」

「了解！」

サラボナの言葉に三人は首を振り、ホウキを片手に町の中へ進んでいった。

ツイン・マジック一行は、人の流れに逆らうように歩いていく。ツルハシを肩に担いで歩く、荒っぽそうな外見の男。上半身裸で、泥と汗まみれで歩いている男。荷車を引いている男。今日一日の作業を終え、家路に向かう者ばかりだ。

大通りにはあちこちひび割れが入っているレンガで出来た建物が、

「ごちゃごちゃと建ち並んでいる。家の造りにも真新しさは特になく、古い町並みが残っているという印象。並んだ店では、おじさんやおばさんが威勢のいい声を出して客引きをしていた。人通りも多く、賑やかで活気のある町である。」

前を向いたまま、サラボナが語り始めた。

「この炭鉱には大きなお宝が眠っていると、昔から伝えられているんだって。」

だからフローラインは、奴隷達にその宝を掘り出させるつもりよ」「皆の口から「へえー、そうなんだ」という言葉が漏れた。

ムーン王国の最果ての地にある、炭鉱町イノア。サラボナが調べあげた情報はこうだ。

この町には小規模な炭鉱がいくつもあり、石炭を中心に採掘が行われている。今でも十分活気はあるが、昔はそれ以上に活気に満ちた町だったそう。

ところがある日のこと。ある一つの炭鉱がフローライン王女の手によって奪われ、以前から働いていた労働者達は強制的に追い出される形となった。何でもその炭鉱の中では、王女の命令に背いた者やヘマをした者が入れられ、奴隷の様な悲惨な扱いをされているという。

無論、稼ぎ場である炭鉱そのものが占領されて、住民達は黙っていなかった。反発の声をあげたり、頭数を揃えて特攻したりと幾度となく抵抗を試みた。だが、いずれも効果はなかった。反抗した者の殆どが捕まってしまう、同様に奴隷とされ、炭鉱から一生出られない身となってしまった。

今ではその炭鉱に近づく者はいないと言つ……。

「——住民達が反抗すればするほど、フローラインには好都合なのよ。」

大きなお宝を掘り出すために、多くの奴隷を必要としているからね」

サラボナが話し終わった後、ラマがチラリとマールリアの様子をうかがう。母親の悪事を聞いて、またマールリアが沈んでいるんじゃないかと、気にかけてくれているようだ。

そんなマールリアは「もう平気」というわけでもなく、胸に様々な思いを抱えたまま足を動かしていた。

*

歩いているうちに地面は歩きにくい砂利道に。そして建物や人気が徐々に減っていき、景色が寂しい場所になってきた。目的地へ近づいていることは明確だ。

やがて沢山の線路が見える広大な場所へ出た。炭鉱へと伸びるトロツコの線路である。奥には大きな岩山が見える。

サラボナが、腕を伸ばして指を差した。

「あそこね」

トロツコの線路が続く先に、アーチ型の穴が開いた炭鉱の入り口が見えた。その両サイドには、槍を持った兵士がそれぞれ立ち、不意の侵入者を見守っている。

四人は顔を見合わせ、こくりと一度頷くと『例の変装道具』を身につけ、大きく腕を振ってズンズンと大腿で歩いていった。

直ぐに兵士は正面から向かってくる怪しい連中に気づき、槍先を突きつける。

「何だお前たちは？ 滑稽な格好をして。ここは遊び場じゃない、早く立ち去れ！」

マールリアは受け答えもせず、片腕を伸ばして容赦なく手のひらから銀色の光の玉を撃った。これは、歩いている間に皆と話し合っ

て決めた行動だ。

「わあっ！」

光の玉は兵士の腹に当たり、そのまま押されて後ろの壁に激突した。

ずるりと壁からずり落ちて倒れる相方を見て、残った兵士は自分に迫る危機を察知し、即座に槍を構える。

「お、お前ら突然何をするっ！　ここはフローライン様の――」

「我々はツイン・マジックよっ！　今すぐにこの炭鉱の総指揮官をここへ連れてきなさいっ！！」

兵士が話している途中だというのに、サラボナが堂々と大きな声を出して強気な態度に出た。

「ツ、ツイン・マジック……！」

効果てき面。名前を聞いた途端、兵士は顔面蒼白になり、へっぴり腰で数歩後ろに下がった。この怯えようだと、ツイン・マジックの話は多少なりとも聞いているのだろう。

もはやこちら側のペースだ。サラボナは兵士の顔に指を向け、お構い無しにジリジリとにじり寄る。

「早くしなさい。さもないとあなたも只じゃ済まないわよ！」

「スッ、ステンドファ様はここから真っ直ぐ突き進んだ所に……」
口をもごもごさせる目の前の兵士に、サラボナはわざと大きな声を荒げる。

「居場所じゃなくて、ここへ連れて来なさいって言っているのっ！
あなた死にたいのっ！？」

「ひっ、ひいひいー！」

ついに兵士は恐怖に負けてしまった。両腕を上げ、情けない悲鳴をあげながら、すたこらと炭鉱内へ逃げ去ってしまった。

「――あーあ、行っちゃった……。やっぱりそんな上手くはいかないわねー。」

結局、強行突破かあ……」

穴の中を覗きながら、面倒そうに頭をぼりぼりと掻いているルイ

ザ。できるだけ炭鉱内へ入らずに事を済ませたい、というズルイ気持ちはマールリアも同じだった。

ところがサラボナとラムの二人は、そんなことをこれっぽっちも思っていないような顔をして立っている。

「のっけから門番なんかに期待してなかったわよ。居場所だけでも聞き出せたのが幸いね」

二人はこうなることを読んでいたみたいだ。いや、望んでいたのかもしれない。それを証拠にラムなんかは、たいそう自信ありげに「腕になるぜ！」と言いながら、両手を重ねてボキボキと音を鳴らしている。

気を引き締めて、いよいよ突撃だ。サラボナが皆の顔を見回して、きつちりと最終確認をした。

「作戦無しで突っ込むのは気が進まないけど、こうなってはやむを得ないわね。

いい？ 自分勝手な行動は禁止よ！ マーヤは大きな魔法の使用を控えてね！」

「わ、分かったわ！」

マールリアは両拳を構えて首を縦に振った。しっかりと返事をしたつもりだが、これから未知なる場所へ足を踏み入れると思うと、緊張して声がどもってしまう。『指揮官を倒して、労働者達を全員解放！』など口にするのは容易いが、いざ炭鉱を目の前にするとどうしても不安と恐怖が膨らんでくる。果たして上手くいくのだろうか……？ どうか身内に怪我人が出ないことを祈るばかりである。

そうして、四人は炭鉱内へ乗り込んでいった――。

「うっ！」

炭鉱へ飛び込んだ途端、むせ返るような悪臭に襲われて、マールリアは思わず顔をしかめた。

この臭いの出所は、労働者達の汗？ 排泄物？ …… 想像はしたくないが死体？ それらを連想させてしまうぐらい、強烈な臭いがそこら中に充満している。こんな環境の中で生活している兵士達は、鼻が麻痺でもしてしまっているのだろうか？

手で鼻を覆いながら目を向けると、サラボナ達もそろって顔を歪めている。だけど、ひたすら我慢をしている様子で、誰も何も口にしようとしめない。つまり、今はそんな些細なことを気にしている場合ではないということだ。マールリアはこの場から離れたい衝動を精一杯抑え、走り始めたサラボナに着いて行く。

四人は坑道の中を駆け走った。天井は坑木で岩が支えられ、壁には至る所に錆びついたカンテラが備え付けられている。相変わらず地面にはトロツコが走る線路が続いており、少しでも足をひっかけたらこけてしまいそうだ。炭鉱とはこんな場所なのか、とその光景を記憶に焼きつかせながらマールリアは足を動かしていた。

「こりや予想以上に広いな。はぐれたら迷子だぞっ！」

皆に声が届くぐらいの大きさでラマが叫んだ。彼が言うように、ここは途方もなく広い。既に幾つもの分かれ道に遭遇し、通過して行った。一度でも角を曲がってしまえば、自分の現在地が分からなくなるかもしれない。やはり門番から道を聞き出していて、正解だったというわけだ。

時折すれ違う労働者達が、マールリア達の姿を見て呆然としていた。今では誰も近寄らない場所に侵入者が現れたものだから、そ

の表情も無理は無い。ボロボロな衣類で瘦せこけた彼らを見ていると、一刻も早くこんな場所から解放させてあげたい、とマールリアは感じた。

それはそうと、あの逃げ出した門番によって今頃情報が広まっているはずだが、どんなに走っても兵士達の姿が見当たらない。

「変ね……、兵士達が一人もないわ」

サラボナがそう呟いた矢先のことだった。

「あそこにいるぞー！ 全員ひっ捕らえろっー！！」

噂をすれば何とやら、小暗い道の奥から男の声が響いた。そしてその声と共に、数人の兵士が前方から走ってきている姿が視界の中へ飛び込んだ。ようやく敵のお出ましのようだ。

「来たわよっ！ みんな大丈夫？」

サラボナが走りながら、顔を横に向けて皆に尋ねる。

「俺にまっかせなさい！！」

「準備万端よ！」

「はい！！」

拳を勇ましく挙げ、それぞれやる気のある返事をした。そして走る速度を上げ、四人は前から向かってくる兵士達に自ら接近して行った。

「とおっー！！」

「おりゃっー！！」

「やつーー！！」

「えーいっー！！」

サラボナは鋭いタロット・カードを飛ばし、ラムはホウキを兵士の頭に振り落とし、マールリアは光の玉を撃って兵士を吹っ飛ばし、ルイザは小さな光の玉を兵士に飛ばした。

「うわあっー！！」

攻撃を食らった兵士達は、声をあげて次々と地面に倒れていった。

「雑魚なんて余裕余裕ー！ 魔法無しでいけちゃうぜっ！」

走りながらラマがホウキの柄を肩に乗せて、けらけらと笑った。

「コラッ！ 調子に乗ってホウキを壊したりしても私は知らないからねー！」

先頭にいるサラボナが、後ろを向いて怒った。

「壊れたら三号の後ろに乗ればいいだろー！？」

「冗談じゃないっ！ 乗せないわよバカッ！！」

なんの悪びれる様子もなく言い放つラマに、マールリアも大声で言い返す。

そうしていると背中から、うるたえたルイザの声が聞こえた。

「いつ、一号、後ろに！」

全員来た道を振り返ってみた。なんと坑道の角から続々と兵士達が曲がってきて、マールリア達の後を追って来ていた。マールリアは驚いて、サラボナの背中に早口で声をかけた。

「うわあっ、兵士が大勢迫って来てる！ どうするの一号っ！！」

「このまま突っ走って！ あそこの先に、広い空間がありそうなの！」

サラボナが指差した先に、より大きな入り口が見えていた。

あれよあれよという間に四人は長い炭鉱道を通り切って、かなり広い空間に出た。

「うっ！！」

ここで突然、サラボナが足を止めた。

「わわわわっ！」

三人は勢い余ってサラボナの背中に、次々とぶつかっていった。即座に体勢を整えて前方を見ると、サラボナがいきなり足を止めた理由が分かった。マールリア達の前に、数え切れない程の兵士達がわんさかと集まっていたのである。マールリア達がここへ辿り着くのを、待ち構えていたらしい。

「わああああっー！！」

ホウキを両手でブンブンと振り回しながら、ルイザが奇声を発する。土壇場に追い詰められて、パニックを起こしているようだ。

かくいうマールリアも驚くべき光景を目にし、身体からサツと血の気が引くのを感じていた。まさか、こんなにも兵士の数が揃っているとは思ってもいなかった。だがそれも直ぐに、サラボナの強い叫び声でかき消された。

「皆、うるたえないでっ！ 落ち着いてっ！」

さすがと言うべきか彼女はこんな状況なのに、少しも臆することもなく何時もの自分を保っている。

「落ち着いてと言われても、このままじゃ挟み撃ちにされちゃうわよっ！」

前と後ろを交互に見ながら、マールリアは余裕の無い声をあげた。前方には大勢の兵士が待機、今来た道からは、激しい勢いで兵士達が迫ってきている。

「どーするんだっ、一号っ！」

「三号^{マヤ}、一先ずこっちからお願いっ！」

追っ手の兵士の方が危険だと判断したサラボナが、そちらに指を向ける。

即刻マールリアはそちらを向き、手のひらから銀色の光を飛ばした。少しでも魔法の大きさが狂えば、坑道が壊れてしまうという意識を頭にチラつかせながら。

「ムーン・ライトッ！！！」

「う、うわっ！」

マールリアの放った大きな光の玉を見た瞬間に兵士達は足を止め、それから逃げる為に逆戻りし始めた。しかしそれももう手遅れだった。光の玉はどんどん追いついて行って、兵士達の背中に激突した。「うわああー！！！」

兵士達は悲鳴をあげながら、通路の奥に飛ばされていた。

マールリアは安堵の息を吐きながら、構えていた両腕を下ろした。

「ふう。魔法の調節、上手くいった……」

「さすが、三号の魔法の威力はすげーな……。助かった！」

笑顔でラマから肩を叩かれて、マールリアも顔を崩して笑った。

「のん気に喜んでる暇なんてないわよ！　まだこっちが残っているわっ！」

緊迫したサラボナの声で、素早くマールリア達は振り向いた。そこには大勢の兵士達がいる。追っ手を排除したといっても、依然として危険な状況真っ只中であつた。

兵士達は凄まじく緊張した様子で、槍先をこちらに構えていた。マールリア達も腰を落として、ぐっと構える。果たしてどちらが先に動くのか。両者の睨み合いが続く中、どこからか女の声が聞こえた。

「お前達が中央を騒がしている、噂のツイン・マジック？」

兵士達の中心を割って、その声の主が現れた。真っ赤な髪に、真っ赤な口紅を塗りたくり、真っ黒な衣装を着ている何ともケバケバしい女だ。

女は兵士達の前に出て立ち止まり、ツンとすました表情で腰に片手を当てた。

「ここはフローライン様から任された大切な場所なのよ。」

そこへ堂々と足を踏み入れるなんて、なかなか勇敢な勇者様ねえ」

どうやらこの女が、お待ちかねの総指揮官らしい。歳は二十代後半ぐらいで、髪には三日月をかたどった髪飾りをつけている。これはムーン王国で『位の高い者が付けている印』だ。兵士長や、シエル大臣達も同じ物を付けている。

「まっ、アタシもちょうど退屈していたところだし。」

そうねえ……。せつかくこんな所まではるばる来てくれたから、特別に話す猶予を与えてあげるわ。

死ぬ前に何か言っておきたいことでもある？」

女は腕を組み、ふんと鼻をならす。完全にこちらを小馬鹿にしている態度だ。

「よっしゃっー！　ここは決め台詞いくぞっー！！」

突然、勢いのある声で切り出したのはラマだ。拳を掲げながら、いつもの自信顔をしている。

そのラマの勢いに背中を押されたのか、ルイザも「おーしっ！　やってやるわー！」と叫びながら左腕をブンブンと回した。先程までの混乱ぶりはどこへ行ったのか、不思議でしようがない。

四人はホウキを地面の脇に置き、女の前で横一列に並んだ。

「……？」

一体何が始まるのか、と女は不思議そうな表情をしながらも、その瞳には好奇の色を含ませていた。

「ツイン・マジックのムードメーカー、四号参上っ！」

ルイザが腕を伸ばして、ビシッと天井に指を差した。

「ツイン・マジックの火力担当！　三号参上っ！」

マールリアは強気な顔を作って、人差し指を女の方に向けた。

「ツイン・マジックの天才魔道士、二号参上っ！」

ラマが人差し指と中指を立てて額に当て、ニヤリと笑った。

「そしてえええっ！！　この私がツイン・マジックのリーダー、一号っー！！」

人一倍大きな声を荒げたのはサラボナだった。その上、言い終わった後は両手を腰に当てて、どうだ顔だ。

「え」

あんなに呆れていたサラボナが乗ってきたので、三人は首を動かして一斉に見つめた。

「ゴホンッ。な、なによ……、いいじゃない……私がやっても」
少し照れた顔つきをし、サラボナは拳を口元に当てて咳払いをした。

「流れ星のように現れて、流れ星のように去っていく……！
我らムーン王国正義のヒーロー“魔法戦隊ツイン・マジック”ここに見参っ……！」

四人は高らかな声と共に右腕を上げて、決めポーズをした。

さつきから同じ姿勢で様子を見ていた女が、いきなり上半身を反らせて高笑いを始めた。

「キャツハハハッー！！ 何アンタ達おもしろーいっ！！
宜しくねー、ツイン・マジックの皆さん。キャハハハッー！！」

ツイン・マジックの四人は女の急激な豹変ぶりに驚き、一瞬ぽかんと呆けた。彼女にこんな一面があったとは……。

「わっ、笑っている場合じゃないですぜ、ステンドファ様！

ツイン・マジックの中には、強力な魔法を使える奴がいると耳にしました。

油断していると危険ですぜ！」

兵士の一人がステンドファに寄り、焦り声で伝えた。ところがそんな兵士の忠告も、ステンドファには馬耳東風なご様子だ。

「アタシもそれやりたーいっ！！ キャハッ、キャハハハッー！！」
今度は笑いながら、その場でじたばたとしている。

マールリアは指揮官にあるまじき姿の彼女を見て、いぶかしんだ。

「ねえ、一号。^{サラボナ}あの人本当にここの総指揮官なの？」

「頭悪そう……。とても指揮官には見えないわ」

首を左右に振りながら、呆れ声で答えるサラボナ。

「ラマも相手を疑わしそうな目つきで見ている。」

「きつと偽者だぜ、あいっ」

「失礼ねっ、アンタ達！！ アタシはれっきとしたここの総指揮官。
『紅蓮のステンドファ』と呼ばれているのよっ！」

ステンドファは胸をバンと叩いて怒鳴った。四人から言いたい放題言われたせいで、イライラ顔に早変わりしている。

「——ならば、総指揮官ステンドファ！

この炭鉱を明け渡し、直ちに出て行なさいっ！！」

サラボナがきつぱりと言った後、タロット・カードを胸の前に構えた。

「罪の無い人達を苦しめるなんて、このツイン・マジックが許さないわよっ!!」

両拳を前に構えて、マールリアも攻撃的な姿勢を見せた。

続けて、ラマとルイザも同じように叫ぶ。

「悪者は正義のヒーローが成敗してくれるわっ!!」

「尻尾巻いて逃げるなら今のうちよ!!」

うちには最強の三号がいるんだから!!」

だがこんな脅しの言葉が通用するはずもなく、ステンドファは面白そうに目を細め、赤い口紅のついた口を大きく開いた。

「キャハハハッ!! いいわよ、やれるものならやってみなさいよっ!!」

後で泣きを見るのはアンタ達だから!!」

この余裕の態度を見る限り、彼女は相当な魔法の使い手らしいと推測できる。

あからさまに臨戦態勢へと入り始め、全員が緊迫した表情に切り替わった。兵士達からゴクリと息を呑む仕草が見受けられる。

先に動いたのはステンドファで両手を前に突き出し、その腕を微かに震わせた。するとボツと火を点す音と共に、小さな青白い炎が出現した。

「おいっ! 石炭があるような場所で、炎の魔法なんか使っているのかっ!？」

自殺行為だろっ」

ラマが慌てたように一歩前へ出て、ステンドファに訊いた。

「キャハハッ、私もそこまで馬鹿じゃないわ!」

これは人肉しか燃えない不思議な青い炎。

アンタ達を飲み込んで、瞬く間に消してやるわっ!!」

さすが炎を操る火星人。様々な種類の炎を作り出すことができる

らしい。

（わっ……！）

マールリアは思わず身がすくんだ。その理由はステンドファが作った炎が、気付かぬ間に大きさを増していたのだ。彼女の手の前で、青い炎がゴオゴオと嫌な唸りをあげている。人の背丈ほどの大きさの立派な火の玉だ。

（みんな何も言わないけど、大丈夫なのっ！？ あんな大きな炎を食らったら黒コゲよっ！）

マールリアは、相手の攻撃を避けられる自信がなかった。

そうこう考えているうちに、ステンドファは左足を上げて踏み出し、右腕を大きく振って炎の玉を投げてきた。

「くらいなさいっ！！ ブルー・ファイアーッ！！」

ゴオオオオと鳴る音と共に、勢いよくこちらへ迫ってくる大きな青い炎。その時、皆の前にラムが躍り出し、両腕を伸ばした。

「ここは俺の出番だっ！ スローモーションッ！！」

ラムのお得意の魔法だ。手のひらから銀色の光線が飛び出し、炎の玉に命中。その途端、炎はのんびりと動き始めた。

四人は左右に分かれて、ゆっくりと向かってくる炎の玉を余裕で避けた。

すぐさま、マールリアは両手のひらを相手側へ向け、力を込めて銀色の光を作り始めた。ステンドファはスピードが遅くなった炎に気を取られすぎて、それにまだ気付いていない。

「ええっ！？ うっそーん！ 一体何をしたのよー！」

「へっへー、残念でした！」

俺の天才的な魔法がある限り、お前の炎はあたんねーよっ！！」

愕然としているステンドファに向かって両手をひらひらと振り、べーと舌を出すラム。わざと相手を挑発して、時間を稼いでくれているようだ。そのおかげで、マールリアの魔法も完成した。

「今よっ！ みんなっ！」

サラボナの合図で、ラマ以外の三人が一斉に攻撃をしかけた。

「やあああー！！」

「ムーン・ライトッ！！」

サラボナはタロット・カードを投げた。ルイザは小さな光の玉を乱れ撃ちに。そしてマールリアは一步前に出した右足に重心をかけて、大きな銀色の光を相手にめがけて放った。

皆の力が一つとなつて飛んでいった。次の瞬間、大きな光の玉がステンドファアを突き飛ばす。ステンドファアは成す術もないまま、大きな光に押されていった。もちろん彼女の周辺にいた兵士達も、巻き込まれて一緒に押されていった。その光景といたら、まるで人ごみの中を彗星が素早く突き抜けていくようだった。

「きやああああー！！」

「うわあああー」

引き裂くような悲鳴が炭鉱内に響き、奥まで飛ばされたステンドファアは兵士達と共に倒れた。あれ程大きな魔法をぶつけたのだから、暫く起き上がってくることはなさそうだ。

そんな恐ろしい光景を目にした残りの兵士達。紙のような白い顔色でガタガタと震え、小さく縮こまっている。恐怖心で戦意喪失している様子だ。

「う、嘘だ。ス、ステンドファ様が……！」

「さあ、次はあなた達の番よ！」

人差し指を兵士達へ向けて、サラボナが止めの言葉を発した。

「うっ、うわあああー！！」

兵士達は槍を投げ捨てて、先を争うように走っていった。

「やったあ！ やっぱヒーローはこうでなくっちゃっ！」

拳を高く上げて、マールリアはその場で飛び跳ねた。痛快で何と

も気持ち良かった。

「あらら。攻撃を加えるつもりなんてなかったのに、ちょっとはったりをかけてみたら逃げていっちゃったわ」

徐々に小さくなっていく兵士達の背中を見つめながら、サラボナがあっけらかんとした顔で前髪を掻きあげた。

ラマも腕を組んで、拍子抜けした表情をしている。

「ずいぶん楽勝だったな……」

「あの魔女も見掛け倒しだったわねー！」

マーヤが本気出したら、フローラインの犬なんか足元にも及ばないんだからっ！」

「そりゃないぜ！ 俺だって活躍したのによー！」

不満げな表情を浮かべたラマに、ルイザが背中をポンポンと叩いてよいしよした。

「ハイハイ、ラマちゃんもスゴイよー！」

「そうだろー！ 俺の魔法は凄いんだぜっ！」

ラマは両目を閉じて、ひとりニヤニヤと悦に浸っている。皆はくすくすと笑った。

*

ステンドファの兵士達は、恐れをなして全員退散したようだ。その後が大忙しだった。マールリア達は炭鉱内を回り、サラボナは浮遊術屋へと走った。労働者の中には他国の者もいるので、魔法の水ウキをどうにか無料で作ってくれないか交渉に行ったのである。

労働者達に会うために、マールリア達は手分けをして各部屋に回った。マールリア達と顔を合わせた労働者達は、何が起きているのか把握できていない表情をしていた。もう自分達を救ってくれる者など誰もいないと諦めていたはずだから、驚くのも当然だ。

浮遊術屋と話をつけてサラボナも合流し、四人は炭鉱の入り口で全員逃げるのを見守った。入り口から労働者達の列は延々と続いた。出る際に両手を握ってこちらにお礼を述べる者、腕で目をこすって、涙を拭っている者。両手を上げて喜ぶ者、喜びを分かち合って抱き合っている者。様々な人達が出て行った。

ついに入り口から出てくる労働者達の列が切れた。

「全員出たみたいよ、終わったわね！」

労働者達は晴れて自由の身になり、そして戦闘も勝利で飾ることができて言うことなし。始めはどうなることやらと思っていたけれど、案外上手くいった。満足感に満たされて、マールリアは思わず笑顔がこぼれる。

「よし。目的も達成できたことだし、ぼちぼち引き上げるとするか！」

ラマも両手を腰に当てて笑っている。

「サラボナが助けたかった兵士さんも、きっと逃げたよねっ！」

あっ、良いことした後は気持ちいいわーっ！」

くるりと回転して、ルイザがスカートをひるがえす。

「皆のお陰で労働者達を全員解放することができたわ。」

本当に有難う。心から感謝するわ」

清々しい表情で、みんなにお礼を述べるサラボナ。重い負担から解放されて、きつと気が楽になったに違いない。

その時だった。突如サラボナが険しい顔つきで、マールリアの背後を指差した。

「——マ—ヤ、後ろに誰がいるっ！」

「えっ!？」

ギョツとするような鋭い声に、マールリアは飛び上がりそうになった。とつさに後ろを振り向いて、その人影に目を止めた。——マールリアの青い瞳と、金色の瞳が重なる。

そこには……。自分よりも年下と思われる少年が一人立っていた。薄汚れた服に、ドロで汚れた土色の髪。半袖から出た腕なんかは、痛々しげな擦り傷だらけで見たものじゃない。その資格好で、紛れもなくこの労働者だということが判る。

「……どうしたの、君もこの労働者よね？」

早くこの場所から離れないと、兵士達が戻って来たらまた捕まっちゃうわよ」

マールリアは少年の肩にそっと右手を置いて、優しく声をかけた。しかし――、

「……」

「家はどの辺？ 道覚えている？」

「……」

幾らマールリアが話しかけても少年は押し黙ったまま、こちらを見つめているだけだ。これではちがあかない。いつまで経っても答えそうにない少年に困ってしまい、マールリアはサラボナを頼りに視線を走らせる。

「もしかしたら帰る場所が無いのかも……。そういう人がいてもおかしくないわよね。」

私としたことが、すっかりしてたわ……」

そう発言したサラボナは、自らの軽はずみな行動を今更悔やんでいるようだった。労働者達を解放することで一杯一杯になり、後先のことまで頭が回らなかったのかもしれない。

「ほぼ行き当たりばったりだったし、こればかりは仕方ないじゃないか。」

それよりどーすんだよ、この坊や」

「うーん……」

ラマから本題をぶつけられ、こめかみを手で押さえながらサラボナが唸る。皆も同様に、思案に暮れていた。

サラボナが一体どんな答えに辿りつくのか。マールリアが口を閉じて見守っていると、

「……さん」

微かに少年が唇を動かした。声が小さくて何を言っているのか聞き取れなかった。

「えっ？ 何？」

マールリアは耳を傾けて、少年に聞き返した。

すると突然、少年が両腕を伸ばしてマールリアに飛びついてきた。

「姉さんっ！！ 会いたかったっ！！」

驚きの言葉を発して――。

【第八話・完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4264q/>

ツイン・マジック

2011年11月18日03時14分発行